

令和元年度
茨城大学学生地域参画プロジェクト
活動報告書



令和元年度 学生地域参画プロジェクト報告書

- 令和元年度学生地域参画プロジェクト報告書の刊行にあたって……………3
茨城大学社会連携センター長 西野 由希子

□活動報告

◎令和元年度学生地域参画プロジェクト活動報告

- ◎ IoT を用いた茨城県観光業活性プロジェクト「Bridge」……………4
代表者 工学部3年 齋藤 広明

- ◎ のらボーイ&のらガール 食農教育プロジェクト……………7
代表者 農学部3年 武田 迅

- ◎ FES (FoodEducationSupporter) ～食育応援隊～……………10
代表者 農学部3年 伊藤 友紀

- ◎ さまーすくーる in 大子 2019……………13
代表者 教育学部3年 黒畑 晴喜

- ◎ 地域の伝統文化継承に学生が取り組む「西塩子の回り舞台」プロジェクト……………18
代表者 人文社会科学部3年 河井 孝太

- ◎ 『みとっ歩ーゼロから始める水戸生活ーvol.3』制作プロジェクト……………21
代表者 教育学部3年 阪井 一仁

- ◎ 茨城大学地質情報活用プロジェクト……………24
代表者 理学部4年 鈴木 大河

- ◎ まなびの輪……………29
代表者 人文社会科学部3年 須郷 まどか

- ◎ 五浦遊学ルートマップ作成プロジェクト……………34
代表者 人文社会科学部3年 三上 りか

◎ 水戸堀町・ひたちなか市における地域資源の活用……………	37
代表者 工学部2年 冨田 雄介	
◎令和元年度学生地域参画プロジェクト(スタートアップ版)活動報告	
◎ 福祉や健康をテーマにした多世代参加型のまちづくり……………	41
代表者 人文社会科学部3年 萩原 健太	
◎ 大学生による“ものづくり教室”の企画と実践……………	49
代表者 工学部4年 清水 喬宏	
◎ 茨大生×地域防災プロジェクト(茨大東北ボランティア*Fleur*)……………	53
代表者 人文社会科学部3年 中橋 彩乃	
◎ 大洗応援隊！Presents ほげ Fes～音楽で広がる商店街～……………	58
代表者 人文社会科学部2年 森田 耕平	
□特別編 学生地域活動発表会 2019<はばたく！茨大生> 発表会資料	
◎特別編について……………	60
◎発表団体一覧……………	61
◎資料	
◎ パワーポイント資料……………	63
◎ ポスター資料……………	105
◎ 配布資料用……………	119

「令和元年度 学生地域参画プロジェクト 報告書」の刊行にあたって

「令和元年度 学生地域参画プロジェクト」の報告書をお届けいたします。

「学生地域参画プロジェクト」は、地域での活動に自主的、主体的に取り組もうという学生たちのグループに、大学が予算や助言などによって支援を行うもので、15年以上継続してきました。この間に、非常に多くの学生たちが自分たちの興味や関心、大学での専門分野、地域からの要望などに応え、さまざまなテーマで地域での活動に取り組んできました。メンバーと相談しながら活動計画をたて、予算を考え申請書を書いて応募するということが学生にとっては大切な経験です。活動の過程でうまくいかないことが出てくることがあったり、ご支援やよい出会いなどによって本人たちが思っていた以上の成果をあげたりすることもあります。発表会のために活動を整理し、報告書を書く、そういう経験を通して学生たちが成長するのを見てきました。本報告書で、今年度のプロジェクトの成果、成長をご覧いただきたく思います。

こういった学生たちの活動を地域や企業・自治体のみなさまに聞いていただき、参加のみならずと学生たちとの交流を図るために実施しているのが「学生地域活動発表会〈はばたく！茨大生〉」です。今年度は、2020年3月3日に予定していましたが、この発表会では「学生地域参画プロジェクト」に限定せず、部活動・サークル、授業等において、地域で活動している学生たちにも発表を呼びかけました。発表参加団体が決定し、学生たちはパワーポイント資料を投影しての口頭発表の準備、会場でのポスター発表のためのポスターや配布資料のための資料作成をすでに行っていましたが、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、3月3日の発表会は中止とせざるを得ませんでした。今年度の「令和元年度 学生地域参画プロジェクト報告書」には「特別編」に、この3月3日の発表会のために学生たちが用意した資料を収めています。口頭発表、ポスター発表の資料用に作成されたものであるため、前半に収めた最終的な「活動報告」とは必ずしも完全には対応、一致していない部分もあるかと思いますが、学生たちが一生懸命に準備した思いをくみとっていただければと思います。

本学では「iOP（アイオーピー）」も本格的にスタートし、学生たちが地域や世界など学外に積極的に出かけ、学びを深める機会をあとおししています。本「学生地域参画プロジェクト」を含め、学生たちの地域での活動・学修について、今後ともご支援をいただきたく、お願いをいたします。

茨城大学 社会連携センター長

西野 由希子（人文社会科学部教授）

IoT を用いた茨城県観光業活性プロジェクト 「Bridge」

代表者：工学部機械工学科 3年 齋藤 広明

連携先

行方市役所 政策推進室
シティプロモーションG 横瀬 文也

できる。

・LINEBot を使用していただいた方々（任意）の基本情報などをデータ分析が可能

顧問教員

米倉 達広（工学部・教授）

以上の点を踏まえて LINEBot を使用してスタンプラリーを実施した。

参加者

石寄 直樹 工学部機械工学科 3年
黒澤 拓真 工学部機械工学科 3年
齋藤 広明 工学部機械工学科 3年

プロジェクトの成果報告

行方市で毎年開催されるふれあい祭りで LINEBot を用いたスタンプラリーを実施した。方法として、各ブースをご利用いただいた方々にポイントを付与する形で導入した。景品を行方市のアメニティ、行方市産のお米などの、行方市に関するものにする事で地域の魅力度を向上させること及び、地域内の資源を循環させることを目的とした。

プロジェクトの概要

近年、茨城県は日本でのランキングで最下位を独占している。一方で海外からの観光客は増え続けている。これらのデータから茨城県には決して魅力が無いわけではないことが分かる。私たちが注目した問題点は、各観光地が離れていることだ。人気の観光地では、観光地が密集しており、集客に苦勞をしていない。しかし、観光地を密集させることは非現実的であり、観光地の価値を下げてしまう恐れさえある。観光地が離れている問題をテクノロジーで解決し、観光業から茨城県を活性化することを本プロジェクトは目的としている。今回はスタンプラリーに注目した。従来行われていた紙媒体のスタンプラリーではなく、LINEBot を用いたスタンプラリーを実施した。

また、LINEBot 内で行える抽選会を実施し、スタンプラリーを始めるきっかけ作りなどをした。実際には、抽選はスタンプラリーを始めるきっかけだけでなく、初日使用していただいた方が 2 日目にお祭りに来る動機にもなった。お祭り開始前には、お祭りに関するポスターやチラシなどに LINEBot の友達追加 QR コード掲載することで、お祭り前に LINEBot から情報を発信をした。

LINEBot を用いるメリット

- ・スタンプ用紙などの紛失、劣化などが無い
- ・導入コストが低い
- ・LINEBot を用いて常に新しい情報発信が

また、LINEBot 内ではお祭りに関する地図情報や、ステージで行われる催しのスケジュールに簡易的にアクセスすることを可能にした。

実際にお祭りで導入したところ LINEBot は約 300 人の方々にご利用いた

だった。景品を得るために 300 人の方々を各ブースに積極的に活用してもらうことができたため、お祭り当日では、いくつかのメディアから取材を受けた。

- ・行方市公式ブログ「なめがた日和」

https://namegata.mypl.net/mp/diary_namegata/?sid=68743

- ・茨城新聞
- ・なめがたエリアテレビ



(写真 2) 景品交換所の様子



(写真 1) 今回用いた LINEBot 内画面

LINEBot 使用者のデータ分析結果 (写真 3) から、女性の方の使用率が多いことが分かった。50 代以上の女性が最も多く、今回のプロジェクトで懸念していた、高齢者の方々の LINEBot 使用に関する不安を一掃する結果となった。



(写真 3) LINEBot 使用者のデータ分析結果

課題点としては、LINEBot を友達追加する過程などで多くの説明を必要となる方が多かったので、導入しやすいように簡易的な説明などが必要だということが分かった。今回は、そのようなすべての問題を景品交換所で対応した。

今後の展望としては、規模の拡大、長時間に及ぶ試験運用を検討している。理由としては、お祭り前までに導入を促すアナウンス期間が短く事前に友達追加してもらう時間が短かった。また、導入後二日間のみ運用となったので導入期間を長くし、使用者が長期的にメリットのあるサービスを提供し、経過を観察したい。

茨城大学農学部 のらボーイ&のらガール食農教育プロジェクト 地域との関わりを大事にした食農教育

代表者：農学部地域総合農学科 3年 武田 迅

連携先

農園

そば農家（個人）

そば打ち同好会

阿見町男女共同参画センター

JTファーム

グラウンドワーク笠間

顧問教員

小松崎 将一 農学部教授

参加者

浦本 匠	農学部食生命科学科 3年
山田 寛大	農学部食生命科学科 3年
秋山 健太	農学部食生命科学科 3年
川村 拓	農学部地域総合農学科 3年
鴻巣 友宏	農学部地域総合農学科 3年
佐柄 朝飛	農学部地域総合農学科 3年
高嶋 尚哉	農学部地域総合農学科 3年
武田 迅	農学部地域総合農学科 3年
野口 和太	農学部地域総合農学科 3年
加藤 達弘	農学部資源生物科学科 4年
菊池 裕貴	農学部資源生物科学科 4年
青地 沙紀	農学部生物生産科学科 4年
佐藤 菜々実	農学部生物生産科学科 4年
萬代 津希	農学部生物生産科学科 4年
中駄 佑介	農学部資源生物科学科 4年
熊倉 琴音	農学部地域環境科学科 4年
黒田 麗香	農学部地域環境科学科 4年
佐藤 志穂美	農学部地域環境科学科 4年
綿引 彩華	農学部地域環境科学科 4年
一石 美咲	農学部地域環境科学科 4年
磯崎 友輔	農学部食生命科学科 2年
遠山 可奈	農学部食生命科学科 2年
遠山 佳甫	農学部食生命科学科 2年
宮本 拓武	農学部食生命科学科 2年

プロジェクトの概要

阿見町を中心とし、地域の方々との関わりを大切にすること、また、耕作放棄地となっていた土地を畑として使用することにより、耕作放棄地の有効利用することを目的としました。

上記の目的を意識し、地域の方にお借りしている畑を使用し、そばの種まき、そばの収穫、そば打ちイベントを地域の子どもたち、保護者の方々とともに行うことにより、食農教育について深く考えていただくとともに、私たち学生もより一層食農教育を深く考える機会となることを目標として行いました。

その他にも、2月に農業・農村を応援する大学生サークルネットと呼ばれる組織の活動への参加、10月に行われた茨城大学農学部の文化祭「鋤耕祭」へ参加し、出店しました。

活動は、週1日で主に土曜日の午前中に行いました。また、イベントやその他有事の際は、その都度活動を実施しました。

プロジェクトの成果報告

1 耕作放棄地となっていた土地の有効利用について

昨年お借りしている畑で、耕作放棄地となっていた場所を今年は畑とし、有効利用することを目的としました。

耕作放棄地となっていた場所を畑とする際、不必要な草木、石の排除や地域の方の力をお借りして土地の整地を行いました。

また、作物を育てるために適切な土壌の状態にするために、土壌診断を実施していただきました。診断結果をもとに、馬糞や肥料の量を調節し、畑の状態を整えました。そして、農作物の収量を上げることができ、

イベントでも、野菜の収穫などを行い、楽しんでいただくことができました。

2 イベントの企画・運営について

1) 企画について

イベントを実施するにあたり、イベント実施日の確定、阿見町男女共同参画センターの方と、参加していただく子どもたち、保護者の方に配布するチラシについての日程調整、チラシの作成、イベントで使用する道具の借用についての申請、イベントの前日準備など多岐にわたりました。

地域の方のご協力や助言、団体内での話し合いや日程調整、ご協力のもと、企画、実施に至ることが出来ました。

2) 運営について

阿見町男女共同参画センターの方、そば農家の方、農園の方、そば打ち同好会の方、JTファームの方のご協力のもと、開催することが出来ました。

今年度、阿見町の地域の方々と8月にそばの種まきイベント、11月にそばの収穫イベント、12月にそば打ちイベントを行いました。

8月のそばの種まきイベントでは、数多くの子どもたち、保護者の方にご参加いただきました。昼食では、畑で採れた野菜を使用し、カレーを作りました。参加していただいた皆様に楽しんでもらえ、有意義なものになったと感じました。



写真1. そばの種まきイベントの様子

11月のそばの収穫イベントでは、数多くの子どもたち、保護者の方にご参加いただきました。そば農家やそば打ち同好会の方からお借りした唐箕や脱穀機を使用し、学

生とご家族の方で協力し、実際にそばを収穫しそばの実を分ける作業を体験しました。



写真2. そばの収穫イベントでの集合写真

12月のそば打ちイベントでは、阿見町中央公民館をお借りして行いました。そば打ち同好会の方のご指導の下、参加していただいたご家族と学生で力を合わせながら、そばを作ることが出来ました。

また、イベントでは、子供たちとレクリエーションや作物、農業に関連する授業を行いました。

これらの1年間のそばに関連するイベントを通じ、参加していただいた子どもたち、保護者の方々に、われわれの活動目的興味を持っていただけて、その活動が阿見町の地域活性化に繋がったのではないかと思いますので良かったです。

3 農業・農村を応援する大学サークルネットの活動の参加について

農業・農村を応援する大学サークルネットに加盟している大学での親睦会が沖縄でありました。親睦会では、他大学の参加者との交流、サトウキビ収穫など、普段体験できないような経験をし、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。

4 茨城大学農学部での文化祭「鋤耕祭」への出店について

鋤耕祭では、さつまいも、カボチャを用いたポタージュ、焼き芋の販売を行い、予定していた量の販売ができました。

5 今年度の振り返りと来年度への展望

1) 反省点

今年度3回のイベントを行うにあたり、準備～企画、運営に至る一連の流れの中で、計画が不十分になってしまった部分も存在したため、もっと密になって計画を立てるべきだと感じました。

また、定期的に話し合いを行い、情報共有や意思疎通を図り、円滑に進めるべきだと感じました。

2) 良かった点

阿見町の町民の方と連携をとり、1つ1つのイベントの意味を理解し、イベントでは、子供たちや保護者の方と楽しく触れ合うことができ、イベントでの作物に関する授業を通し、阿見町の地域活性化と食農教育について考えていただく機会を提供することができました。

3) 来年度への展望

今年も地域活性化に向け、活動を実施してきましたが、まだまだ解決できていない問題が数多く存在すると思うので、イベントを通し、考えていければと思います。

最後に、今年度イベントを行うにあたり、プロジェクトメンバーの至らない点多々ありましたが、ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

FES (Food Education Supporter)

～食育応援隊～

代表者 農学部地域総合農学科 3年 伊藤友紀

連携先

茨城かすみ農業協同組合 青田 洋一

顧問教員

安江 健 (農学部・教授)

参加者

伊藤 友紀	農学部地域総合農学科 3年
鈴木 日菜	農学部地域総合農学科 3年
飯田 朋美	農学部地域総合農学科 3年
伊藤 舞	農学部地域総合農学科 3年
鈴木 亜実	農学部地域総合農学科 3年
高橋 理子	農学部地域総合農学科 3年
宇賀神 温	農学部食生命科学科 3年
黒澤 まりな	農学部資源生物科学科 4年
渡邊 明花	農学部資源生物科学科 4年
草谷 奈津子	農学部資源生物科学科 4年
酒井 円香	農学部資源生物科学科 4年
宮田 海	農学部資源生物科学科 4年
成嶋 緑	農学部地域総合農学科 2年
堀池 志帆	農学部地域総合農学科 2年
石倉 未悠	農学部地域総合農学科 2年
杉原 ほのか	農学部地域総合農学科 2年
森山 光	農学部地域総合農学科 2年
鬼澤 彩乃	農学部地域総合農学科 2年
小林 由莉	農学部地域総合農学科 2年
松浦 拓哉	農学部地域総合農学科 2年
木村 玲司	農学部地域総合農学科 2年
永尾 美紗登	農学部食生命科学科 2年
須々木 陽音	農学部地域総合農学科 2年

プロジェクトの概要

●背景

阿見町では、町教育委員会と JA 茨城かすみ (以下,農協) により、町内の小学校に対し食育事業が行われていた。この活動に 2014 年度～2016 年度までは有志の学生が自費で支援を継続し、食育事業を継続できたという背景がある。そして、2017 年度からは有志の学生が増え、更なる参画ができると考え、本プロジェクトに応募し、採択された。更に、2019 年度からは町教育委員会と農協での食育事業がなくなった。現在、農協の方から食育活動を引き継ぎ、継続していくことはもちろん、自分たちで直接積極的に小学生との交流活動を行うことで、食育活動の継続と発展を目指している。

●目的

阿見町の 7 校の小学校で、本プロジェクト (以下,FES) が直接的に食育や授業のサポート等で小学生の活動を支援する。将来を担う子供たちの食、茨城大学及び地元への関心を高めることで、阿見町の発展に貢献することを目的として活動している。

●活動内容

小学校での主な活動としては、

- ①授業サポート
 - ②農業についての授業・農作業
 - ③食に関する広報の作成・配布
- を行っている。その他行事も随時参加している。

●食育への思い

私たちの活動は実際に小学校の中に入っ
ての活動で、地元や農業についての楽しさ

や大切さを知るきっかけづくりができることを強みとしている。

農村の高齢化・過疎化が進み、食料の安全が危ぶまれる中で、一人でも多くの児童に阿見町や農業、食への魅力を感じてもらいたいという思いで活動している。「小学生は地元の宝であり、FESの活動が将来の地域の活性化に繋がる」ということで、農協の方々や先生方も熱意をもって協力、支援をしてくださっている。

プロジェクトの成果報告

●今年度の活動及び成果

①授業サポートについて

丸つけや机間サポートの活動(写真1)により、子どもたちや先生方と話す機会が増え、主体的に活動できるような良い関係を築くことができている。これにより、昨年度の課題であった学生の授業の合間での活動のしづらさが解消され、より小学校に密着した活動ができた。



写真1 机間サポートの様子

②農業についての授業・農作業

農業だけでなく、社会の授業でも活動させていただき、「茨城大学農学部でどんなことを学んでいるのか」というテーマで授業をした。後日いただいた手紙には、多くの児

童からの「知らなかったことを学ぶことができた」、「興味を持ったので自分で調べてみたい」という感想が記載されていた。課題としては、将来の職業として農業考えている小学生がほとんどいないという現状があったので、今後の活動内で食や農業について考えるきっかけを更に増やしていく必要があると考えている。

農作業については主に落花生とサツマイモの収穫を行った。説明している間は集中して聞いている子どもたちだが、農作業ははしゃいで楽しそうに行っていた。ある小学校ではサツマイモパーティーを開いてくださり、収穫したサツマイモで作ったスイートポテトをご馳走になった。つまり、児童が収穫から食べるところまでを楽しんで行うことができていた。これは、食育活動として理想的な活動であり、良さを広めていきたい。



写真2 落花生収穫の様子

③食に関する広報の作成・配布

毎月「もぐもぐ通信」という題で食や農業に関する広報誌を作成し、各クラスに掲示してもらっている。農作業の体験等の一時的なものではなく、継続して興味を持ってもらえるような情報発信をすること、家庭

での話題として取り上げてもらうことを目的として行った。作成時は、興味を引くデザインや分かりやすい言葉遣いなどにより、様々な食べ物について低学年でもわかりやすく伝わるように工夫した。



図1 もぐもぐ通信 10月号

●今後の展望

今年度の活動は学生中心となって行わなければならない状況だったが、逆境を力に変えて主体的な活動を行うことができた。来年度への引継ぎをしっかりと行い、継続して取り組めるようにしたい。また、来年度は一部の小学校だけであった活動の幅を広げ、より地元に着したプロジェクトになることを目標とする。更なるきっかけ作りとしては、もぐもぐ通信の個人への配布等も検討し、主体的な活動で貢献できることを増やしていく。

食育活動の継続はもちろん向上のためには、周囲の方々の協力がなくてはならない。先生方や阿見町に働きかけることでプロジェクト活動の幅を広げていきたいと思う。

さまーすくーる in 大子 2019

代表者：教育学部3年次 黒畑 晴喜

連携先

大子町役場 まちづくり課

顧問教員

生越達

教育学部 教育学研究科 教育実践高度化
専攻

参加者

黒畑 晴喜 教育学部3年
前田 彩音 教育学部3年
小野瀬 充奈 教育学部3年
関 美月 教育学部3年
岡部 千絵子 教育学部3年
佐藤 実里 教育学部3年
牧島 あゆみ 教育学部3年
川島 成実 教育学部3年
赤津 彩里奈 教育学部3年
砂押 茉央 教育学部3年
立花 日菜 教育学部3年
青木 紗佳 教育学部3年
小山 茅冬 教育学部3年
生田目 育実 教育学部3年
羽佐間 蓮華 教育学部3年
萩原 可菜 教育学部3年
川島 友里花 教育学部3年
長瀬 未来 教育学部3年
杉江 優太 教育学部3年
佐藤 郁美 教育学部3年
寺門 遼香 教育学部3年
根内 晴香 教育学部3年
時光 宏太 教育学部3年
生田目 航 教育学部3年

久保木 優文 農学部3年
河井 孝太 人文社会科学部2年
小坏 麻耶 人文社会科学部2年
卜部 野々香 人文社会科学部2年
広瀬 哲郎 教育学部2年
中野 瑞希 教育学部2年
海老原 晴輝 教育学部2年
今長 直紀 教育学部2年
浦 瑞穂 教育学部2年
竹中 葵 教育学部2年
櫻井 凜 教育学部2年
斎賀 友輔 教育学部2年
増井 竜人 教育学部2年
山城 光 教育学部2年
鈴木 優薫 教育学部2年
真家 淑乃 教育学部2年
水戸部 乃理 教育学部2年
青木 駿太 教育学部2年
宍戸 菜央 教育学部2年
渡辺 有咲 教育学部2年
安齋 一真 教育学部2年
天野 佑香 教育学部2年
大平 佳奈 教育学部2年
渡辺 布実 教育学部2年
美佐田 和歌子 教育学部2年
井上 夏奈 教育学部2年
小野瀬 美沙 理学部2年
井能 楓 理学部2年
平沼 標雅 工学部2年
村上 佳織 農学部2年
宮下 楊子 人文社会科学部1年
立石 真子 人文社会科学部1年
市橋 朱理 教育学部2年

萬造寺 美輝	教育学部 2年
谷川 輝弥	教育学部 2年
高崎 雅貴	教育学部 2年
鈴木 真央	教育学部 2年
向島 春菜	教育学部 2年
品田 晃志郎	教育学部 2年
木村 瑠莉	教育学部 2年
伊藤 夕貴	教育学部 2年
酒井 杏葉	教育学部 2年
山中 ほのか	教育学部 2年
渥美 彩加	教育学部 2年
谷田部 泰生	教育学部 2年
古口 翔也	教育学部 2年
高橋 聖	教育学部 2年
五本木 晴生	教育学部 2年

プロジェクトの概要

さまーすくーる in 大子 2019 は子どもふれあい隊が実施している事業のひとつである。今年は今和元年 8 月 1 9 日(月)から 2 1 日(水)に開催した。大子町にある「初原ぼっちの学校」をお借りして子どもと学生だけで 2 泊 3 日のキャンプを行う。大子町役場や近隣住民の方に協力をしていただきながら、子どもたちが日常生活では経験できないような活動する場を創出していることを目的としている。主な活動として、子どもたちが自分や友達、大学生の食事を作る野外炊飯の経験や、大子町の豊かな自然を生かしたレクリエーションなどを行う。事業後も、3 日間の終了証の送付や、3 日間の様子をまとめた DVD の作成、保護者の方へのアンケート調査など、連絡を取り合った。大子町役場や近隣住民の方にも終了の報告をさせていただいた。

<日程>

1 日目

開校式
オープニング
昼食(夏野菜カレー)
室内レクリエーション
夕食(生姜焼き)
夜の学校探検

2 日目

朝のつどい
朝食(パンケーキ)
大子町探検
昼食(流しそうめん)
ストラップ作り
夕食(レタスチャーハン)
キャンドルファイヤー

3 日目

朝のつどい
朝食(ロコモコ丼)
そうじ
昼食(ちらし寿司)
エンディング
閉校式



写真 1 全体写真

プロジェクトの成果報告

●準備段階

2019年4月から準備を行い、開催した8月までに月に1回のペースで太子町を訪れ準備を重ねてきた。本プロジェクトの支援金を用いて、デッキブラシやほうき、雑巾を購入し、少しでも清潔な環境を整えてきた。ほかにもエアベッドを購入し、準備中や本番中に体調を崩した学生・子どもの対応も準備した。

自分たちの準備だけでなく、参加する子どもの保護者への説明会や太子町役場、子どもたちの移動に使わせていただくバス会社やキャンプファイヤー(今年度は悪天候のためキャンドルファイヤーに変更)を行うための消防署への連絡、近隣住民の方へのあいさつもを行っている。



写真2 初原ぼっち学校の様子

●さまーすくーる in 太子 2019 のテーマ

毎年、『さまーすくーる』ではテーマを決めており、今年は「Oh! Hi! Summer!!～おひさま～」、小テーマを「楽しむ」、「笑顔」と設定した。子どもたちが、大学生や初めて出会う友達と共に楽しんで過ごすことで、楽しさの中から多くのことを吸収し、まるで太陽の輝きのようなキラキラとした思い出と笑顔にあふれた3日間となることを目標として活動した。

実際には、最初は恥ずかしさか、学生や友達に対しても話しかけられない子どもたちが、だんだんと打ち解けていく様子が伺えた。この変化には、普段とは違う生活を共に過ごすことが大きな要因となることを感じた。打ち解けて話すだけでなく、他人の気持ち大切に、役を決める際には、譲り合う姿勢や全員が納得するように結論を話し合うなどの姿も見られた。

事後の保護者へのアンケートでは、「一人で参加し、自信がついたようだ」や「家の手伝いをするようになった」、「自分で持ち物の準備をするようになった」など、さまーすくーるでの成長が家庭に帰っても反映されていることがわかった。したがって、2泊3日の共同生活が感性の豊かな子どもたちを刺激し、自主性や積極性を高めたのではないだろうか。

●募集について

ポスターやチラシを水戸市・太子町内の学校や、施設等に配布・貼付することで多くの子どもたちやその保護者に知ってもらうことを目指した。加えて、更なる応募を見込んで、Twitterやホームページでも情報を公開した。

●学生が得られた成果

今年は「将来の糧になる」ことを目的として事業を行ってきた。学生だけで事業の準備・運営をしなくてははいけないため、準備段階での先を見通す力や計画性、本番での状況に応じた判断や対応力など求められることが沢山ある。特に今年は、事業当日が雨となり、学生の準備ができていたことや、柔軟

な対応力があつたため乗り越えることができた。このような経験が学生一人一人の「将来の糧」になったといえる。



写真3 雨対策の様子

●本番の様子の一部

○野外炊飯

3日間の食事は、学生と協力して、子どもたち自身が友達や学生の食事を作る。その際、野外炊飯という形をとり、簡易的なかまどを製作し、火を燃やし、鉄板で調理をする。その事前準備として、火を燃やすために必要な薪は近隣の方に協力していただき調達をした。さらに、主な食品は太子町にある食品売り場を利用し購入している。



写真4 野外炊飯の様子(簡易かまど)



写真5 野外炊飯の様子 野菜の調理

○エンディング

3日間の思い出としてみんなで寄せ書きをします。今年は台紙に立体的な花を作った。これは、子どもたちの記憶に残るような事業にするため毎年、作成していて、形に残るものを作成し、持ち帰ってもらうことで来年以降の参加や太子町について知ってもらう・興味を持ってもらう機会としている。



写真6 エンディングの寄せ書き

●今後の展望

来年度も開催を目指すか、今年は募集が思うように伸びず、予定していた人数を下回ってしまった。学校行事と同じ日に開催してしまったことが要因の一つとして挙げられるが、学生側の「さまーすくーる」における宣伝体制も次年度は強化したいと考える。1年を通して茨城県内のボランティア

活動に参加させていただいているので、そういう機会も活用しつつ、私たちの活動も知ってもらい、参加したいと思わせるような声掛けをしていきたい。

現在、新型コロナウイルスの感染が拡大していることから、来年以降は今まで以上に保健衛生について対策を講じる必要がある。その点もよく学生で話し合うことや、専門家に相談するなどしていきたい。



写真7 キャンドルファイヤー

地域の伝統文化継承に学生が取り組む 「西塩子の回り舞台」プロジェクト

人文社会科学部人間文化学科 2年 河井孝太

連携先

「西塩子の回り舞台保存会」
(会長 大貫孝夫)
「常陸大宮市まちづくりネットワーク」
(代表 倉田稔之)

顧問教員

西野 由希子 (人文社会科学部 教授)

参加者

小野瀬 篤美
(人文社会科学部法律経済学科 3年)
岸 朱里
(人文社会科学部現代社会学科 3年)
河井 孝太
(人文社会科学部人間文化学科 2年)
軍司 真奈
(人文社会科学部現代社会学科 2年)
小池 さくら
(人文社会科学部人間文化学科 2年)
根本 隆太
(人文社会科学部人間文化学科 1年)

プロジェクトの概要

●活動の目的について

本プロジェクトは「西塩子の回り舞台」を成功させ、盛り上げるために発足した。「西塩子の回り舞台」とは、茨城県常陸大宮市の西塩子地区において、3年に1度開催される江戸時代からの伝統をもつ日本最古の組立式農村歌舞伎舞台である。地元の保存会の方々が高齢の方が過半数を占

めており、人口も減少しているため、年々公演開催が危ぶまれているといった課題がある。そのため、私たち学生(若者)をはじめとするボランティアが、どのように保存会を支え、「継承」していくかが重要だと考えた。

●事前活動について

まず、「西塩子の回り舞台」を盛り上げていくうえで必要不可欠である、「西塩子の回り舞台」の基礎知識を身につけるための勉強会を行った。回り舞台の歴史や前回までの公演について、また常陸大宮市と茨城大学の連携協定のもとで茨城大学生がこれまでどのように関わってきたのかなどを知り、今年度はどのような活動をしていくかを話し合った。

他にも、「茨城学」が行われる前の時間をいただき、回り舞台宣伝ポスターを用いて多くの学生にボランティアの募集を呼びかけた。また、公演当日に実施するアンケートに協力していただいた方へのお礼の品として第七回定期公演記念缶バッジの作成も行った。

地鎮祭が行われた8月下旬から舞台の組み立てが始まり、組み立ての日程に合わせてその都度参加できるメンバーが現地へ赴いた。保存会や、市内外から来ていたボランティアなどの多くの方々に教えていただきながら、大柱、鳥居組み立て・花道、棧敷席組み上げ・竹の切り出しなど様々なお手伝いをした。

●本公演当日の活動について

2019年10月20日(天候によって19日から変更された)に本公演が開催された。当日は、茨大テント(作成したアンケート配布・回収, 公式グッズの販売, 台風19号の災害募金等), 本部協テント(演目プログラムと抽選券の配布, 抽選の商品引き換え等), 舞台裏方のお手伝いの3つのチームに分かれて活動した。各々がそれぞれの仕事を全うしつつ, プロジェクトメンバー自身も本公演を楽しみながら魅力を知ることができたため, 今後の活動をしていくうえでも大切な経験となった。

また, 幕間(演目と演目の間)には, 本プロジェクトから代表者数名が舞台に上がり, プロジェクト活動についてのインタビューを受け, 当日来場していた多くの方々に本プロジェクトについて紹介した。目玉企画でもある抽選会のくじ引きの補助も行った。

●事後活動について

組み立て見学者と公演来場者を対象に行ったアンケートの結果をまとめ, 分析した。それらの結果はメンバーの感想とともに報告書としてまとめ, 保存会にお渡しした。

また, 来場者アンケートのデータを分析した結果から, 常陸大宮市内からの来場者が圧倒的に多いことや若年層が少ないことが明らかになった。そこで, より多くの人に知ってもらうきっかけを作るために「西塩子の回り舞台」を紹介するリーフレットを作成した。特に茨城大学がある水戸市を中心として, 水戸市の人々にはまず回り舞台の存在を, そして市内在住の方には

より詳しく知ってもらうことを目的とした。回り舞台の歴史や, 舞台が組みあがるまでの経過などを, 現地で撮った写真を活用しながら作成した。完成したリーフレットは保存会の方々にも配布協力をしていただき, 加えて茨城大学をはじめとする水戸市内の様々な施設や常陸大宮市に置かせていただき多くの人々の手に届くようにお願いする予定である。

プロジェクトの成果報告

●成果

公演は成功に終わり, 一年を通してプロジェクトメンバーの全員が「西塩子の回り舞台」というひとつの伝統文化の大切さや貴重さ, そして継承していかなくてはならないかけがえのない文化であると認識することができた。単に伝統文化の表面だけを見るのではなく, その文化が抱える課題に目を向けられるようになり, どのようにして解決・解消していくかを考える力を養うことができたのではないだろうか。今回のプロジェクトで学んだことは, これから各々が様々な地域で活動をするにあたって「文化」に対して向き合い, 考えていく際の基盤となるだろう。

●今後の課題

3年後の開催は未定ではあるが, 地域の伝統文化を支えるために茨城大学生として何ができるか, 空白の3年間をどう活かしていくかが今後の課題である。また, メンバーのほとんどが次回の開催時には大学を卒業しているため茨城大学生からの回り舞台の手伝い手が現れるか不明である。茨城大学でどのようにして「西塩子の

回り舞台」を伝えていくのかも考えていく必要がある。

●今後の展望

来年, 再来年と公演が行われない年になるが, アンケート結果の分析を中心に学生だからできることを見つけ行動していくことはできる。公演が開催されない年であっても回り舞台の継承に携わることは可能である。今年度は保存会や地域の市民ネットワークとの協力がほとんどであったので当プロジェクトで学んだことを活かしつつ, 行政機関とも積極的な協働をしていき第八回定期公演に向けて活動していきたいと考えている。



写真3 リーフレット



写真1 組み立てのお手伝い



写真4 保存会のみなさんへアンケート結果とリーフレットをお渡し



写真2 舞台公演当日

『みとっ歩 - ゼロから始める水戸生活 - vol.3』 制作プロジェクト

教育学部学校教育教員養成課程 3年 阪井一仁

連携先

水戸市市長公室みとの魅力発信課

顧問教員

西野 由希子(人文社会科学部・教授)

参加者

大村 みるほ

(教育学部情報文化課程 4年)

高田 美菜

(人文学部人文コミュニケーション学科 4年)

阪井 一仁

(教育学部学校教育教員養成課程 3年)

関沢 南

(人文社会科学部現代社会学科 2年)

藤川 尚

(人文社会科学部現代社会学科 2年)

小野崎 邦彦

(人文社会科学部現代社会学科 1年)

山口 二千翔

(人文社会科学部法律経済学科 1年)

プロジェクトの概要

・背景

本プロジェクトは、2017年に水戸市より「水戸市外出身の大学生の目線で水戸市の観光パンフレットを制作してほしい」と茨城大学の学生に依頼があったことからスタートした。その観光パンフレットは、およそ1年をかけて2018年の3月に発行、茨城新聞にも掲載された。その後、『みとっ歩』の一作目では取材できる店に限りがあり、水

戸の「良さ」を発信するには不十分であると感じられたこと、編集員一同この活動を一回きりのものとするのは非常に勿体無いとの思いがあったことから、一昨年、学生地域参画プロジェクトに参加し、第二号を発行したが、それが予想以上に好評であった。そのため、第二号をより進化させるため、第三号を制作した。

・プロジェクトの内容

本プロジェクトは、「フリーペーパー」という形で、新しく水戸に来る大学生へ水戸の魅力を発信するものである。

プロジェクト実施にあたっては、記事作成のため合計10箇所取材を申し込んだ。それぞれ約1時間をかけ、「水戸でお店を続けてきて思うこと」「お店を続けることでわかった、水戸の良い点・悪い点」「大学生へ一言」などを深掘りし、それを文章とした。その後、PhotoshopやIllustratorを使用し、記事ページを作成した。今回、掲載にはお店以外にも、街中にある神社や公共施設を取り入れた。これは、大学生へ「街の人々が紡いできた歴史に関心をもつ」ことを喚起することを狙った。

(以下、参考画像)

写真1 取材風景 (ふ和ら様にて)



写真2 『みとっ歩』表紙

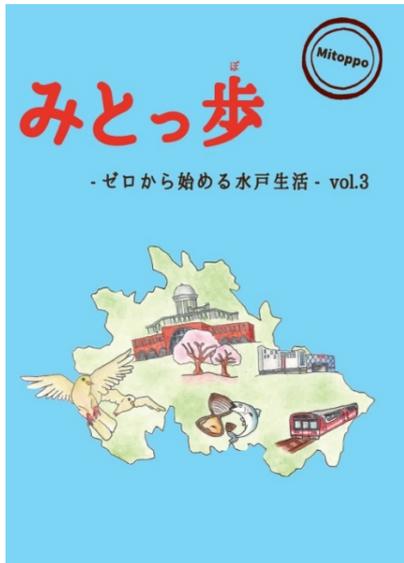


写真3 8-9ページ。「大学生に一言！」など、レイアウトを工夫した。



写真4 12-13ページ。(街の人々に愛され、受け継がれ続けてきた神社等を取材した。)



・活動日程

2019年6月(学プロ採択後)~8月:取材先選定, 冊子レイアウト構想策定

2019年8月~2020年1月:取材開始及び記事・ページ作成, 冊子レイアウト決定, SNS運営(Twitter, Instagram, Note)

2020年2月:記事・ページ校正, 冊子印刷, SNS運営(Twitter, Instagram, Note)

・プロジェクトの目的

新しく水戸に住む学生(大学生・専門学生)に水戸の魅力を発信することで, 水戸の街に興味・愛着を湧かせ, 地域(水戸)の活性化に貢献すること。また, 新しく水戸に来る大学生の, 街中に繰り出す「ハードル」を下げること。

プロジェクトの成果報告

・プロジェクトの成果

『みとっ歩 -ゼロから始める水戸生活- vol.3』5000部発行。

(内訳)

水戸市観光案内所 1500部(予定)

水戸市公共機関 2000部

茨城大学, 常磐大学 計800部(予定)

取材先 (11箇所) 550部

その他 150部

また, Twitter (@mitoppo), Instagram (@mitoppo_official), Note(ブログ)にて

取材先の情報, 未使用写真, 取材時の裏話, 制作した感想などを始めとした情報を発信している。

・今後の課題

今回のプロジェクトでは, 特に「街中の歴史」を読み取ることができた。それは, 取材

先の一つである「金刀比羅神社」によるところが大きい。そこでは、神社が建立された経緯などを語り継ぐ方が高齢化などで少なくなっておられた。また、語り継ぐ機会も、数少ないというお話も伺った。次号、制作する際には、店舗だけではなく「語り継ぐ」という目線で水戸の街中の情報をまとめていくことが課題と思われる。

・今後の展望

今後、まず Photoshop や Illustrator などの技術を高めることが目標として挙げられる。そのほか、「今後の課題」で述べたように、「水戸の街中の歴史」の情報をまとめた。それも、年表的な歴史ではなく、「生の声」を重視したものとした。これまで、冊子を制作してきて、ささやかながら「情報発信者」として「記録を後世に残す」体験をした。水戸の「裏」にある様々な「人の思い」を、情報として受け継げるような冊子を再作していきたい。

茨城大学地質情報活用プロジェクト

代表者 理学部理学科 4年 鈴木 大河

連携先

茨城県北ジオパーク推進協議会事務局
(株) 東京地図研究社

顧問教員

小荒井 衛 (理学部 教授)

参加者

鈴木 大河 (理学部 理学科 地球環境科学
コース 4年)

城戸口和希 (//)

佐藤 未笛 (理学部 理学科 地球環境科学
コース 3年)

小林 香澄 (//)

杉竹 栞 (//)

関谷 拓海 (//)

横路 友翼 (//)

河又みさき (理学部 理学科 地球環境科学
コース 2年)

山田 直輝 (//)

渡辺 詩織 (//)

小川 美宇 (理学部 理学科 地球環境科学
コース 1年)

栗原 佳宏 (//)

田中 美紗 (//)

プロジェクトの概要

プロジェクトのテーマ

従来、地質情報は防災や地域開発に活用されてきたが、近年になり新たな活用法として地質情報と地域の文化や教育・観光などに関連して地域振興を目指す事業（ジオ

パーク)がある。県内には日本ジオパークに認定されている「筑波山地域ジオパーク」と日本ジオパーク再認定を目指す「茨城県北ジオパーク構想」の2つが存在する。そこで本プロジェクトは県内のジオパークと連携し、特に地質情報を教育や地域振興に活用する点に注目して活動を展開していく。

活動目的

本プロジェクトではまず、「茨城県北ジオパーク構想」が再認定に向けて実施している活動に学生目線で参加していく。また、筑波山地域ジオパークにおけるジオパークを用いた教育や学習と地域振興を先例としたうえで、本プロジェクトが茨城県北地域におけるジオパーク教育や学習（例えば小中学生向けの学習教材などの作成）を実施し、将来の茨城県北の地域振興に役立てたい。

そして最終的な目標を「茨城県北ジオパーク」の再認定の活動の中に、本プロジェクトの成果が生かされていることとする。

プロジェクトの成果報告

(1) 学内での活動

大学内では、主に毎週行う定例会議（前期：金曜日 5時限目、後期：水曜日 5時限目）に加え、新入生のガイダンスやオープンキャンパスでのプロジェクトの広報活動、地質観光マップの改訂やその効果についてのアンケート作成、県内の小学生向けの教材づくりを行った。

①学内イベントでの広報活動

4月にある新入生ガイダンスや7月に開催されるオープンキャンパスにおいて、普段の活動内容や、連携先である茨城県北ジオパーク構想についてスライドやポスターを作成し、新入生や高校生に向けて発表している。また、ブログやTwitterを用いて活動内容について発信したりすることで知名度の向上に努めている。



▲7月 オープンキャンパスにて設営された発表用ブース

②地質観光マップの改訂

過去の活動において茨城県北ジオパーク内の観光に用いることができる『地質観光マップ』を作成し、活用されていた。しかし、地図を見て地形が読み取りにくいことや、制作されてから5年以上が経過したことから情報に古くなってしまっている点が生じるなどの問題点が浮上した。

そこで、(株)東京地図研究社の協力の元、現在の情報に合わせた情報修正や地形を読み取りやすいよう地図を差し替える作業を行った尚、地質観光マップは全部で15版あり、今年度中に全て修正することは不可能であったため、まずは他よりも観光客が多く、需要があると考えられる『水戸・千波湖』『平磯海岸』『常陸太田』の3版を改訂する

こととした。

具体的な修正点としては、地形の起伏がより分かりやすくなるような地図への差し替え、古くなってしまった情報の更新、文章や図の訂正、新たな観光情報の追加を行った。

なお、常陸太田については、作成後に新たな相違点が見つかったため、改めて修正したマップを作成し、発行・配布する予定である。



▲『水戸・千波湖 地質観光マップ』(修正前)



▲『水戸・千波湖 地質観光マップ』(修正後)



▲『常陸太田 地質観光マップ』(修正前)



▲『常陸太田 地質観光マップ』(修正後)



▲『平磯海岸 地質観光マップ』(修正前)



▲『平磯海岸 地質観光マップ』(修正後)

③小学生向けの教材作成

本プロジェクトは、地球科学について広く知ってもらうため、大学の内外でジオパークや本プロジェクト、そして地球科学について一般の方々にも広める活動をしてきた。しかし、地球科学をより身近に、より深く知ってもらうためには、教育現場である

学校（特に小学校）で地球科学に触れてもらうことが重要であると考えた。そこで、現在発行、使用されている教科書（たのしい理科、H27年 大日本図書発行）を参考にして文部科学省が定める指導要領に合わせた茨城県内に焦点を当てた地球科学の副読本の作成に取り掛かった。現在もデザインや全体の構成等について推敲している最中であり、来年度に完成させることを目標としている。



▲プロジェクト制作教材
「茨城県でみる地球科学」(仮題)

④ジオツアーのアンケート作成・集計

②で述べた地質観光マップの改訂に伴い、外部の方々にとってマップの使い心地等を調査するため、茨城県北ジオパーク構想が主催する IP (インタープリター) 養成講座 (2/1, 2/15 開催) や偕楽園ジオツアー (3/1 開催) の参加者に対して (水戸・千波湖ジオサイトと日立ジオサイト) アンケートを行った。具体的には、差し替えた地図の見栄えや説明に用いる文章や図が適切かどうか、マップ全体の出来について質問した。

水戸・千波湖ジオサイトのマップは 2 種類 (専門知識のある方向けと専門知識のな

い方向け)作成した。以前のマップと比べて地図の描写はとても見やすくなったという意見を多く頂いた。しかし、マップ内の描写や説明には説明が足りない部分や図が見にくい部分があった といった改善点も多く、今後も継続して改訂していく必要がある。

なお、日立版は専門知識のある方向けにアンケートを作成・集計したものの、地質観光マップに関してはまだ新たな制作段階に至っていないため、このアンケート結果を基に改訂計画を作成、実行する予定である。

(2) 学外での活動

①学外イベントでの活動補助

茨城県北ジオパーク構想は県内の各イベントで地球科学について一般の方々に触れてもらう活動を行っている。その活動補助を行った。主な活動として、4月に行われたフラダンスフェスティバルではブースにてアンモナイトのレプリカ作りを来場者に教えたり、8月の東海村エンジョイサマースクールでは、IPと共に小学生向けにキッチン火山学(身近な食材を用いて火山の動きを学ぶ)の実演を行った。



▲アンモナイトのレプリカ作り
(4月・フラダンスフェスティバル)



▲キッチン火山学の実演
(8月・東海村エンジョイサマースクール)

②学会等での活動発表

本プロジェクトで行ってきた活動成果を外部の方に発信するため、8月に千葉県銚子市で行われた日本第四紀学会 公開シンポジウム、12月に山梨県甲府市で行われた日本理科教育学会でポスター発表を行った。日本第四紀学会ではこれまでの活動内容と今後について、日本理科教育学会では教材を作った経緯と実際に学校で働く先生に見てもらい、今後の作成について助言を頂くことを主な目的とした。日本理科教育学会では、実際に茨城県内で理科の先生をされている先生と話せる機会があった。先生から非常に好感が得られたため、この教材を作成する意義は大いにあったと考えられた。プロジェクトとは関わりの無い方々との話や議論を通すことにより、別の視点からの意見が多数得られ、今後の活動に向けて非常に有意義な機会となった。



▲公開シンポジウムで設置したブース



▲日本理科教育学会で行ったポスター発表
まとめ

①大学の各種イベントや SNS を活用して、プロジェクトの活動やその内容等について内外に発信した。

②水戸・千波湖，平磯海岸，常陸太田の地質観光マップを改訂し，発行した。そのうち，水戸千波湖についてはアンケートを行った。

③地球科学の普及に向け，小学生向けにオリジナルの地学教材の作成に取り掛かった。

④県内の各イベントにおいて地球科学について一般の方々に触れてもらう活動を行った。

⑤本プロジェクトで行ってきた活動成果を外部の方に発信するため，8月では日本第四紀学会 公開シンポジウム，12月では日本理科教育学会でポスター発表を行った。

今後の展望

今年度は新たな活動方針として冊子作成の計画を実行してきたが，完成させるまでには至らなかった。地質観光マップのアンケート結果は今後のジオパーク構想に関係すると考えられるが，実際に反映されるのは来年度以降になってしまう。他の計画と合わせて来年度以降もこれまでやってきた計画を継続して行っていく必要がある。また，これまでの活動は理学部の地球科学コースの学生に限られていた。教材作成や地質情報を観光に活かせるためにも，プロジェクト内の新たな視点として人文社会科学部や教育学部といった他学部の学生をメンバーに取り入れられるように働きかけることも重要であると考えられる。

まなびの輪

代表者：人文社会科学部現代社会学科 3年 須郷まどか

連携先

大洗町役場 まちづくり推進課
大洗町立大洗小学校
大洗町立大洗第一中学校

顧問教員

横溝 環（人文社会科学部・准教授）

参加者

小堀 紗也香（人文学部社会科学科 4年）
小林 愛鈴
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
斎藤 朱里
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
須郷 まどか
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
田村 捺芽
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
中川 珠希
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
滑川 みずき
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
森 亜由美
（人文社会科学部現代社会学科 3年）
安蒜 ひなた
（教育学部学校教育教員養成課程特別支援
教育コース 2年）

プロジェクトの概要

本プロジェクトは、大洗町役場・大洗小学校・大洗第一中学校・地域ボランティア・保護者の方々と連携し、大洗町在住外国人の

日本語コミュニケーション能力の向上および多文化共生まちづくりの推進を目的としている。今年度は、昨年度に引き続き、①大洗町在住外国人の方々から日本語を学習できる場を設けること、②外国人同士および日本人と外国人のコミュニケーションをはかる機会を設けることで、関係構築をすること、③外国をルーツに持つ児童生徒の学習サポートを行うこと、加えて、④日本語スピーチコンテストの運営・開催のサポートをすることで、外国につながる生徒・児童の学習意欲向上を促し、日本人の多文化共生への興味関心を高めること、⑤活動を通して、地域・自治体間での連携、情報提供の協力をすることを目標とした。

活動内容は、「日本語教室」の開催、外国をルーツに持つ児童生徒の学習支援として大洗小学校・大洗第一中学校で行われている「取り出し授業」への参加とサポート、「新年会」を始めとする地域・国際交流のイベントの参加と開催、「日本語スピーチコンテスト」の運営サポートである。

プロジェクトの成果報告

(1)日本語教室の開催

大洗町在住の外国人の方々に向けて、日本語を楽しく学習する場「日本語教室」を開催している。月に2回、第2・第4水曜日（18：30～20：00）に大洗町役場の会議室で実施している。日本語教室では、学習者のニーズをもとに個々の目標に沿った学習サポートを、地域の日本人ボランティアと共に

行っている。昨年度に引き続き、日本人1人につき学習者1人～複数人の学習サポートを行い、日本語教室終了時に個々の学習内容をルーズリーフに記録した。日本語教室に参加して下さる外国人の方々は、継続的に来てくださる方に加え、新たに参加して下さる方が多くみられた。また、スピーチコンテストの練習をする児童生徒の姿もみられた。スピーチコンテストと日本語教室の活動につながりがうまれたことは、成果の一つであるといえる。



写真1 日本語教室での様子

(2)取り出し授業への参加

大洗小学校および大洗第一中学校では、外国をルーツに持つ児童生徒を対象に、日本語を補いながら教科学習をする「取り出し授業」が実施されている。私たちは、先生方のご指導のもと、取り出し授業に「日本語サポーター」として参加している。具体的には、小学校では、1～3時間目(8:40～11:25)、中学校では、1～4時間目(8:40～12:30)、5～6時間目(13:30～15:20)に参加している。昨年度は、小学校、中学校ともに週2回、午前中の授業への参加にとどまっていたが、今年度からは、中学校の午後の授業へのサポートが加わり、参加回数が増えた

ことによって、私たちが児童生徒と接することができる機会が増加した。児童・生徒の日本語学習のサポートを行うと共に、彼らとの会話を大切にすることで、少しずつ一人ひとりとの距離を縮めることができたことが、大きな成果の一つといえる。

(3)新年会の開催

日本語教室に参加して下さるの方々、地域の方々との関係を深めるきっかけとなる新年会を1月に開催した。新年会では、世代問わず楽しむことができるかるた大会・フルーツバスケット・ビンゴ大会などのゲームを行った。また、外国人やボランティアの方々と共にペルー、インドネシア、日本の料理を共に作る料理大会を行い、世界の食文化に触れた。新年会では、日本語教室で学習する場では見られない、参加者の新たな一面、表情に触れることができ、貴重な時間を過ごすことができた。



写真2 1月開催 新年会

(4)スピーチコンテストの運営サポート

2月2日に茨城大学人文社会科学部講義棟10番教室で開催された「日本語スピーチコンテスト」の運営におけるサポートを行った。このコンテストは、昨年度初の試みとして実施され、今年で2回目の開催と

なった。今年度は、大洗町国際交流協会・ひたちなか市国際交流協会との連携、茨城県・茨城県教育委員会の後援のもと行われた。中国、エジプト、カナダなど計12カ国の外国にルーツを持つ児童生徒が参加した。参加者数は、小学生18名、中学生8名、また来場者数は約140名であった。私たちは、コンテストの開催において、会場設営、受付、コンテストの出場者およびご家族、引率者の方々の案内など、多岐にわたるサポートを行った。児童生徒は、将来の夢や頑張っていること、家族や友人、好きなことをテーマに、それぞれの思いを込めてスピーチした。来場者の方々からは、「子供たちにとって、自信につながる人生を変えるほどの素敵なコンテストだった」「子どもの持つ力や可能性、日本で暮らす外国人について知ることができる場」等のお言葉をいただいた。来年度の開催を期待する声も多く、児童生徒のスピーチと彼らの姿は、運営に携わる人々や多くの来場者の心に深く響くものがあった。出場者の中には、取り出し授業で関係を築いた児童生徒もいた。私たちは、子どもたちが学校で練習に励む姿を目にしていたこともあり、彼(女)らの発表に一層感動した。そして、運営をサポートする私たちが、コンテストに参加する児童生徒と心を通わせることで、彼らの緊張や不安を和らげることができた。



写真3 スピーチコンテストの様子

(5)その他の活動

その他の活動としては、大洗町の夏の行事である八朔祭と盆踊りの夕べに参加した。八朔祭では、インドネシアとペルーの料理、コインケース、マグネットなどの様々な小物の販売の手伝いをし、外国の方々や地域の方々と交流を深めることができた。また、盆踊りの夕べでは、国際交流協会のブースで、外国産のジュースの販売や、国旗や大洗町のマスコットキャラクターであるアライッペのフェイスペイントを実施した。さらに、日本語教室に参加してくださるインドネシア出身の方に、彼らが通う教会のパーティーに招待していただいたこともあった。教会では、インドネシア料理や会話を楽しんだ。普段訪れることのない空間のなかで、異文化体験をすることができた。



写真4 8月開催 八朔祭での様子



写真5 盆踊りの夕べの様子



写真6 インドネシア教会パーティーでの様子

(6)活動の全体成果

日本語教室の開催においては、日本に来て間もない外国籍の方々の、ひらがな、カタカナの読み書き等の日本語能力の習得が実

現した。また、日本語を学び、能力を向上させることを目的として来てくださる方々だけではなく、日本語を話せるようになってからも教室に参加してくださる方も多くいた。日本語を学ぶ場としてだけではなく、居場所としての存在意義も感じることができた。

取り出し授業においては、活動を継続したことにより、児童生徒との関係を深めることができた。大洗小学校・大洗第一中学校の先生方からは「子どもたちは、まなびの輪の学生が来ることをとても楽しみにしている」とのお言葉をいただくことができた。私たちの参加によって、児童生徒の日本語学習の質、および意欲の向上をサポートすることができた。今後も取り出し授業への参加を継続し、児童生徒や小学校・中学校の先生方とより密接な信頼関係を築くことが目標である。

今年度で2回目の開催となったスピーチコンテストは、外国につながる児童・生徒の自己表現の場として意義のあるものとなった。また、日本人の来場者も多く、参加者・運営者の双方にとって、多文化共生について考える貴重な機会となったといえる。そして、運営・開催は、大学・地域・学校の連携と協力によって実現したものであるといえる。

新年会をはじめとしたイベント参加と開催を通して、私たちボランティアと大洗町住民の方々や外国人の方々との親交がより深まった。そして、レクリエーションや料理など、多様な国籍の方々と共に取組むことで、多くの文化や言語に触れることができた。さらに、イベント開催は、日本語教室に来てくださる方々と、日本語

で会話をするきっかけにもなるという点においても意義があると考えられる。

(7) 今後の課題

第一に、日本語教室においては、日本語教室に参加する外国人学習者の関係構築が挙げられる。今年度は、新しく来てくださるようになった方も多かった。継続的に参加していただくために、自己紹介の場を設け、互いのことを知る機会を大切にしたい。私たちボランティアや外国人生徒同士の関係をより深めることで、彼(女)らの日本語教室に通う楽しみが増えると考えられる。第二に、取り出し授業のサポートにおけるシフト管理が挙げられる。取り出し授業に参加するメンバーの確定後、やむをえない理由から、シフトの変更や欠席をせざるをえないことがあった。シフトの作成の時点で、あらゆるリスクを想定し、柔軟に対応できるような工夫が必要であると考えられる。第三に、スピーチコンテストの継続的な開催が挙げられる。そのためには、大学・地域・学校、各組織間の連携の強化が必要であると考えられる。第四に、新たな季節のイベント開催が挙げられる。今年度は、学生主体で開催したイベントは新年会のみであった。来年度は、今年度よりも計画的に大洗町住民の方々との関わりを増やす機会を設けていきたいと考える。

今年度の活動の締めを迎えた2月末には、新型コロナウイルスの影響と流行を懸念し、取り出し授業への参加と日本語教室の開催を休止することとなった。しかし、まなびの輪がこれまで築き上げてきた繋がりや信頼関係に支えられながら、今後も継続して活動に励んでいきたい。

五浦遊学ルートマップ作成プロジェクト

代表者：人文社会科学部人間文化学科 3年 三上 りか

連携先

株式会社 MAGES.

茨城大学五浦天心記念美術館

北茨城市役所

スを記載したルートマップの作成を行った。

顧問教員

藤原 貞朗（人文社会科学部・教授）

「春草と大観の五浦遊学散歩」について：
遊学ルート内の対象スポット 3箇所すべての写真を「#めいこい茨城大学」を自身の SNS (Instagram, Facebook, Twitter) で投稿し投稿画面を提示するとオリジナルポストカードを手に入れることができる。

参加者

三上 りか（人文社会科学部人間文化学科 3年）

岡山 貴郁（人文学部人文コミュニケーション学科 4年）

埜 拓斗（理学部理学科 2年）

堀部 春花（人文社会科学部人間文化学科 1年）

千葉 望乃子（人文社会科学部人間文化学科 1年）

目的：

本プロジェクトの目的は「明治東京恋伽」とのコラボレーション事業を通して五浦の美術文化及びその魅力を発信する点にある。

主な活動：

「春草と大観の五浦青春散歩」で使用されるルートマップの作成（表面）と、北茨城市から水戸までの観光地を 7 箇所挙げた観光マップの作成である。

プロジェクトの概要

背景：

現在、ゲームやアニメといったコンテンツと連携した地域活性化事業が増えていることから、茨城大学五浦美術文化研究所を拠点に五浦の文化の発信と地域のブランディングに関わってきた本学で、五浦にゆかりのある菱田春草、横山大観、岡倉天心といったキャラクターが登場する「明治東京恋伽」とのコラボレーション事業が行われた。

内容：本プロジェクトは上記のコラボレーション事業のひとつとして行われた「春草と大観の五浦遊学散歩」で使用される、天心記念美術館から六角堂・天心邸に至るコー

活動日：

基本毎週水曜日で、個々の進捗状況の報告と今後の活動についてのミーティングが主であった。この他に作成したマップの寄贈を行い北茨城市役所に赴いた。

プロジェクトの成果報告

1) 「春草と大観の五浦青春散歩」について

2020年1月9日から1月30日に亘って「春草と大観の五浦遊学散歩」が行われ、そこで本プロジェクトが作成したルートマップが配布された。当初の予定では1月28日

に企画は終了する予定でしたが、好評につき延長された。

SNS では、「楽しかった」、「菱田春草、横山大観、岡倉天心のことをより知ることができてよかった」といった多くの好評の声が寄せられた。

また、2020年1月22日の茨城新聞に、茨城大学と明治東京恋伽のコラボレーション事業についての記事が掲載された。本文中にある「既に多くのファンが展示を見たり、記念撮影をしたりして楽しんでいる。遠く大阪府から訪れた人もいるという。」という文面から、特に明治東京恋伽のファンに対して五浦の魅力や、五浦で暮らした菱田春草、横山大観並びに岡倉天心についての理解を深められたと言える。今回の企画に足を運んでくれた方々が、誰かに五浦での話をすることで、五浦に興味関心を持つ人が増えていくのではないかと期待する。



写真1 実際の新聞記事



写真2 作成したルートマップ表面
 (「春草と大観の五浦青春散歩」にて使用)



写真3 ルートマップ裏面
 (北茨城市を中心にした観光マップ)

2) 北茨城市役所へのルートマップ寄贈について

2020年2月17日に、本プロジェクトが作成したルートマップを北茨城市商工観光課へ寄贈した。寄贈部数は1000部であり、

北茨城市を中心に観光案内所などで配布されることになっている。



写真4 ルートマップ寄贈の様子1



写真5 ルートマップ寄贈の様子2



写真6 プロジェクトメンバー全員と
北茨城市商工観光課担当職員の方

3) 課題と展望について

本プロジェクトは五浦の美術文化及びその魅力を発信するところにある。今回の企画の間だけでは五浦の魅力を伝えるのに十分とは言えない。継続的に五浦の美術文化及び魅力を発信し続けていく必要があると考える。

それに伴い、今後、さらに五浦の魅力を発信するにあたって、本プロジェクトで作成したルートマップが貢献できることを願う。

水戸堀町・ひたちなか市における地域資源の活用

代表者：工学部機械システム工学科 冨田雄介

連携先

みなと waiwai クラブ ほか

顧問教員

安江健 農学部教授

参加者

工学部機械システム工学科	冨田 雄介
農学部地域総合農学科	佐藤 紗耶
農学部地域総合農学科	水上 雄介
農学部地域総合農学科	井上 智敦
工学部機械システム工学科	菅原 慎人
工学部機械システム工学科	小林 大樹
工学部マテリアル工学科	渡邊 永
工学部マテリアル工学科	角 俊輔
農学部地域総合農学科	藤嶋 里佳
農学部地域総合農学科	山田 夏菜
人文社会学部法律経済学科	山口二千翔

プロジェクトの概要

●プロジェクトの背景と目的

学生団体びたつとひたちなかの活動や、5学部混合地域 PBL 1 の授業への参加などを通してつながった連携先とともに、ひたちなか市を中心とした大学近辺の地域資源活用に挑む。さまざまな連携先の力をお借りし、学生（よそもん）が地域の人たちと協働して地域を活性化させ、豊かな経験を得るための方法を模索するのが本プロジェクトの概要である。

本プロジェクトを計画するにあたり、「地域の方々と学生がつながり、高めあう場を

創り出し、協働して地域の魅力を発信する」という、チーム結成時からの行動指針の達成を念頭に置いた。

本プロジェクトは、地域住民と自分たちだけが満足して終わりではなく、他の学生を活動に巻き込むことで活動の渦を大きくしようとしているのが特徴である。地域で多数の学生が活動することにより、さらに活性化を進める効果が期待でき、魅力を発信しやすくなる。学生は地域との協働を通して豊かな経験を積むことで、学生時代を充実させることができるはずだ。

私たちはこのプロジェクトを通して、学生が地域で活動するためのプラットフォーム的役割を担おうとしている。水戸キャンパス近くの地域で活動する現場を整備し、気軽に参加できるようにすることで、地域に出て活動したいが、手をこまねいている学生を誘い出そうと考えている。

魅力的な地域貢献のやり方を多くの学生と実践し、大学近辺の地域を学生主体で盛り上げていくのが最終目標だ。

●計画の内容

活動の計画は4つの分野に分けられる。

[分野 1]

スポーツ&カルチャーしおかぜみなと（旧那珂湊第二高校）の施設利活用のため、「みなとの寺子屋」をはじめとするイベントを開催。また、しおかぜみなとで月一程度開かれ、施設活用や地域おこしの方針を住民主体で話し合う「フューチャーズミー

ティング」に参加し、学生の客観的なアイデアを提案するとともに、地域住民の考えやニーズをうかがう。

〔分野 2〕

水戸堀町に新設される高齢者福祉施設内の地域交流スペース活用のためのアイデアを学内外の団体と出し合い、それを実施するための計画を立てる。初期は単発のイベントの試行を中心とし、近隣住民のニーズや地域とのつきあい方を探る。

当チームは、寺子屋のノウハウを活用し、放課後や休日に子供の学習を補助するための場所づくりを主催する。そのスタッフとして、気軽な教育体験の場を求める学生を招く計画である。

〔分野 3〕

ひたちなか市子どもの居場所づくりプロジェクトの団体に協力する。定期開催される寺子屋に企画持ち込み参加などをして、サポートする。運営のノウハウなどを学ぶとともに、地域の方とのふれあいから地域の課題やニーズを見つける。

〔分野 4〕

昨年度から続く「ほしいも rename」など、地域の企業や団体と連携した企画やその広報を通して、地域の魅力を外部に発信する。今後は条件が整い次第、商品開発への発展なども考えている。異業種間のコラボや連携のつなぎ役を目指す。

●実行できたプロジェクトの内容

計画のうち、ほとんど実行に移さなかった。分野 2 が施設完成時期の不透明化と別団体との対話の頓挫により取りやめ。分野 3 と 4 は実働メンバー不足のため大部分が取りやめとなった。

実行できたのは分野 1 と、そのほか分野 3 と 4 関連の連携先の視察や手伝いなどとなった。

●学内外連携の内容

今年度は、学生が充実した地域貢献活動をするためのやり方・場所探しが主であるため、他のイベント運営の手伝いや視察なども多数実施する。ノウハウや意見をいただくという連携が多かった。

寺子屋実施に際しては、前回開催時からの質の向上のため、他の教育系サークルや、寺子屋を実施する地域の団体との連携、協力に力を入れた。当日のサポート役・科学実験教室講師として、教育実践系サークルの「千の星」のメンバーにご協力いただいた。

プロジェクトの成果報告

●プロジェクトの成果

〔主催した企画について〕

みなとの寺子屋を、昨年に引き続き無事開催することができた。元 PTA 会長をはじめとした地域の方々・施設関係者の皆様のお力添えにより、これまでの課題を解決し、質を向上させることができた。また、運営メンバーが少なく、スケジュールが遅れがちだったが、地域の方々の助言のおかげで悪影響を抑えることができた。昨年よりも自分たちで行う準備が多く、イベント開催時の手続きの流れ等をよく理解できた。また、連携先・他の学生にご協力いただくことで、少ない人数でも運営できるということを再確認した。

〔他の団体の手伝い、視察について〕

イベント運営の手伝いを通して、新たな関係構築をすることができた。運営する上での工夫や手続きの効率化などのアイデアをいただくことができ、寺子屋を充実させることができた。また、計画が次々と破綻していく局面では、連携先の方々と解決策を議論し、なんとか考えをまとめることができた。

いくつかの現場の体験を通して、地域で活動する意義ややりがいを少しずつ感じる一方、難点も浮き彫りとなった。それらの活動が一般的な学生でも魅力的と思えるかは微妙で、一工夫必要だと結論付けた。

●プロジェクトの反省

計画の段階から、チームの規模に見合わない内容であり、現実をしっかりと判断できていなかった。結果として一つ一つの計画分野を十分達成できず、断片的で主体性に欠ける活動となってしまった。寺子屋や関係調整のほかは、他所が主催するイベント等の手伝いばかりであり、都合の良い労働力のように扱われたと感じるメンバーもいた。その結果、地域に出て活動することの価値がわからなくなり、チームは空中分解してしまった。将来的な連携のためとはいえ、交通費をかけてまでタダ働きをしに行くのなら実情に見合わないと感じた。

実施の過程では、関係者の反応をアンケート等で具体的に抽出することが出来なかったことが反省点である。現場では嬉しい反響に気づいても、それを明確な記録として残すものがなかったのが残念である。また、活動計画に対する助言を柔軟に反映できなかったこと、チーム内の意思疎通が十

分でなく、現場の意思で勝手に動いて混乱しがちだったことなども反省点としてあげられる。総じて、得られる知見をうまくデータ化できておらず、チーム内外での共有・活用がなされていなかった。

●今後の課題

真に価値のある地域との連携というものを突き止められなかったため、今後も模索しなければならない。他の学生がこぞって活動に参加するようになるほど、メリットの多い活動を確立しなければ、このプロジェクトの最終目標は達成されない。

この荒唐無稽な計画からなるプロジェクトから得られた反省は多い。最終目標がそう簡単なことではない以上、今後活動を続けるなら、同じ失敗を繰り返さないようにするのが課題である。

●今後の活動について

今後は、一部メンバーが中心となり、学生が地域に出て活動するための魅力的なプランを模索し、他の学生にも勧められるような環境を整備していく。

これまでに恵まれた連携先との関係を保ち、今後興味を持った人たちが自由に活動できる地盤は何としてでも維持していくつもりだ。活動の原点の一つであるPBL1や茨城学の授業などを通して地域での活動に興味を持った学生が、つまらない失敗もせず快調にスタートできるような環境を残したい。また今後、連携先やその関連団体が何か企画し、人員が必要ということがあれば、積極的に発信していきたいと考える。

現状として唯一の恒例企画である「みなとの寺子屋」は、少人数で運営した経験を活

かし、これまでの連携先や学生団体などと協力して、継続して実施する。それも関係者の馴れ合いや運営の自己犠牲で成り立たせるのではなく、協力することでスタッフ全員が満足感を得られるようなシステムづくりをしていきたい。

福祉や健康をテーマにした 多世代参加型のまちづくり

代表者：人文社会科学部法律経済学科 3年 萩原 健太

連携先

渡里住民の会
医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ
社会福祉法人くれよん・くれよん工房
茨城県立水戸桜ノ牧高等学校 JRC 部
茨城県立水戸第三高等学校 JRC 部

参加者

石川 葵	(人文学部社会科学科 4年)
伊藤 美織	(人文学部社会科学科 4年)
稲葉 有咲	(人文学部社会科学科 4年)
遠藤 杏菜	(人文学部社会科学科 4年)
岡崎 忝成	(人文学部社会科学科 4年)
田口 浩太	(人文学部社会科学科 4年)
田村 太人	(人文学部社会科学科 4年)
村上 卓也	(人文学部社会科学科 4年)
和田 爽平	(人文学部社会科学科 4年)
大森 彩花	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
柏崎 愛	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
川崎 賢汰朗	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
木村 井泉	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
久保田 稚菜	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
戸井田 杏華	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
萩原 健太	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
若林 伶奈	(人文社会科学部法律経済学科 3年)
和知 泰雅	(人文社会科学部法律経済学科 3年)

プロジェクトの概要

●プロジェクト立ち上げの背景

「福祉や健康をテーマにした多世代参加型のまちづくり」は、今年度、新たに立ち上げたプロジェクトである。私たちは、日頃茨城大学に通う中で、茨城大学周辺の地域住民(以下、地域住民)と茨城

大学の学生(以下、茨大生)の交流は、茨苑祭や附属図書館の開放など、一時的かつ限定的なものにとどまっており、同じ地域に住みながら互いの実態をよく知らないのではないかと感じた。そこで、私たちは、同じ地域に生活する住民として関係を築くため、地域住民の実態や地域に対する考え、茨大生への印象について調べ、その結果を反映させたイベントを企画しようと考えた。イベントを通して地域住民と茨大生が交流し、協働関係を築くために、昨今のまちづくりや地域づくりの際に課題に挙げられている福祉や健康をテーマにした企画を行う。

●目的

プロジェクト始動の今年度は、地域の様々な人たちと出会い一緒に活動することで、茨大生と地域とのつながりを作り、継続させていくことを目指す。具体的には次の3つの目的に取り組む。1つ目は、水戸市渡里地区の住民とつながり、協働すること、2つ目は、地域の主な課題である福祉や健康をテーマにしたイベントを行うこと、3つ目は、渡里地区の高齢者や子ども、医療・介護施設、高校生サポーター、大学生など、様々な世代が参加できる企画を実施することである。

●プロジェクトの活動計画

上記の目的を実現するため、今年度は、以下の8つの計画を立てた。

1. 地域住民を対象とした実態調査
活動内容:運動習慣、医療・健康などの聞き取り調査の実施
実施日:9月14日 場所:渡里小学校体育館

2. 渡里地区内の被災住宅での災害ボランティア活動

活動内容: 台風 19 号の被災住宅での復旧作業に参加

実施日: 10 月 24 日 場所: 水戸市渡里町

3. フロイデ内覧会でのポスター発表

活動内容: 私たちのプロジェクト活動をポスターを使って紹介

実施日: 10 月 26 日・27 日・28 日

場所: フロイデ水戸メディカルプラザ

4. 茨苑祭でのくれよん工房との共同出店・ポスター展示

活動内容: 「くれよん工房」の物販サポート, 私たちの活動紹介のポスター展示, 来場者アンケートの実施

実施日: 11 月 16 日・17 日 場所: 茨城大学

5. ふれあい渡里まつりへの参加

活動内容: 子ども向けワークショップの開催, 参加者アンケート(子ども・保護者・高校生サポーター・来場者)の実施

実施日: 12 月 8 日 場所: 渡里小学校

6. 地域住民を対象とした実態調査報告会

活動内容: 実態調査(高齢者)・アンケート(子育て世代)結果の報告

実施日: 1 月 24 日 場所: 渡里市民センター

7. ラジオ番組「ハロー! ぱるるん館」(FM ぱるるん)への出演

活動内容: 本プロジェクト活動の紹介

実施日: 1 月 28 日 場所: FM ぱるるん

8. 「すまいる広がるまちづくりサロン」の開催

活動内容: 子ども, 保護者, 高齢者, 茨大生で

チームを作り, ボッチャの実施

実施日: 2 月 8 日

場所: フロイデ水戸メディカルプラザ

●連携先の紹介

1. 渡里住民の会

渡里住民の会とは, 茨城大学周辺の渡里町・堀町・文京町・田野町の4つの地区の全住民約 14000 人の内, 約 3000 人が参加する自治組織である。水戸市住みよいまちづくり推進協議会を構成する市内 34 の地区会の1つであり, 渡里市民センター内に事務所を置いて活動している。渡里住民の会は, 68 の町内会の他, 社会福祉協議会渡里支部, 渡里女性会, 高齢者クラブ, 民生委員, 児童委員, 渡里小 PTA, 五中 PTA, 消防第 12 分団等々の関連団体で組織され, 会長 1 人, 副会長 6 人, 役員 34 人で構成される役員会を中心に, 様々な協働事業を展開している。



写真 1 渡里住民の会のみなさん

2. 医療法人博仁会 フロイデ水戸メディカルプラザ

2019 年 11 月にストッカー渡里店跡地(水戸市堀町)に開設した医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザから地域コミュニティ創出の協力依頼を受け, 一緒に活動することになった。フロイデは, 「医療・介護・障がい・福祉を複合した多機能型施設」である。施設内のカフェやフィットネスクラブを地域住

民の福祉や健康増進のため、さらには3階の一部を地域交流の場として開放する等、多世代地域交流の拠点となることを事業の1つに位置づけている。



写真2 フロイデ水戸メディカルプラザ

3. 高校生サポーター

地域交流に関心のある地元高校生である、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校、茨城県立水戸第三高等学校のJRC部の皆さんに、サポーターとして一緒に活動していただいた。



写真3 高校生サポーターのみなさん

4. 社会福祉法人くれよん

社会福祉法人くれよん(以下、くれよん)とは、毎年茨苑祭で共同出店しており、障害のある人が作ったお菓子や雑貨を販売している。くれよんは「障害があってもなくても共に楽しく生きる」という理念のもと、障害のある人達だけの働く場ではなく、障害のある人もない人も共に力を合わせて働く場として運営している。



写真3 くれよん工房のみなさん

プロジェクトの成果報告

1. 地域住民を対象とした実態調査

1) 実施内容

9月14日、渡里小学校体育館にて開催された渡里地区敬老会で、高齢者を対象に、「運動習慣」「外出・近所の付き合い」「茨城大学・茨大生の印象」など6項目25個の質問からなる調査を行った。回答者は、男性47人、女性65人の計112人だった。年齢は75~79歳、居住地区は渡里地区、世帯構成は夫婦のみが、回答者の中で最も多かった。



図1 健康づくりや介護予防のために運動している人

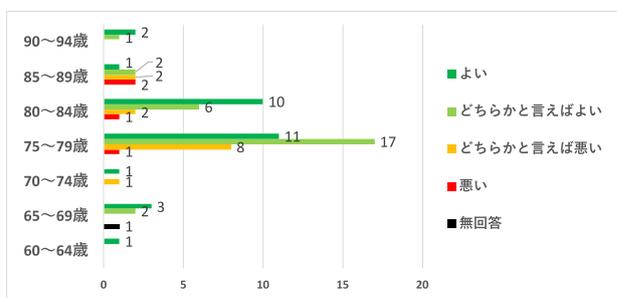


図2 運動している人の健康状態と年齢

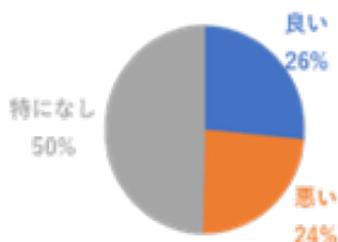


図3 茨大生のイメージ

調査結果の分析から、運動習慣と健康状態の相関が明らかになった。「運動習慣の有無(図1)」についての問いに、「はい」と回答した人の、「現在の健康状態(図2)」についての問いに対する回答を調べたところ、健康状態が「よい」「どちらかといえばよい」を合わせると、運動習慣のある人の約80%が良い健康状態であった。ただし、運動習慣はあるが、健康状態が悪いと回答した人も、各年代に若干名いた。

「茨大生のイメージ(図3)」については、特になしが半数に上るという悲しい結果となった。良いイメージでは「礼儀正しい」「まじめ」という回答を、悪いイメージでは「自転車の乗り方が悪い」「地域との交流が少ない」という回答を得ることができた。



写真4 聞き取り調査の様子

2) 成果

初めての試みにも関わらず、渡里住民の会の方々や地域住民の方々にご協力いただき、調査を実施することができた。

調査によって、渡里地区の住民の生活を把握することができた。

また、調査にご協力いただいた渡里住民の会の方から「調査結果を楽しみにしている」と声をかけていただき、この調査が、茨大生と地域住民とのつながりの第一歩となった

2. 渡里地区内の被災住宅での災害ボランティア活動

1) 実施内容

10月23日に、渡里住民の会の役員から、災害ボランティアへの参加依頼があった。その内容は台風19号の被害に遭われた住宅の復旧作業であった。

翌日の作業には、渡里住民の会(約20人)、茨大生(3年生4人、1年生2人)、教員(1人)が参加した。男性は、床はがし、泥の除去、家屋の消毒・清掃、家具・家電の廃棄を行い、女性は引っ越しのための家財道具の仕分け、食器の梱包作業を行った。



写真5 災害ボランティア活動の様子

2) 成果

被害に遭われた住宅の、床はがし、泥の除去、家屋の消毒・清掃、家具・家電の廃棄を行い、復旧と引っ越しの準備を行うことができた。

作業の中で、渡里住民の会の会長から「地域や社会のために主体的に活動する若者が少なくなる中で、茨大生がボランティアに参加してくれてとても助かる」、「住民同士の支え合いや、地域のつながりは重要だ」というお話があった。

この災害ボランティア活動で、初めて渡里住民の会のみなさんと協働した。そして、渡里地区と、渡里住民の会の活動内容について深く知ることが

できた。

3. フロイデ内覧会でのポスター発表

1) 実施内容

11月の開設を前に開催されたフロイデ内覧会で、本プロジェクトの活動内容、10月に行った災害ボランティア活動をポスターを使って紹介した。

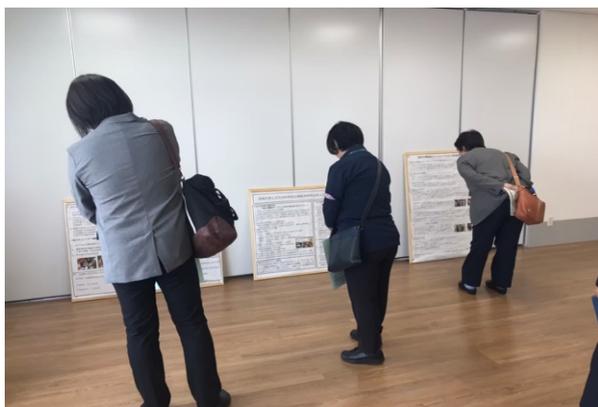


写真6 地域交流スペース「グーテンターク」でのポスター展示の様子

2) 成果

3日間の内覧会で、本プロジェクトを約150人に紹介することができた。来場した福祉関係者から「福祉の分野で若い人達に活躍してほしい」、フロイデのご担当者から「地域交流スペース『グーテンターク』をどんどん利用してほしい」と声をかけていただいた。

4. 茨苑祭でのくれよん工房との共同出店・ポスター展示

1) 実施内容

11月16・17日の茨苑祭で、水戸市にある障害者就労継続支援施設くれよん工房と、お菓子・雑貨の販売をするお店を共同で出店した。

また、くれよん工房の紹介パネルや、本プロジェクト活動の紹介、9月に行った地域住民を対象とした実態調査結果、10月に行った災害ボランティア活動について、ポスターを使って紹介した。

さらに、地域住民のことをより深く知るため、

「老後不安なこと」、「健康で気を付けていること」について、来場者にアンケートを実施した（ふせんアンケート）。約90人が回答し、回答者数が最も多かったのが20代であった。「老後不安なこと」の質問では、「お金」と答えた人が、「健康で気を付けていること」の質問では、「食事」と答えた人が最も多かった。



写真7 ふせんアンケートの様子



写真8 ポスター展示の様子

2) 成果

2日間の出店で591人が来場した。障害のある人とともに販売を行ったことによって、多くの人が、実際に障害のある人と接する機会を作ることができた。

また、くれよん工房のパネルや、私たちのプロジェクトのポスターを公開したことによって、くれよん工房と私たちの活動についての情報を発信することができた。

来場者に、活動の紹介をしている際に、「福祉の現場がどうなっているのかを広めてほしい」、「社

会保障について広く学んでおくべき」という感想をいただいた。

そして、茨苑祭という多くの人が集まる場で、私たちの活動を地域住民の方々に向けて発信できた。

5. ふれあい渡里まつりへの参加

1) 実施内容

① 子ども向けワークショップの実施

12月8日に渡里小学校で行われたふれあい渡里まつりで、子ども向けワークショップを実施した。ワークショップでは、3種類のクリスマスツリー(まつぼっくりツリー、紙コップツリー、壁掛けツリー)作りを行った。

ワークショップに参加した親子に参加者アンケートを実施した。その結果、子ども向けは76人、保護者向けは36人から回答をいただいた。

高校生サポーターとして、水戸桜ノ牧高等学校から3人、水戸第三高等学校から2人が参加し、ワークショップの運営を手伝ってもらった。高校生サポーターにも、参加者アンケートを実施した。

② ポスター展示

本プロジェクトの活動紹介、9月に行った地域住民を対象とした実態調査の結果、10月に行った災害ボランティア活動のポスター展示を行った。

③ ふせんアンケートの実施

来場者に対して、「渡里地区の自慢できるところ」、「茨大生と一緒に勉強したいこと」についてふせんアンケートを実施したところ、34人から回答を得た。「渡里地区の自慢できるところ」については、幅広い年代から回答があり、最も多かったのは、「茨城大学やフロイデ等様々な施設がある」であった。「茨大生と一緒に勉強したいこと」については、未就学児、小学生、中学生の回答が全体の約7割を占めていた。最も多い回答は、「茨大生に勉強を教えてほしい」であった。



写真9 ワークショップの様子



写真10 アンケート記入中の高橋水戸市長、小泉水戸市議

2) 成果

ふれあい渡里まつりには初めて参加したが、渡里住民の会の協力もあり、子ども向けワークショップでは、約120組の親子と楽しく交流できた。

参加者アンケートには、「またお兄さんお姉さんと一緒に何か作りたい」(未就学児)や「子どもと交流してほしい」(保護者)、「子どもに勉強を教えてほしい」(保護者)、「子どもや地域と関わるボランティアに興味を持った」(高校生サポーター)という感想が寄せられた。

また、私たちの活動や、実態調査の調査結果、災害ボランティア活動について、ポスターを使って紹介し、本プロジェクト活動の内容を発信することができた。

その他、来場者からは、「国田地区でもイベントを開催してほしい」や「もっと渡里地区の魅力を発信してもらいたい」、「子ども向けのイベントを開催してほしい」といったコメントをいただいた。

6. 地域住民を対象とした実態調査報告会

1) 実施内容

1月24日、渡里市民センターで、渡里住民の会の役員の人たちに対して、9月に実施した実態調査(高齢者)、12月に実施したアンケート(子育て世代)の分析結果を報告した。



写真11 実態調査報告会の様子

2) 成果

当日の報告会には、渡里住民の会役員(約20人)に出席していただいた。調査報告を受けて、会長から「渡里地区住民の実態、茨大生に対して抱いている印象などについて、日頃から感じていたことが数字として可視化され、事実として受け止めることができた」と感想をいただいた。

報告後、「茨大生は、知的なリーダーとして、この地域を引っ張って行ってほしい」、「調査報告で終わらせずに、今後も地域活性化等、活動を続けてほしい」といった意見をいただいた。

7. 「ハロー!ばるるん館」でのラジオ出演

1) 実施内容

1月28日、ラジオ番組「ハロー!ばるるん館」(FMばるるん)に出演した。ラジオには、渡里住民の会副会長と共に出演した。番組の中で、本プロジェクトのきっかけ、渡里地区内の被災住宅での災害ボランティア活動、ふれあい渡里まつりへの参加など、これまでの活動について話をした。



写真12 ラジオ出演時の様子

2) 成果

ラジオという公共放送を活用して、私たちのプロジェクト活動の内容をたくさんの人へ発信することができた。

8. 「すまいる広がるまちづくりサロン」の開催

1) 実施内容

2月8日、フロイデの地域交流スペースをお借りして、渡里地区の高齢者、親子、茨大生で、ボッチャを楽しんだ。ボッチャとはもともと、運動能力に障害がある競技者向けに考案されたスポーツであり、小学生から高齢者まで楽しく体を動かすことができる。多世代混合のチームを4つ作り、笑い声が響く中で一緒に体を動かした。試合中は、世代を問わず多くの参加者が互いに拍手や声援を送り合い、活気のあるイベントとなった。



写真13 ボッチャを楽しむ様子



写真14 サロンのチラシ

2) 成果

当日は、高齢者が13人、子どもが16人、その保護者数人の参加があり、予定の倍以上の人数が集まり、盛況のうちに終了した。開催にあたって、渡里住民の会にはサロンの宣伝を、フロイデには会場の提供をしていただいた。参加した人から「普段、このように大勢で遊ぶことがないので、また友達や地域の人とポッチャをやりたと思った」

(小学校高学年女児)、「おじいちゃんおばあちゃんとふれあえた」(小学校低学年男児)、「いろんな人と仲良くなれた」(小学校高学年男児)、「とても面白くてまたお願いします。子どもたちともっと遊びたいと思います」(70代男性)「今後もこのような機会があれば参加したい」(保護者)という感想が寄せられ、多世代が参加する遊びの場を提供することができた。

保護者の中には、フロイデの存在を初めて知った人もいて、地域の中に体を動かす場や、交流の場があることを知っていただいた。

●まとめ

本プロジェクトは、今年度新たに立ち上げたにもかかわらず、地域の様々な人たちと出会い、共に活動することができた。

渡里住民の会のみなさんとは、災害ボランティア、ふれあい渡里まつりやサロンなどの活動を通じて、つながりをつくることができた。会長から、「我々は、茨城大学を地域の資源だと思っている」と言っていたが、大学に対する地域からの期待を感じた。

また、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校 JRC 部、茨城県立水戸第三高等学校の JRC 部のみなさんに、高校生サポーターとして本プロジェクトに参加していただいた。参加した高校生から、「いろいろな人と交流できたことがよかった」と感想をいただき、多世代交流の機会を作ることができた。

今年度の活動の成果として、地域住民を対象とした実態調査から、住民の福祉や健康などに関する生活実態や茨大生への印象を明らかにしたこと、子ども向けワークショップやサロンの開催を通じて、渡里地区地域住民の交流の場を設けることができたことなどがあげられる。実態調査などによって、地域住民の興味関心を明らかにしたので、来年度以降の活動に反映させるとともに、この調査を継続して行っていきたい。また、イベントの開催に関する要望が寄せられたため、来年度以降もワークショップやサロンを継続していきたい。

最後に、渡里住民の会には、活動を行うにあたり大変お世話になりました。大槻勢次会長、横川洋一副会長、寺門和夫副会長をはじめ、役員のみなさんには、お忙しい中、たくさんの助言をしていただき、どうもありがとうございました。

また、イベントの開催にあたり、フロイデには、活動場所を提供していただきました。統括管理者鈴木明廣様には、お忙しい中ご協力いただきまして、ありがとうございました。

この場をお借りして、お礼申し上げます。

大学生による“ものづくり教室”の企画と実践

代表者：清水 喬宏（工学部機械工学科 4年）

連携先

茨城県立北茨城特別支援学校
教頭・伊藤 芳昌
茨城県立常陸太田特別支援学校PTA
PTA会長・萱場 晶子

参加者

檜村 聡（工学部機械工学科 4年）
高橋 卓弥（工学部機械工学科 4年）
水上 拓実（工学部機械工学科 4年）
清水 喬宏（工学部機械工学科 4年）

プロジェクトの概要

- プロジェクトの背景
現在、ゲームやテレビなどのバーチャルな体験が多くなり、実際に自分の手で体験できる事が少なくなってきている。それが小学生の理数離れの原因の一つとして考えている。
そこでものづくりでのリアルな体験を通じて、理科や数学・身近な工学などについて楽しく学んでもらう場を提供することを目的とし、ものづくり教室を行う。
- プロジェクトの目的
茨城県立北茨城特別支援学校および茨城県立常陸太田特別支援学校PTAより、児童に社会とのつながりを体験させる取り組みを計画したいとの要望があり、PTAと我々大学生とで、本プロジェクトを企画した。プロジェクトの目的を以下とする。
 - 児童にものづくりの楽しさを伝え

る。

- ものづくりの活動を通して、大学で学習した知識を実践し、使える知識に変換する。

プロジェクトの内容

今までに学習してきたものづくりに関する知識を基礎として、児童が楽しいと思うような“ものづくり”のプログラムを検討し、教室を開催する。教室は、ものづくり教室開催の依頼があった茨城県立北茨城特別支援学校と茨城県立常陸太田特別支援学校PTAと相談し実施した。実際にものづくり教室で行った主な内容を以下に示す。

- マジックハンド(図1)の製作
- マジックハンドを使用した遊び
- 電子回路を用いた回転体(図2, 図3)を使用した遊び

本年度の活動では、鉄道の集電装置等で用いられるパンタグラフ機構と医療や先端研究など幅広い分野で普及している3Dプリンターによる造形物を用いたマジックハンドの製作を中心に行った。



図1 マジックハンド外観

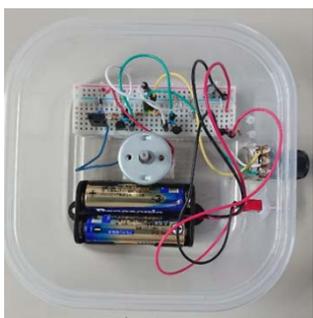


図2 回転体
電子回路



図3 回転体
外観



図5 マジックハンドと回転体を使った遊びの様子

• 活動日程

本プロジェクトでは、茨城県立常陸太田特別支援学校にて全学年を対象に1回、茨城県立北茨城特別支援学校にて1・2年生対象、3・4年生対象として2回ものづくり教室を開催した。

- 茨城県立常陸太田特別支援学校
日時：令和元年10月5日
当日のスケジュール：
10:00～10:20 はじめの会
10:20～11:20 マジックハンドの製作
11:30～11:50 マジックハンドを使った遊び
11:50～12:05 おわりの会
12:10 写真撮影・解散
活動の様子：
活動の様子を図4、図5に示す。



図4 マジックハンド製作の様子

- 茨城県立北茨城特別支援学校
日時：令和元年11月18日
(1・2年生対象)
令和元年12月2日
(3・4年生対象)
当日のスケジュール：
10:00～10:10 はじめの会
10:10～11:10 マジックハンドの製作
11:10～11:30 マジックハンドを使った遊び
11:30～11:40 おわりの会
写真撮影
11:45 解散
活動の様子：
活動の様子を図6に示す。



図6 マジックハンド製作の様子

プロジェクトの成果報告

本プロジェクトでは、今後の活動の参考させていただくため、作業内容、学生の対応についてアンケート調査を実施した。

- 茨城県立常陸太田特別支援学校
アンケート対象：保護者
アンケート結果：
アンケート結果を図7～図9に示す。
また、自由回答の結果を下記に示す。

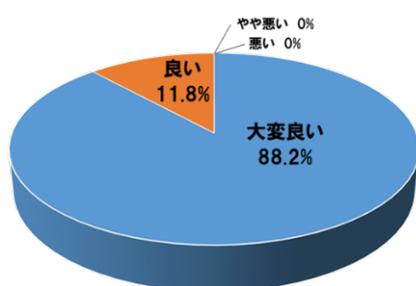


図7 Q1 ものづくりの内容について

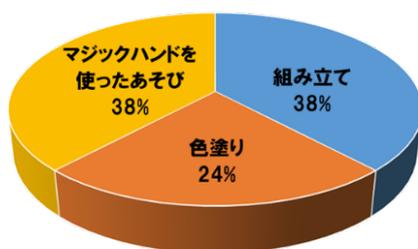


図8 Q2 どの作業を一番楽しんでいましたか

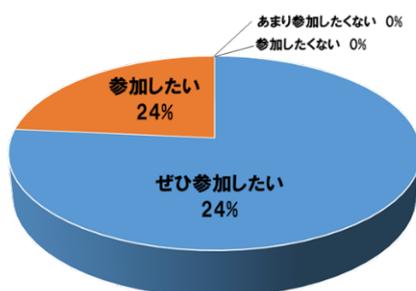


図9 Q3 今後のものづくり教室に参加したいか

Q4 自由回答 (一部抜粋)

小学校

1年生

- 初めて親子で経験出来て良かった。楽しく過ごせた。
- 作り方をやさしく教えてもらえてよかった。
- 親や学校の先生以外の大人と触れ合う機会が得られてよかった。

2年生

- 見本があると作成しやすかったと思う。

3年生

- 茨大生と話しながら作業を進めている所が見られてよかった。

6年生

- 色々大変かと思いますが今後も活動を続けて欲しい。

中学校

1年生

- ネジが少し小さく感じた。
- 集中して作業できてよかった。

高校

2年生

- 学生にとって参加目的が明確になっているか。今回のような催しは学生側にとっては将来コミュニケーションの難しい海外での現場・現地作業に直面した際生きてくると思う。

3年生

- 作り方を教えるときに声掛けなど工夫して優しく接していたのが良かった。卒業なので最後の参加になるがいい思い出になった。

- 茨城県立北茨城特別支援学校
アンケート対象：各学年担任の先生方
アンケート結果：
アンケート結果を図10～図13に示す。また、自由回答の結果を下記に示す。

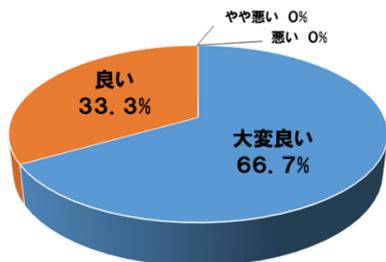


図10 Q1 作業の難易度について

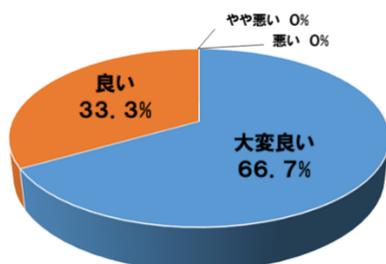


図11 Q2 作業時間について

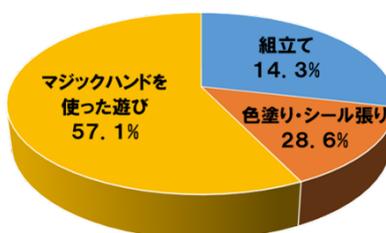


図12 Q3 どの作業を一番楽しんでいたか

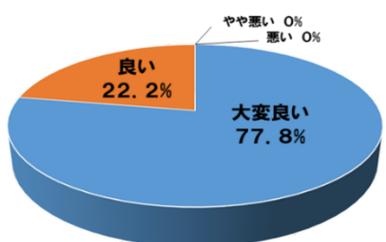


図13 Q4 学生の対応について

Q5 自由回答（一部抜粋）

- 興味のある教材や好きなものを取り入れることを心掛けている。実態に応じて支援の量や方法を変えるように心掛けている。
- カラーペンやシール、マスキングテープなど多くの選択肢があり子どもたちが試行錯誤しながら製作することができた。
- 作ったもので遊べることで児童の意欲が高まったと思います。
- 学生さんたちのおだやかで優しい対応、用意していただいた活動がすばらしく、いつもの授業よりずっと集中して取り組んでいたと思います。

まとめ

本プロジェクトでは、児童にもものづくりの楽しさを伝えること、ものづくりの活動を通して、大学で学習した知識を実践し、使える知識に変換することを目的として活動を行った。

活動後のアンケートの結果から、子どもたちにもものづくりの楽しさを十分に伝えることが出来たと考えられる。

今回の活動では、学生がすべて指導することなく、子どもたちが自分で考えて製作することが出来ていたことがとても印象的であった。そこで今後の活動の内容として、学生がつくるものをすべて提案するだけではなく、子どもと一緒につくるものを考えるという新たなものづくり教室の開催を検討したい。

茨大生×地域防災プロジェクト

～日常＋αで命を繋げる～

代表者：人文社会科学部法律経済学科 3年 中橋彩乃

連携先

なし

名取 日菜

(理学部理学科 1年)

藤根 大己

(工学部機械システム工学科 2年)

栗田 咲希

(人文社会科学部現代社会学科 2年)

赤澤 恵那

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

荒井 天雄

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

栗村 穂乃香

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

遠藤 航

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

大森 開

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

小倉 勇輝

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

具志堅 光

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

服部 帆高

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

松原 日向子

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

宮本 優里

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

森田 彩未

(人文社会科学部法律経済学科 2年)

小池 さくら

(人文社会科学部人間文化学科 2年)

渡邊 千尋

(教育学部国語専修 2年)

参加者

上野 真果

(工学部都市システム工学科 1年)

岡野 ひなた

(工学部都市システム工学科 1年)

高村 美涼

(工学部都市システム工学科 1年)

那須 玄

(工学部機械システム工学科 1年)

田澤 玲菜

(人文社会科学部現代社会学科 1年)

矢幅 彩花

(人文社会科学部現代社会学科 1年)

岡田 祐輔

(人文社会科学部現代社会学科 1年)

石嶋 千恵

(人文社会科学部法律経済学科 1年)

内桶 晴人

(人文社会科学部法律経済学科 1年)

川上 藍

(人文社会科学部法律経済学科 1年)

貞政 良

(人文社会科学部法律経済学科 1年)

矢口 真衣

(人文社会科学部法律経済学科 1年)

加茂 佐代子

(人文社会科学部人間文化学科 1年)

栗原 佳宏

(理学部理学科 1年)

日賀野 頼巴

(理学部理学科 2年)

坂井 映里奈

(理学部理学科 2年)

赤羽 祐介

(理学部理学科 2年)

町田 天斗

(農学部食生命化学科 3年)

佐藤 綺音

(人文社会科学部法律経済学科 3年)

中橋 彩乃

(人文社会科学部法律経済学科 3年)

三宅 彩

(人文社会科学部法律経済学科 3年)

吉田 彩乃

(人文社会科学部法律経済学科 3年)

中三川 瑞樹

(人文社会科学部人間文化学科 3年)

久保田 大貴

(工学部メディア通信工学科 3年)

吉田 祥太

(理工学研究科理学専攻 1年)

プロジェクトの概要

●背景

私たち茨大東北ボランティア*Fleur*は昨年度の学生地域参画プロジェクト内において、講師を招き講演会を行った。その中で、東日本大震災の体験を聞き共感することももちろん大切であるが、教訓から知識を身につけ、緊急時に行動出来るようになるということが最も重要視されるべきであると感じた。

今年度は昨年度のテーマ「被災地と繋がる」から一步前進し、「被災地から学び、身につける」機会を作りたいという思いで本

テーマを設定した。

●活動内容

- ・開催日時：12月14日12:00~14:30
- ・会場：茨城大学図書館
- ・内容：防災ワークショップ

●宣伝方法

11月中旬、宣伝活動のためにポスターや配布するビラの製作に取り掛かった。ポスターは昨年のを参考にデザインを考案し、大学内の掲示板(各学部棟・共通教育棟)にて掲示した。また、水戸キャンパスのみならず日立・阿見キャンパスの学内掲示板にもポスターを設置し、さらなる集客を図った。学外では県庁や水戸市内の各市民センター(渡里、堀原、石川、常磐、国田、柳河の6つ)にも協力してもらうなど、外部機関とも連携して当プロジェクトの宣伝を行うことが出来た。

配布するビラについても当プロジェクト担当のメンバーが中心となってデザイン・制作し、大学生協前やキャノピー広場にての宣伝活動は他のFleurメンバーとも協力して平日のお昼休みの時間を利用して行った。

主にTwitterやFacebookを用いたSNS上での情報拡散も行い、これら以外にも茨大東北ボランティア*Fleur*の顧問である伊藤哲司先生が担当する授業の冒頭でも宣伝活動を行うなど、学内・学外・インターネットを通じた精力的な宣伝活動を行うことが出来たと言える。

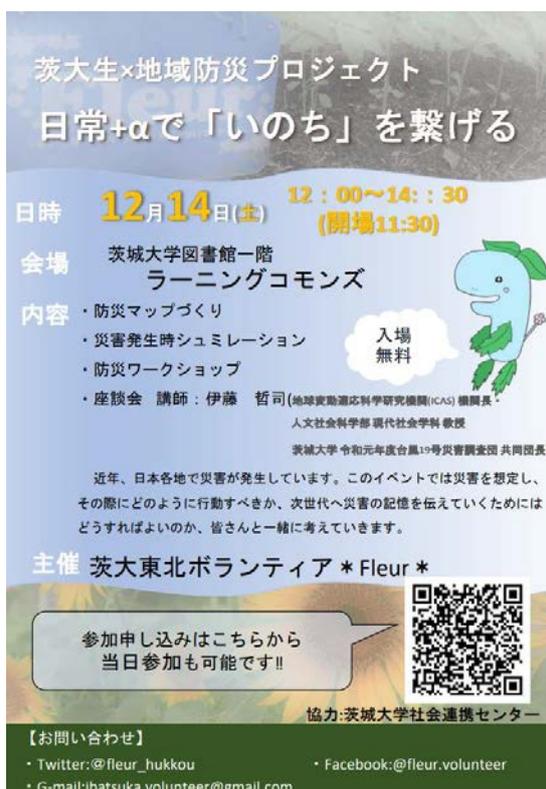


写真1 宣伝ポスター

●当日の内容

開会の挨拶後、*Fleur*メンバーによる今年度の活動紹介が行われ、事前に*Fleur*メンバーに行ったアンケート調査の結果の発表では、それぞれが考える復興の在り方や東北と向き合う姿勢を周知すると共に再確認することができた。

その後、ICAS 機関長であり、人文社会科学部現代社会学科教授の伊藤哲司先生を講師として、座談会を行った。この座談会では、水戸市にも甚大な被害をもたらした令和元年東日本台風(気象庁より)についても触れた。また、防災の在り方としては建造物を整備することで災害を防ぐハード対策や災害情報や避難場所を整備することで行うソフト対策だけでなく、自ら避難する力や判断力が今後は重要になると述べ、ひとりひとりの防災意識の大切さを訴えた。

そして、個人の避難する力を養うためのワークショップである茨城大学周辺地域の「逃げ地図づくり」を行った。土地ごとの地形、交通の特性や避難所との位置関係により、最適な避難経路が異なることを知った。

各グループ内での話し合い後、全体での意見交換が行われると大人数ならではの多方面からの意見を知ることができ、決して個人では気づくことのできない危険性や注意点を共有することができた。そして、最後に今回の企画のアンケート調査を行い、幕を閉じた。

●感想

今回の企画では、個人の防災意識に焦点を当てこれまでのワークショップよりも現実感があり、かつ有用性の高いワークショップを行うことができ、*Fleur*メンバーはもちろん一般の方の防災意識向上を促すことができた有意義な時間であった。

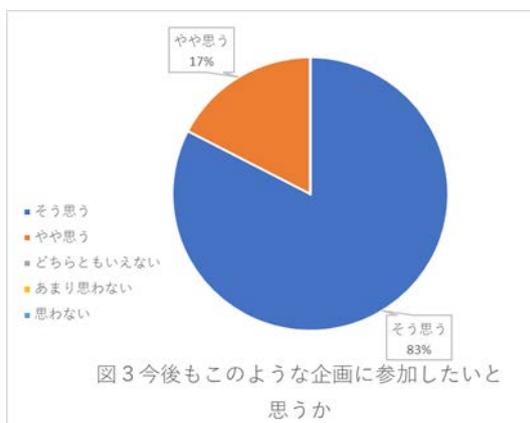
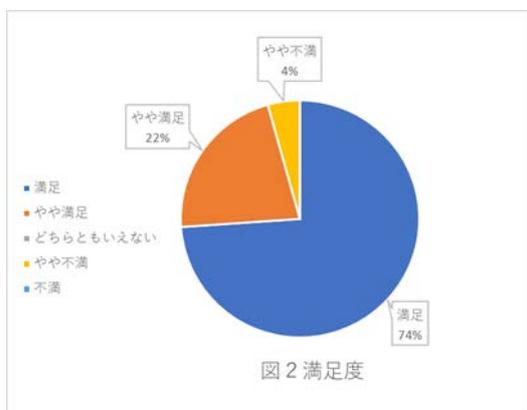
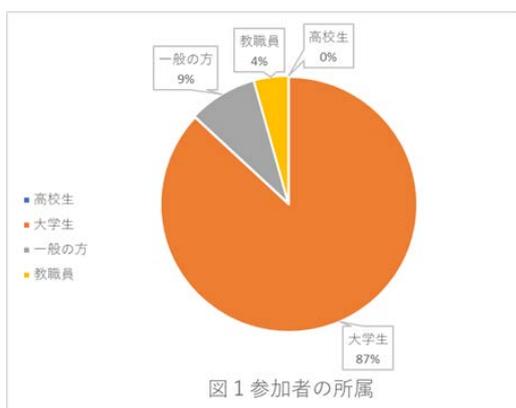


写真2 ワークショップの様子

プロジェクトの成果報告

ワークショップ終了後に参加いただいた方へ、アンケートの回答をお願いした。アンケートの結果を以下に一部紹介する。

●アンケート結果



本企画には計 23 名の方が参加された。内訳は、大学生が 20 名、一般の方(地域の方)が 2 名、茨城大学教職員の方が 1 名となっている(図 1)。

企画の満足度に関しては、満足と回答した方が 17 名、やや満足と回答した方が 5 名(計 96%)、やや不満と回答した方が 1 名(4%)

となった(図 2)。全体では今回の企画に高い満足度を感じていただくことができた。

今後もこのような企画に参加したいと思うか、という質問では、そう思うと回答した方が 19 名(83%)、やや思うと回答した方が 4 名(17%)となった(図 3)。

以上のような結果から、本企画では広報活動が今後の課題として挙げられる。参加者の 9 割近くが大学生であり、一般の方(地域の方)が 2 名のみとなった。今回の企画では、“地域で行う防災活動”を目的の 1 つとしていたため、より多くの地域の方へ参加していただけるよう学外での広報活動においてさらに工夫が必要であった。また今回行った逃げ地図作りでは、事前の申し込みによって把握した参加者の居住地区を中心に、ワークショップで使用する地図を準備した。そのため、当日参加された方の居住地区の地図が準備できなかったことが、企画満足度で一部低い評価を頂く結果につながったのではないかと考えられる。

本企画のような防災ワークショップの参加については前向きな意見が多くかった(図 3)。そのため、今回の課題を生かし、我々がボランティア活動を通して感じたこと・学んだことを伝えるとともに、より多くの人と防災について考える機会を今後も作っていきたい。

●今後の展望

今回の企画のように、自助と共助の幅を広げていくことに少しでも役に立つような企画を今後も開催していきたい。今回、参加して下さった方の多くが、「また参加し

たい」という、嬉しい意見をくださった反面、大学生が大半を占め、地域の方々の参加者が少ない現状がある。地域の方々あつての地域防災であるため、広報活動により力を入れていきたい。また、伊藤哲司先生より、台風19号(ハギビス)の被害にあった地域に花を植える活動をともに企画しないかとお話をいただいている。この活動をはじめとし、様々な企画を地域とともに行っていきたい。

大洗応援隊！Presents

ほげFes～音楽で広がる商店街～

代表者：人文社会科学部法律経済学科 2年 森田 耕平

連携先

大洗町商工会
髭窯商店街
大洗町商店街

通して情報発信を行うことで、地域のみならず多くの方々に関心を持ってもらうよう心掛けた。

参加者

森田 耕平（人文社会科学部 2年）
青山 実樹（理学部理学科 3年）
細川 顕大（工学部知能システム工学科 3年）
大貫 ひかる（人文学部社会科学科 3年）
小野寺 哲（工学部電気電子工学科 3年）
村岡 早紀（人文学部社会科学科 3年）
芝本 匠冴（工学部情報工学科 1年）
鈴木 美雪（理学部理学科 1年）

〈概要〉

ほげfesでは、Twitterを利用し一般の方から参加者を募り、ほげほげカフェで演奏をしてもらうという形をとった。

準備期間として、演奏者の募集を12月から行い、日程調整などを行った結果、ゴムバンドさんという地域の行事等で演奏を行っている方々に演奏していただくことが決定した。

また、当日の流れについて話し合いを行い、来ていただいた方にどうしたら楽しんでもらえるか、議論を重ねた。

プロジェクトの概要及び背景

〈背景〉

大洗応援隊！は従来海水浴等で茨城県の観光地として有名な大洗町をさらに盛り上げるべく、2012年から大洗町にある髭窯商店街で「ほげほげカフェ」という休憩所を運営してきた。

普段の活動では、ほげほげカフェの運営を通して①地域や観光客の方々と交流を深めること、②大洗の魅力をより多くの人に伝えることを目的にしてきた。

本プロジェクト（以下、ほげfes）は、“①地域や観光客の方々と交流を深めること”を重視したものである。また、“②大洗の魅力をより多くの人に伝えること”についても、大洗応援隊！のTwitterアカウントを

プロジェクトの成果報告・反省

ほげfes当日、開始前にはカフェ前での声掛けを行ったものの、あまり集客することができなかった。そのため、少し心配していたが、演奏が始まると、多くの方が足を運んでくださり、最終的に満席の状態となった。

また、ほげfesに来ていただいた方に今回のイベントに対する感想等を伺ったところ、「地域でこういったイベントを学生が主体となって開催してくれるのはありがたい。」との声をいただいた。



写真：ほげ fes 当日の風景

(反省点と今後に向けて)

今回のプロジェクトは1月に実施したため、準備期間が毎年大洗で開催されるあんこう祭りと被ってしまい、演奏者の募集や事前準備が遅れてしまった。今後は先を見越した、入念な準備が必要であると実感した。

特別編



特別編について

2020年3月3日に予定していた「学生地域活動発表会〈はばたく! 茨大生〉2019」のために学生たちが準備した資料を以下に掲載しています。

◎発表団体一覧

◎資料 以下の3種類があります。

パワーポイント資料 口頭発表のために作成した資料です

ポスター資料 上記の発表会で、ポスター発表のために作成した資料です

配布資料用 来場の方々に配布する資料に収めるために作成した資料です

No.	プレゼンテーション	ポスター発表	活動概要	プロジェクト名・団体名	活動内容の紹介	主な活動地域
1	○	○	○	○ 『みとっ歩ーゼロから始める水戸生活-vol.3』制作プロジェクト	新しく水戸に住む、「ゼロから水戸生活を始める学生」に向けて、水戸市外出身の大学生の目線からおすすめのお店や施設などを紹介するフリーペーパーを作成し配布する。	水戸市
2	○	○	○	○ 大学生による“ものづくり教室”の企画と実践	鑄造クラブは、リアルな体験を通じて、理科や数学・身近な工学などについて楽しく学んでもらう場を提供することを目的として、各地でものづくり教室を開催しています。 本教室は、小学生に限らず、中学生や高校生、保護者、小中学校の先生方にも楽しんでもらえるような幅広い活動を行っています。	日立市、常陸太田市、北茨城市
3	○	○	○	○ 茨大生×地域防災プロジェクト（茨大東北ボランティア＊Fleur＊）	私たちがこれまでの活動で学んだ、防災の重要性と身に着けるべき知識を学外の人にも伝えようとワークショップを企画しました。「逃げ地図」と言って、実際に避難所までどのくらいの時間がかかるのかを想定した地図を作成しました。また、顧問の伊藤先生にも講演をしていただきました。	水戸市、福島県、宮城県
4	○	○	○	○ 福祉や健康をテーマにした多世代参加型のまちづくり	福祉や健康をテーマとしたイベントを通じて地域の人与人之间関係を築き、よりよいまちづくりを目指すプロジェクト。渡里住民の会、フロイデ水戸メディカルプラザのご協力のもと、健康習慣に関する実態調査、子ども向けワークショップの開催、高齢者・子どもと体を動かすサロンの開催・運営などを行った。	水戸市渡里地区、渡里小学校、渡里市民センター、医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ
5		○	○	○ IoTを用いた茨城県観光業活性化プロジェクト「Bridge」	私は工学部に所属しています。そこで、従来の観光業にテクノロジーをプラスすることでお客と観光地をつなぐサービスを考えていました。そこで、今回はLINEで行うスタンプラリーを考え、実際に行方市で行われているふれあい祭りで導入をしました。	行方市
6		○	○	○ のらボーイ&のらガール 食農教育プロジェクト	阿見町にてお借りした畑を用い、農作物を育てたり、そばの種まき、収穫、そば打ちのイベントを実施しました。阿見町の子どもたち、保護者の方々と楽しく交流することが出来ました。これらのイベントを通し、食農教育について考える機会となれば幸いです。	阿見町
7		○	○	○ FES(FoodEducationSupporter)～食育応援隊～	活動は主に①小学校での授業のサポート②小学校で農業の授業、畑作業③食育通信の発行です。今年には子供たちに食に関する知識を楽しく学んでもらうだけでなく、地元への関心を高めてもらいたいという思いで、農業に限らず幅広い活動で地元の小学生との関わりを大切にしてきました。	阿見町の7小学校 (君原小、阿見小、あさひ小、阿見第二小、阿見第一小、本郷小、舟島小)
8		○	○	○ 減量住宅in水戸		
9		○	○	○ さまーすくーるin大子2019	さまーすくーるは主に水戸市内・大子町内の子どもを茨城県大子町の初原ぼっちの学校に招待し、2泊3日のキャンプをします。運営・企画はすべて学生が行う事が特徴であり、大子町の自然を生かした企画を楽しんでもらう事や普段の生活でできないような体験をしてもらうことが目的です。	水戸市、大子町
10		○	○	○ 地域の伝統文化継承に学生が取り組む「西塩子の回り舞台」プロジェクト	本プロジェクトは常陸大宮市西塩子地区において3年に1度開催される「西塩子の回り舞台」を成功させるために活動しました。保存会の方々と協力し4月から10月20日の本公演まで舞台の組み立てや広報を行い、本公演では運営や舞台裏方に携わりました。来場者アンケートやリーフレットも作成しました	常陸大宮市
11		○	○	○ 茨城大学地質情報活用プロジェクト	茨大で地球科学を専攻する学生を中心としたプロジェクトです。 「地質」に関するツアーやイベントを通じた茨城県北地域の地域振興を目指し、活動しています。 今年度は観光マップの改訂やイベントでの補助、広報活動に加えて新しく茨城県内の小学生に向けた地球科学の教材作成に取り掛かりました。	水戸市、ひたちなか市
12		○	○	○ まなびの輪	私たち「まなびの輪」は、活動を支えてくださる地域の方々とともに大洗町の多文化共生の推進に向けて楽しく活動しています。主な活動は、在住外国人のための日本語教室の運営、外国にルーツを持つ児童・生徒のために小学校・中学校が行っている取り出し授業の支援、国際交流イベントの企画・開催です。	大洗町
13		○	○	○ 五浦遊学ルートマップ作成プロジェクト	私達茨城五浦遊学ルートマップ作成プロジェクトは、2020年1月に行われた明治東京恋伽とのコラボイベントの企画である五浦遊学ルートマップの作成と北茨城全体の観光マップの作成を行いました。作成したマップはコラボイベント後も北茨城市を中心に活用していただける事になっています。	水戸市及び北茨城市

14		○	○	○ 水戸堀町・ひたちなか市における地域資源の活用	ひたちなかを拠点とし、学生と地域のコラボで新しい魅力の創出をめざします。地域に目を向けて見つけた課題を、学生ならではの自由な発想で解決していくため、連携先と協働しています。 今後、ほかの学生も活動に巻き込んでいけるような魅力的な地域貢献のやり方を提案していきます。	ひたちなか市（那珂湊地区）
15		○	○	○ 大洗応援隊！Presents ほげFes～音楽で広がる商店街～	大洗応援隊では、月に一回大洗町の商店街でほげほげカフェを開いています！ カフェは地域の方々にとっての交流の場所、観光客の方々にとっては休憩所として利用していただいています！ あんこう祭り等、地域のイベントにも参加させていただいています！	大洗町
16		○	○	□ 日本一つながる学食プロジェクト	日本一つながる学食プロジェクトは、株式会社坂東太郎様と学生がチームを組み茨城大学内にある茨苑食堂を盛り上げていくことで人と人がつながる取組を行っています。今年度も70周年記念いばだいふいなんしゅや茨城県産にこだわったメニューを開発しました！	茨城県
17			○	□ 茨城大学よさこいサークル海砂輝ーみさきー	私たちは今年5月に5周年となります！よさこい祭りの参加や、老人ホームなどの各施設、各イベントにてよさこい演舞依頼をうけています！この2年間でオリジナルで曲と衣装を作成しました！毎週月金17：35～19：00、教育学部B棟の広場で練習しています。誰でもいつでも訪問大歓迎です！	水戸市
18				□ iBIRD	プロバスケットボールチームの茨城ロボッツと連携し、スポーツによる地域活性化を目指して活動している。	
19				□ IVO茨城大学学生ボランティア団体	さまざまなボランティア活動に取り組んでいる。	

『みとっ歩 – ゼロから始める水戸生活 –VOL.3』制作プロジェクト

発表者：教育学部3年 阪井 一仁

2 みとっ歩とは？

- 「大学生と地域を結ぶ橋渡し」となるべく、新たに水戸に来た大学生にオススメしたい水戸の魅力を発信するフリーペーパー。



3 みとっ歩制作のきっかけ

- 2017年6月頃、水戸市市長公室みとの魅力発信課の方々からの「水戸市外出身の大学生の目線で水戸のパフレットを作ってほしい」とのお声かけがあった。
→有志が集まり、制作を開始。(10000部発行)



→vol.1制作ののち、「せっかくだから活動を続けたい！」とメンバーから声。
学プロを活用しての、vol.2企画が持ち上がる。

4 今号で意識したこと

- 持ち運びしやすいサイズ (B5サイズ) に
- 写真を多く、文章はなるべく親しみやすく
- 「大学生」に是非オススメしたい場所、気になるであろう場所をセレクト



5 今後の展望

- vol.4の発行
(芸能人への取材や水戸市外にも目を向けてみたい)
- 「街」に脚を運ぶための施策ミーティングの開催
- 今まで以上に「大学生」と「街」をつなぐ冊子へ

大学生による ものづくり教室の企画と実践 活動報告

代表 清水喬宏 (工学部機械工学科 4年)

1

活動目的

1

理数離れの原因

バーチャルな体験の発達に伴い、
実際に自分の手で体験できる事が
少なくなっている。



ものづくりを体験出来る教室を開催

理科や数学・身近な工学などについて楽しく
学んでもらう機会の提供



多方面からものづくりに対する興味を持って
もらえるような教室を目指す。

活動目的

2

活動メンバー

茨城大学 工学部機械工学科 伊藤研究室を中心に活動
平成13年度工学祭より発足
年間3~4回のペースで活動

活動人数:
学生49人(令和2年現在)

主な活動場所:
茨城県立北茨城特別支援学校
茨城県立常陸太田特別支援学校
茨城大学日立キャンパス
日立市立日立特別支援学校
エコフェスひたち

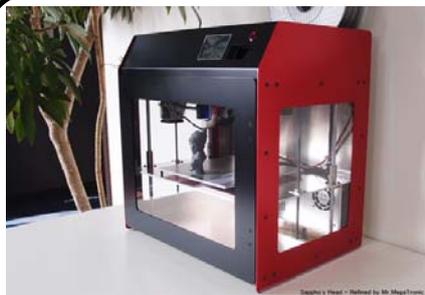


3

活動目的

3

使用機器



3Dプリンター



小型電気炉



3軸加工機



レーザー加工機



ボール盤

4

活動目的

4

作品例



マジックハンド



銅鐸型
クリスマスベル



オリジナル
マグネットプレート



歩くヤジロベー



空き缶
ウインドカー



動くブラシ君



ウォーキング
アニマル



3軸加工
アクリルハンコ

5

本年度活動目的

5

児童に社会とのつながりを体験させる取り組みを計画したいとの要望から、PTA様と大学生とで、本プロジェクトを企画。

- ・児童にもものづくりの楽しさを伝える。
- ・ものづくりの活動を通して、大学で学習した知識を実践し、使える知識に変換する。



- ・ものづくり活動における作品
 - ・マジックハンド
 - ・回るシャボン玉
- ・茨城県立北茨城特別支援学校における活動
- ・茨城県立常陸太田特別支援学校における活動
- ・まとめ

7

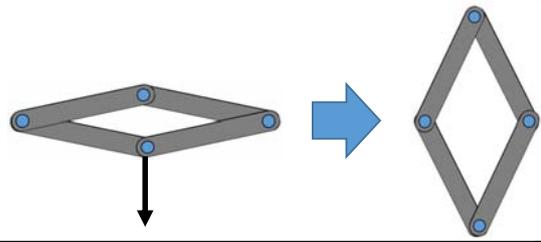
- ・ものづくり活動における作品
 - ・マジックハンド
 - ・回るシャボン玉
- ・茨城県立北茨城特別支援学校における活動
- ・茨城県立常陸太田特別支援学校における活動
- ・まとめ

8

ものづくり活動における作品 7

パンタグラフ機構

対向するリンクの長さが等しい
4節リンク機構(平行リンク機構)
鉄道の集電装置等で利用.



3Dプリンター

データを元に立体物を造形
医療・教育・先端研究など
幅広い分野で普及



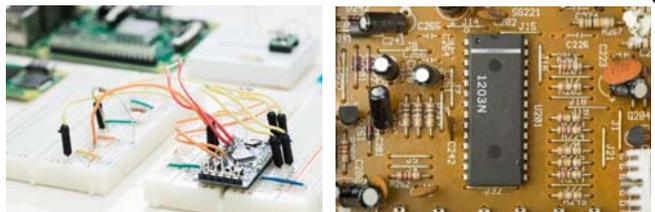
3Dプリンター製部品 + 連結パンタグラフ機構
→マジックハンド

9

ものづくり活動における作品 8

電子回路

ダイオードやトランジスタ等の
能動素子を構成要素に含む
電気回路



割れないシャボン玉

連続的に回転させることで
球体形状を維持し続ける
ものづくり教室人気作品



回転体制御用電子回路 + 割れないシャボン玉
→回るシャボン玉

70

10

- ・ものづくり活動における作品
 - ・マジックハンド
 - ・回るシャボン玉
- ・茨城県立北茨城特別支援学校における活動
- ・茨城県立常陸太田特別支援学校における活動
- ・まとめ

11

茨城県立北茨城特別支援学校における活動 10

活動内容(2日間実施)

- 1年生2年生対象
マジックハンド製作および遊び
3Dプリンター製キーホルダー色塗り
- 3年生4年生対象
マジックハンド製作および遊び
回るシャボン玉を使用した遊び
3Dプリンター製キーホルダー色塗り

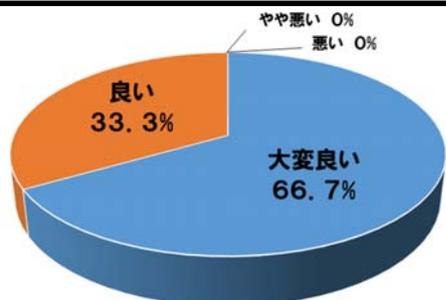
当日のスケジュール

- 10:00～10:10 はじめの会
10:10～11:10 マジックハンド製作
11:10～11:30 マジックハンドを使った遊び
11:30～11:40 おわりの会・写真撮影

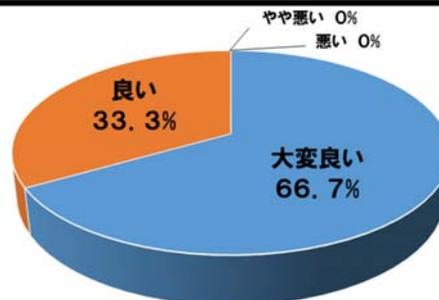


茨城県立北茨城特別支援学校における活動 11

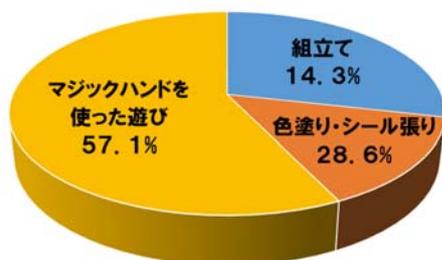
先生方を対象に作業内容，学生の対応についてアンケートを実施



Q1 作業の難易度について



Q2 作業時間について



Q3 どの作業を一番楽しんでいたら



Q4 学生の対応について

13

茨城県立北茨城特別支援学校における活動 12

先生方を対象に作業内容，学生の対応についてアンケートを実施

Q5 自由回答(一部抜粋)

どの子ども楽しそうに活動していた。子ども一人一人がどうしたら楽しめるかをかんがえてくれたことがよかった。

興味のある教材や好きなものを取り入れることを心掛けている。実態に応じて支援の量や方法を変えるように心掛けている。

カラーペンやシール，マスキングテープなどおおくの選択肢があり子どもたちが試行錯誤しながら製作することができた。

作ったもので遊べることで児童の意欲が高まったと思います。



- ・ものづくり活動における作品
 - ・マジックハンド
 - ・回るシャボン玉
- ・茨城県立北茨城特別支援学校における活動
- ・茨城県立常陸太田特別支援学校における活動
- ・まとめ

15

茨城県立常陸太田特別支援学校における活動14

活動内容

マジックハンド製作および遊び
回るシャボン玉を使用した遊び

当日のスケジュール

10:00～10:20 はじめの会
10:20～11:20 マジックハンド製作
11:20～11:30 小休憩
11:30～11:50 マジックハンドを使った遊び
回るシャボン玉を使用した遊び
11:50～12:05 作品紹介・おわりの会
12:10 写真撮影・解散



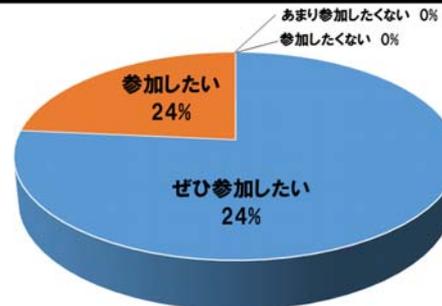
16

茨城県立常陸太田特別支援学校における活動15

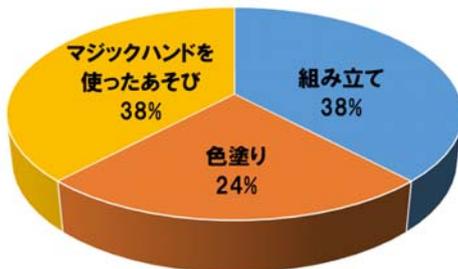
保護者を対象に作業内容、学生の対応についてアンケートを実施



Q1 作業の内容について



Q2 今後の活動に参加したいか



Q3 どの作業を一番楽しんでいたら



茨城県立常陸太田特別支援学校における活動16

保護者を対象に作業内容、学生の対応についてアンケートを実施

Q4 感想(一部抜粋)

小学校

1年生

- ・初めて親子で経験出来て良かった。楽しく過ごせた。
- ・作り方をやさしく教えてもらえてよかった。
- ・親や学校の先生以外の大人と触れ合う機会が得られてよかった。

2年生

- ・見本があると作成しやすかったと思う。
- ・自宅でも楽しめそうで良いテーマだと思う。

3年生

- ・おもちゃでなかなか遊ばなくなっていたのでとても良い機会だった。
- ・茨大生と話しながら作業を進めている所が見られてよかった。

6年生

- ・色々大変かと思いますが今後も活動を続けて欲しい。

茨城県立常陸太田特別支援学校における活動17

保護者を対象に作業内容，学生の対応についてアンケートを実施

Q4 感想(一部抜粋)

中学校

1年生

- ・組み立てのねじが少し小さく感じた.
- ・集中して作業していてよかった.

高校

2年生

- ・学生にとって参加目的が明確になっているか. 今回のような催しは学生側にとっては将来コミュニケーションの難しい海外での現場・現地作業に直面した際生きてくると思う.

3年生

- ・作り方を教えるときに声掛けなど工夫して優しく接していたのが良かった. 卒業なので最後の参加になるがいい思い出になった.



まとめ

18

児童にもものづくりの楽しさを伝えること，ものづくりの活動を通して，大学で学習した知識を実践し，使える知識に変換することを目的として今回活動を行い，アンケートの結果から以下の知見を得た.

- ・マジックハンドの製作において，学生が全て手を加えることなく，子どもたち自身が自分の考えのもと製作することができていた.
- ・様々な学年を対象に活動を行ったが，飽きさせることなく適切な難易度のものづくりの設定が出来た.
- ・子どもたちから高い満足度を得ることができた.



北茨城特別支援学校のみなさんからメッセージを頂きました。



学生地域参加プロジェクト

茨大・東北ボランティア*Fleur*

発表者	人文社会科学部	1年	川上	藍
	理学部	1年	名取	日菜
作成者	工学部	1年	那須	玄

1

目次

1. Fleurの始まり
2. 東日本大震災の概要
3. Fleurの道のり
4. 2019年度の活動報告

2

1. Fleurの始まり

3

2012年

東日本大震災からの復興に貢献したいという思いから、震災発生の翌年度にFleurが発足。

現在に至る。

4

2. 東日本大震災の概要

5

* 東日本大震災の概要 *

発生時刻：

2011年3月11日 14時46分

震源地：三陸沖 マグニチュード：9.0

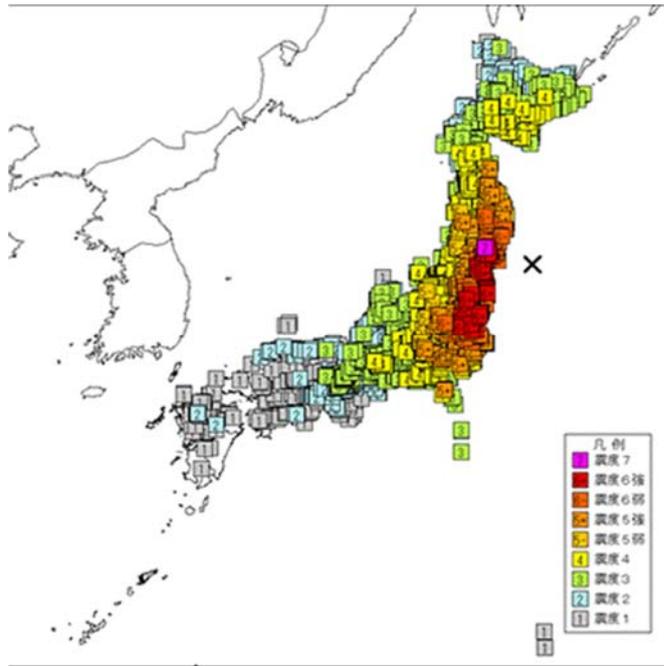
最大震度：7（宮城県栗原市）

余震について：

広範囲で観測、最大震度6強

6

震度分布図



日本全国で地震が観測されたことが分かる。

この地震による津波は、東北地方、関東地方の広い範囲で観測された。

* 東日本大震災における被害状況 *

(2019年3月1日現在)

人的被害
死者：19,689人
行方不明者：2,563人
負傷者：6,233人

住家被害
全壊：121,995棟
半壊：282,939棟
一部損壊：748,109棟

3. Fleurの道のり

9

2012年 Fleur設立。

当時のモットー

「震災の記憶の風化を防ぐ」

「被災地と茨大生をつなげる」

「無理のないボランティア」

「行って、見て、感じ、考える」

10

昨年度までの主な活動内容

- * ボランティアバスの運行
- * 3. 11スタディーツアー
- * 2015年度（9月）茨城県常総市でのボランティア活動
- * 2016年度（5月）熊本地震支援活動
（現地でのボランティア、視察、チャリティーコンサート、
募金活動）
- * 2017年度（7月）九州北部豪雨募金活動
- * 2018年度（7月）西日本豪雨募金活動

11

4. 2019年度活動報告

12

* 2019年度 Fleurのモットー *

「日常＋α」

- 目的
- ①継続的に現地を訪れ、自らの学びを深める。
 - ②より多くの人に防災を広める。
 - ③被災地と共に、未来につながる活動をする。

13

* 菜の花迷路

* 青いこいのぼりプロジェクトへの参加

* ボランティアバス

* 岩手・宮城視察

* 台風19号被害の募金活動、ボランティア

* ワークショップ（3回＋学プロ1回、計4回）

14

* 菜の花迷路 の運営 *

- ▶ 主催：福興浜団
- ▶ 期間：4月28日～5月6日
- ▶ 活動内容：4月28日、29日 運営に参加

15

* 青い鯉のぼりプロジェクトへの参加 *

青い鯉のぼり 「復興のシンボル」
→青い鯉のぼりが全国各地から宮城県東松島市へ送られる

期間：4月～5月下旬

活動：青い鯉のぼりの作成

(鱗に見立てた空の写真をSNSにて募集)



16

* ボランティアバス について *

▶年に数回、宮城県の大川小学校やその他被災地に、石塚観光さんのバスで行き、ボランティア活動を行う。

▶活動内容 除草、花を植える、etc...



17

* 岩手・宮城視察（夏合宿） *

毎年夏休み中に2泊3日で、震災で被害を受けたところを含む場所へ訪問
→「震災の記憶の風化を防ぐ」

訪問地の例

岩手県 陸前高田市 奇跡の一本松

岩手県 宮古市 メモリアルパーク中の浜

18



奇跡の一本松



↑ 岩手県
宮古市
復興ふれ
あいの森

19

↓ 宮城県
南三陸町



令和元年 台風19号

募金活動に

ご協力をお願いします

* 令和元年 台風19号
募金活動 *

* 台風19号について *

発生日時 2019年10月7日～10月13日

- ・ 東日本を中心に広い地域を襲った
- ・ 河川の氾濫が多く起こり、住宅に被害が出た

死者：86名 行方不明者：3名 負傷者：476名
(2019年12月12日現在)

住家全壊：3,247棟 住家半壊：27,926棟

21



* ワークショップ *

目的：実際に災害が発生し、そのボランティア活動に参加するときのために知識を身に着け、自分たちで積極的に行動できるようにするため。

6月 Fleurメンバーのみで2回

7月 宇都宮大学 UPさんとの交流会

12月 学生プロジェクト

23



12月15日 学生プロジェクト

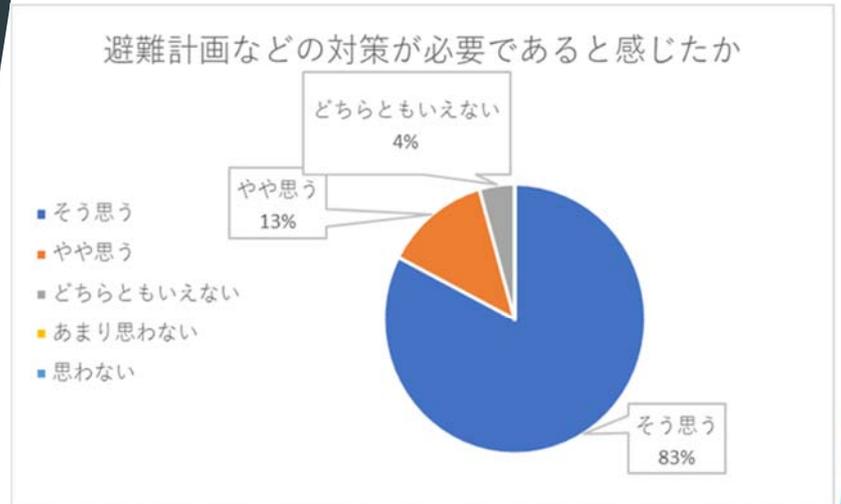
参加者 大学生20名（Fleurメンバー含）
一般の方5～6名 教職員1名

24

WS終了後に行ったアンケート結果

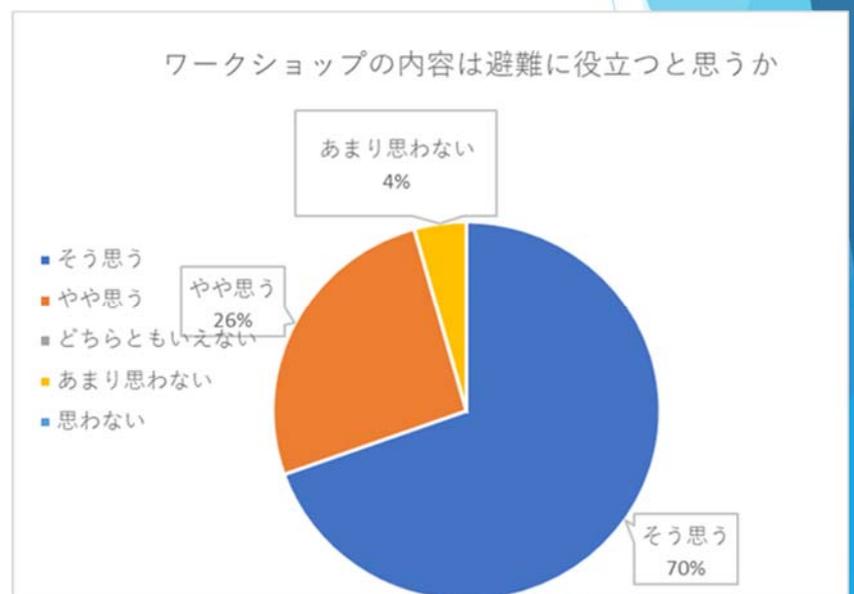
▶ 問1：逃げ地図作成を通して避難計画などの対策が必要だと思いますか。

▶ そう思う・やや思う・どちらともいえない・あまり思わない・思わない



問2：逃げ地図づくりは、災害からの避難に役立つと思いますか。

■ そう思う・やや思う・どちらともいえない・あまり思わない・思わない



* 参考文献 *

<https://fxhikakublog.com/higashinihon-daishinsai>

<https://www.nippon.com/ja/japan-data/311data1205/>

<https://www.fdma.go.jp/disaster/higashinihon/items/159.pdf>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/令和元年台風第19号#建造物被害>

<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2019/20191012/20191012.html>

2020年度も積極的に様々な活動をしていこうと思っています！！

ご清聴ありがとうございました。

福祉や健康をテーマにした 多世代参加型のまちづくり

参加メンバー

4年 石川 葵 伊藤 美織 稲葉 有咲 遠藤 杏菜 岡崎 壱成 田口 浩太
田村 太人 村上 卓也 和田 爽平
3年 大森 彩花 柏崎 愛 川崎 賢汰朗 木村 井泉 久保田 稚菜 戸井田 杏華
萩原 健太 若林 伶奈 和知 泰雅

1

目次

1. 目的
2. 一緒に活動した地域の人びと
3. 実践報告
4. まとめ

2

1. 目的

3

地域の様々な人たちと出会い一緒に活動することで、茨大生と地域とのつながりの基盤を作り、継続させていくこと

活動地域の選定：水戸市渡里地区

茨城大学周辺地域の住民と茨大生の交流の機会を増やすため、茨城大学の所在地である水戸市渡里地区で活動すること。

具体的な活動内容：福祉や健康をテーマにしたイベント

実態調査の実施、ボランティアへの参加、子ども向けワークショップの企画・運営、サロンの立ち上げ

多世代参加型のまちづくりとは：

渡里地区の高齢者や子供、医療・介護施設、高校生サポーター、大学生など、様々な世代が参加することで、活気のあるまちづくりを目指すこと。

2.一緒に活動した地域の人びと

5

一緒に活動した人々①

渡里住民の会

渡里住民の会とは、茨城大学周辺の渡里町・堀町・文京町・田野町の4つの地区の全住民約14000人の内、約3000人が参加する自治組織である。水戸市住みよいまちづくり推進協議会を構成する市内34の地区会の1つであり、渡里市民センター内に事務所を置いて活動している。渡里住民の会は、68の町内会の他、社会福祉協議会渡里支部、渡里女性会、高齢者クラブ、民生委員、児童委員、渡里小PTA、五中PTA、消防第12分団等々の関連団体で組織され、会長1名、副会長6名、役員34名で構成される役員会を中心に、様々な協働事業を展開している。



6

一緒に活動した人々②

医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ

2019年10月にストッカー渡里店跡地(水戸市堀町)に開設した医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザから地域コミュニティ創出の協力依頼を受け、一緒に活動することになった。フロイデは、「医療・介護・障がい・福祉を複合した多機能型施設」である。施設内のカフェやフィットネスクラブを地域住民の福祉や健康増進のため、さらには3階の一部を地域交流の場として開放する等、多世代地域交流の拠点となることを事業の1つに位置づけている。



一緒に活動した人々③

高校生サポーター

地域交流に関心のある地元高校生である、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校、茨城県立水戸第三高等学校のJRC部の皆さんに、サポーターとして一緒に活動してもらった。



社会福祉法人くれよん

社会福祉法人くれよん(以下、くれよんとする)と、毎年茨苑祭で共同出店しており、障害のある人が作ったお菓子や雑貨を販売している。くれよんは「障害が有っても無くとも共に楽しく生きる」という理念のもと、障害のある人達だけの働く場ではなく、障害のある人も無い人も共に力を合わせて働く場として運営している。



3.実践報告

9

① 地域住民を対象とした実態調査

9月14日、渡里小学校体育館にて開催された渡里地区敬老会で、112名の高齢者を対象に「運動習慣」「外出・近所の付き合い」「茨城大学・茨大生の印象」など6項目25個の質問の実態調査を実施。



聞き取り調査を行うことで、質問への回答だけでなく、地元のことや回答者自身の暮らし・経験なども聞くことができた。

② 渡里地区内の被災住宅での災害ボランティア活動

10月24日、台風19号の被害に遭われた住宅の復旧作業に参加。災害ボランティアには、「渡里住民の会」の方々約20名、茨大生（3年生4人、1年生2人）と教員1人が参加した。作業内容は、浸水家屋の泥だし・片付け・清掃・引越し準備であった。

台風19号直撃翌日の水戸北スマートIC付近の様子



ボランティアの様子



水を含んだ畳を運ぶ様子。このように、災害ボランティアには重いものを運ぶ作業が多く、重労働であったため、若い人の力が必要だと強く感じた。



引越しのための仕分けと梱包作業の様子。整頓された食器や押し入れに積まれた衣類を見ていると、つい少し前までこの家で人が暮らしていたということが分かり、それを一瞬にして壊していった台風の恐ろしさを改めて感じた。

③ フロイデ内覧会でのポスター発表

10月26、27、28日に行われたフロイデ内覧会で、本プロジェクトの活動についてポスターを使って紹介した。



13

④ 茨苑祭でのくれよん工房との共同出店・ポスター展示

11月16、17日に行われた茨苑祭で本プロジェクトの活動について、ポスターを使って紹介。

「老後心配なこと」と「健康で気を付けていること」についてふせんアンケートを実施し、約90人が回答。

社会福祉法人くれよん工房との共同出店で591人が来場した。

14

ポスター、アンケートの展示の様子



ふせんアンケートの結果について、「健康で気を付けていること」の質問では、「食事に気を付けている」と答えた方が最も多く、「老後心配なこと」の質問では、「お金が心配」と答えた方が最も多いという結果になった。

15

⑤ ふれあい渡里まつりへの参加

12月8日に、渡里小学校で行われたふれあい渡里まつりで、子ども向けワークショップを実施し、約120組の親子が来場した。ワークショップでは、三種類のクリスマスツリー（まつぼっくりツリー、紙コップツリー、壁掛けツリー）を作成した。



ワークショップに来てくださった親子に、親向け、子ども向けアンケートの実施。

本プロジェクトの活動についてポスターを使って紹介



「渡里地区の自慢できるところ」と「茨大生と一緒に勉強したいこと」についてふせんアンケートの実施。

高校生サポーターとして、水戸桜ノ牧高等学校JRC部から3名、水戸第三高等学校JRC部から2名が参加し、ワークショップの運営に協力。

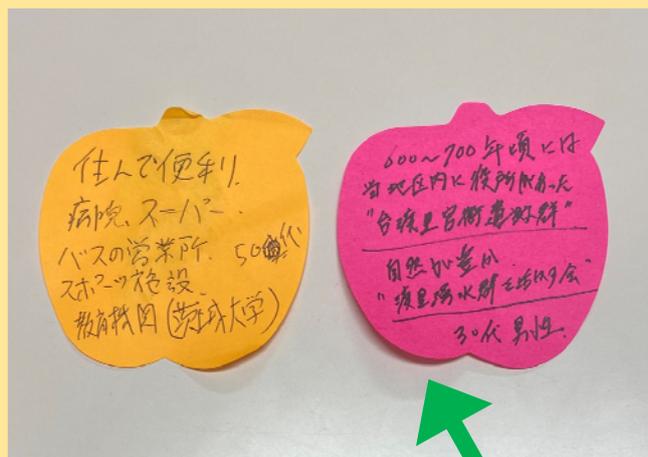
子ども向けワークショップの様子



参加者アンケートには、「またお兄さんお姉さんと一緒に何か作りたい」（未就学児）や「子どもと交流してほしい」（保護者）、「子どもに勉強を教えてほしい」（保護者）との感想が寄せられた。これらの感想を次年度の活動に活かしていきたい。

17

ふせんアンケート記入の様子



ふせんアンケートには34人の方に協力していただいた。その中には、水戸市長高橋靖様、水戸市議会議員小泉康二様のものもあった。高橋市長、小泉議員、ご協力ありがとうございました。

18

子ども向けワークショップの開催に協力していただいた方々



高校生サポーター向けに実施したアンケートでは、「地域のイベントに興味を持ちましたか」という質問に、参加者全員から「興味をもった」と回答があった。また、今回のイベントに参加して「いろいろな人と交流できたことがよかった」という感想もいただいた。

19

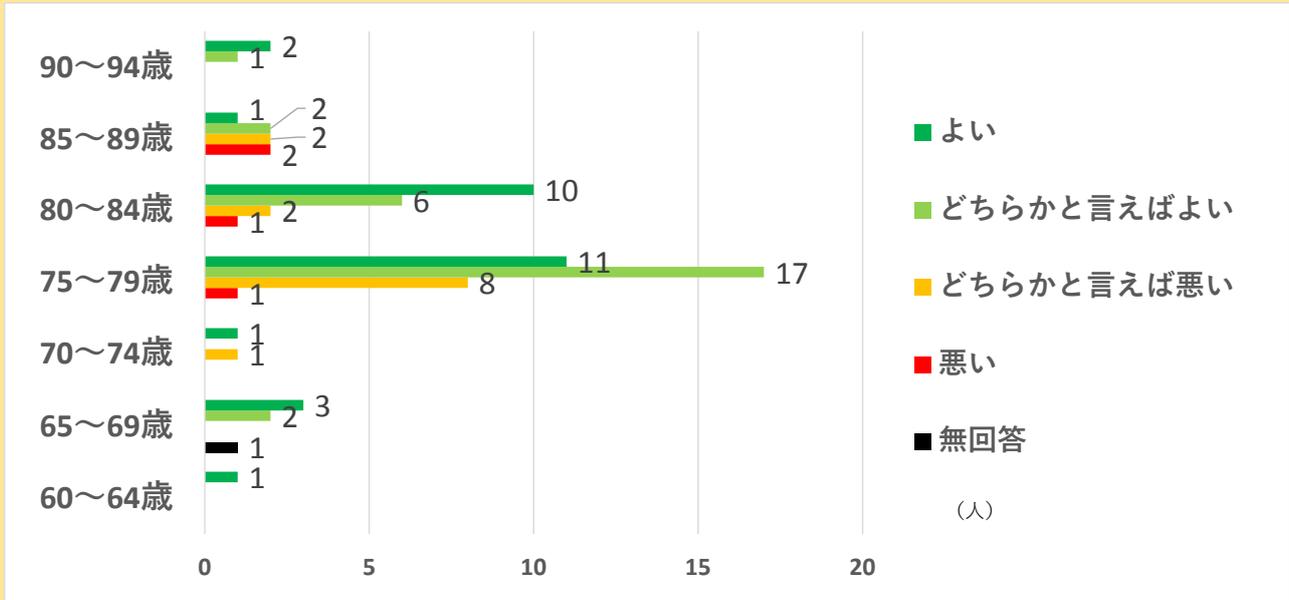
⑥ 「地域住民を対象とした実態調査」報告会

1月24日に、渡里市民センターで行われた渡里役員会（約30人）にて、敬老会・子ども向けワークショップで行った実態調査の結果を報告。



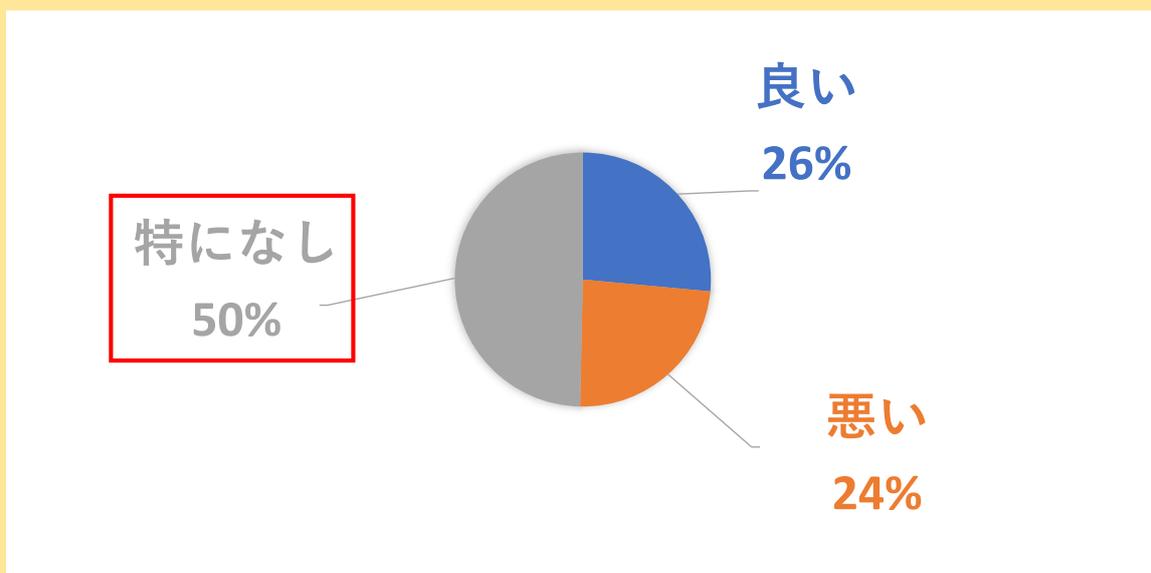
20

調査結果（一部抜粋） 運動習慣と健康状態の相関



調査結果の分析から、運動習慣と健康状態の相関について明らかにすることが出来た。「運動習慣の有無」についての問いに、「はい」と回答した人の、「現在の健康状態」についての問いに対する回答を調べた。その結果、「よい」と「どちらかといえばよい」の回答を合わせると、運動習慣のある人の約80%が良い健康状態であった。ただし、運動習慣はあるが、健康状態が悪いと回答した人各年代に若干名いた。

調査結果（一部抜粋） 茨大生のイメージ



地域住民の茨大生に対するイメージを調査した。その結果、半数の人が茨大生の印象は「特になし」と回答した。良いイメージには「**礼儀正しい**」や「**まじめ**」という回答があり、悪いイメージには「**自転車の乗り方が悪い**」や「**地域との交流が少ない**」という回答があった。

⑦ 「ハロー！ぱるるん館」でのラジオ出演

1月28日にFMぱるるんで本プロジェクト、渡里住民の会との交流について紹介。



23

⑧ 「すまいる広がるまちづくりサロン」開催

2月8日に多世代交流のイベントとしてサロンをフロイデ水戸メディカルプラザで実施。

子ども16人、茨大生6人、高齢者13人でボッチャを実施。



24

参加者の声

問6 今回のイベントに参加した感想を教えてください。

(さいしょあいきたくはかったけどきてみたら思
ったし)じょうずのしかったです

小学校低学年 (男児)

問7 今回のイベントに参加した感想を、教えてください。

(とてもおもしろくて又おねがひします
子供たちとむと遊んでいたと思います)

70代 (男性)

参加者アンケートから、多くの人から「楽しかった」や「面白かった」という回答を得た。今回のサロンは好評だったので、継続していきたい。

25

4.まとめ

4.まとめ

「渡里住民の会」のみなさんと、災害ボランティア、ふれあい渡里まつりやサロンなどの活動を協力して行うことで、つながりができ、一定の関係を築くことができた。会長をはじめ地域の皆さんから、「茨城大学は、我々の地域の資源だと思っている」と何度も言っていた。この言葉から、地域からの期待を感じた。

「地域住民を対象とした実態調査」により、住民の福祉や健康などに関する生活実態を明らかにすることができた。

子ども向けワークショップや、サロンのイベントの開催を通じて、渡里地区地域住民の交流の場を設けることができた。

27

今後の展望

「渡里住民の会」からは今年度のみならず、継続的な活動を望まれたので、次年度以降も協力して活動していく。

実態調査により、地域住民の興味関心のあるテーマを明らかにすることが出来たので、次年度以降の活動に反映させるとともに、この実態調査を継続して行っていく。

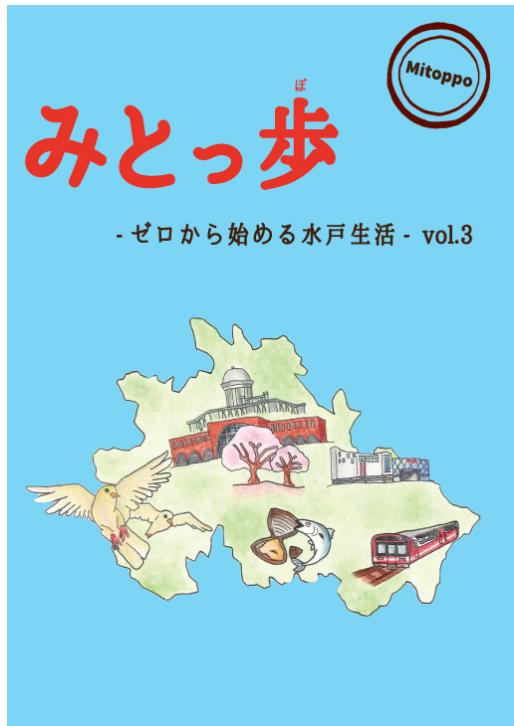
また、地域住民が抱く茨大生のイメージを向上させるために、私たち茨大生は、地域住民から見られているということを意識する必要があると考えた。

イベント参加者に対して行ったアンケートの感想で、イベントに対する要望を知ることができたので、次年度以降のイベント開催に反映していく。

28

代表：阪井 一仁（教育学部3年）
主な活動地域：水戸

「大学生と地域を結ぶ橋渡し」となるべく、新たに水戸に来た大学生にオススメしたい水戸の魅力を発信するフリーペーパーを作成しています。



活動内容

現在までは、主に「取材」「取材をもとにした記事執筆」を行ってきました。

今回の「みとっ歩」では、12箇所ほどを「新入生にオススメしたい場所」というテーマを意識して取材しました。

「みとっ歩」について

「みとっ歩 - ゼロから始める水戸生活 -」企画は、一昨年水戸市市長公室みとの魅力発信課の皆さまから、お声がけいただいたことがきっかけで、スタートしました。

vol.2からは学プロ採択企画として2500部発行しました。

今号(vol.3)は3月に5000部発行。「学生目線」を基本としたフリーペーパーとなるよう心がけました。また、前号と比較しサイズを半分とするなど、「持ち運びやすさ」も工夫しました。活動のすべてをこめましたので、ご一読いただければ幸いです。

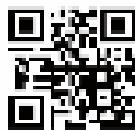
vol.1(電子版)



ブログ



Twitter



Instagram



制作風景

企画会議の様子
主に6~9月にかけて、企画の方向を決定しました。



↓取材を、記事に。↓



代表：清水喬宏（工学部機械工学科 4年）
 主な活動地域：日立市，常陸太田市，北茨城市

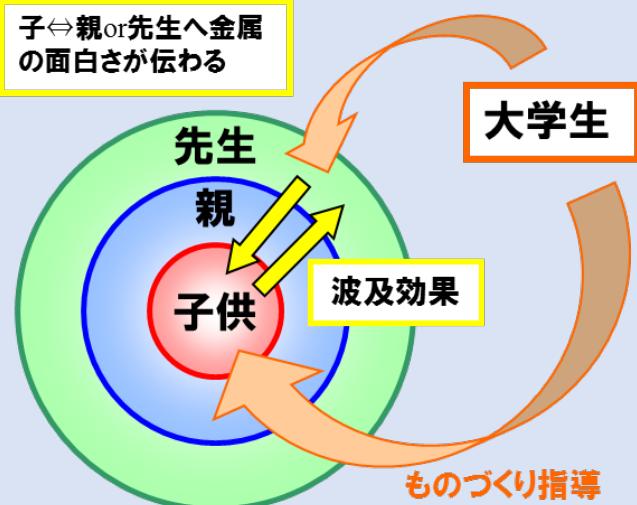
活動理念

最近の子供たちは、ゲームやテレビなどのバーチャルな体験が多く、実際に自分の手で体験できる事が少なくなってきました。それが小学生の理数離れの原因の一つとして考えています。

そこでものづくりでのリアルな体験を通じて、理科や数学・身近な工学などについて楽しく学んでもらう場を提供することを目的とし、金属の面白さを体験出来る教室を開催しています。

本教室は、小学生に限らず、中学生や高校生、保護者、小中学校の先生にも楽しんでもらえるような幅広い活動を行っています。

これらの活動を通じて、多方面から金属およびものづくりに興味を持ってもらえるような教室を目指しています。



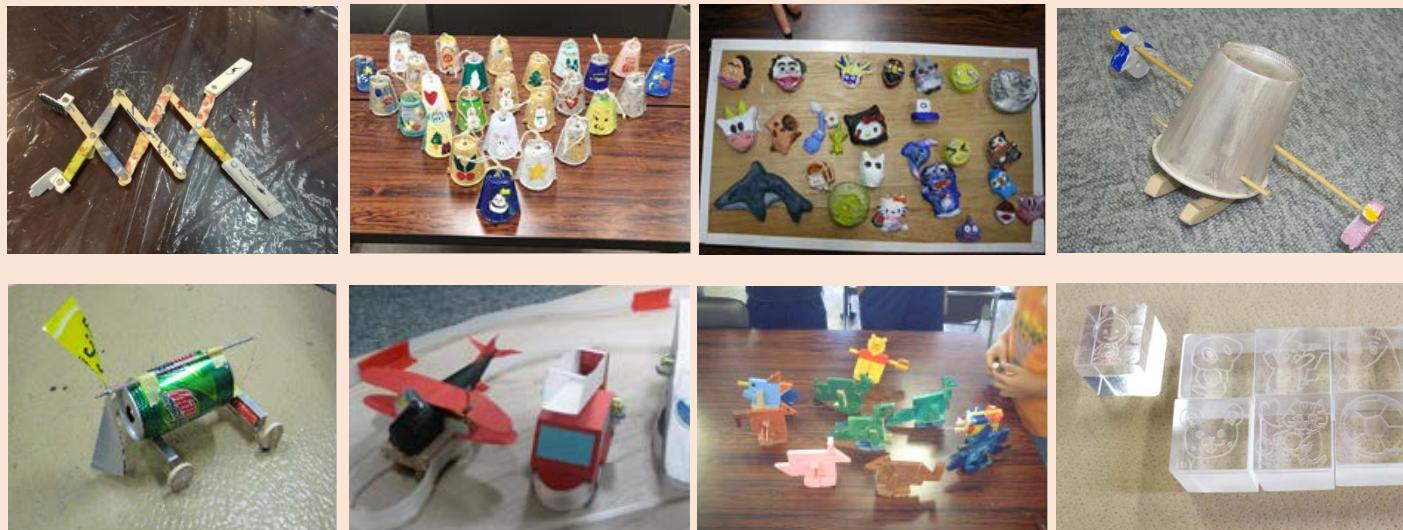
活動対象と内容

活動の様子

小学校 低学年生	身近にあるものを使い、工夫してものづくりを行うことでその面白さを体験でき、みんなで競い合って楽しく遊べるもの
小学校 高学年生	道具・工具を使ってものづくりを行い、その基本的原理を理解することで自然法則が学べるもの
中学校生	身近にある工業製品・生活用品の作動原理や製造技術について、ものづくりや調査研究を通して理解できるもの
高校生	新製品の開発に結び付くようなアイデアを実現する実践的研究開発を体験できるもの
保護者・ 小中学校 の先生	小中学生のものづくり課題と同じものを体験して、改善点・展開方法などアドバイスをいただく

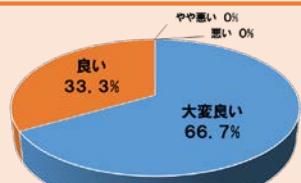


作品例

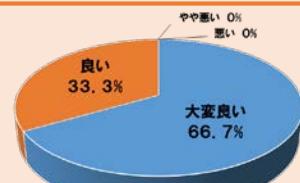


アンケート結果

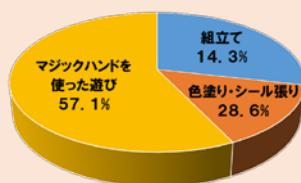
活動後、実施内容および学生の対応についてアンケート調査を実施した。（茨城県立北茨城特別支援学校）
 活動内容：マジックハンド製作，マジックハンドを使った遊び，3Dプリンタ製作キーホルダーの色塗り



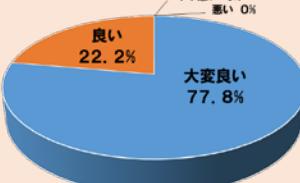
Q1 作業の難易度について



Q2 作業時間について



Q3 どの作業を一番楽しんでたか



Q4 学生の対応について

Q5 自由回答（一部抜粋）

どの子も楽しそうに活動していた。子ども一人一人がどうしたら楽しめるかをかんがえてくれたことがよかった。興味のある教材や好きなものを取り入れることを心掛けている。実態に応じて支援の量や方法を変えるように心掛けている。カラーペンやシール、マスキングテープなどおおくの選択肢があり子どもたちが試行錯誤しながら製作することができた。作ったもので遊ぶことで児童の意欲が高まったと思います。生徒一人一人のペースに合わせて作業していただき、ありがとうございました。とても楽しそうに作業していました。学生さんたちのおだやかで優しい対応、用意していただいた活動がすばらしく、いつもの授業よりずっと集中して取り組んでいたと思います。自由にやらせていただいたので、こどもたちはすごく集中して楽しそうにとりくむことができました。

茨城県立北茨城特別支援学校先生の皆様、アンケートご協力ありがとうございました。

代表：中橋彩乃（人文社会科学部 3年）
 主な活動地域：水戸市、宮城県、福島県

茨大東北ボランティア *Fleur* とは…

東日本大震災をきっかけに発足した団体。
 無理なくボランティアに行き続けることをモットーに、私たちにできることを
 続け、未来へつなぐ茨城大学ボランティアプロジェクトです。

2019年度の主な活動 (※活動の一部です)

【茨大生 × 地域防災プロジェクト】

私たちが学んだことを、より多くの人に知ってほしいという思いから、学外の人に向けた企画を実施しました。ワークショップでは「逃げ地図」を作成。災害が起きたときに、自分たちがどこに避難するべきか、実際の地図を使って確認しました。



【なの花迷路】

福島県南相馬市で開催されているなの花迷路の運営のお手伝いをしてきました。



【青い鯉のぼりプロジェクト】

宮城県東松島市で行われている青い鯉のぼりプロジェクト。Fleurでは、メッセージを載せた鯉のぼりを送りました。



【ワークショップ】

災害や防災について、Fleurのメンバーが理解を深めるため、ワークショップを行いました。クロスロードやHUG（避難所運営ゲーム）などを通じた、学びの機会を設けました。



□□□ 萩原健太（人文社会科学部 3年）

メンバー：3年（大森彩花、柏崎愛、川崎賢汰朗、木村井泉、久保田稚菜、戸井田杏華、若林伶奈、和知泰雅）、4年9人、高校生サポーター（水戸第三高等学校JRC部、水戸桜ノ牧高等学校JRC部）

主な活動地域：水戸市渡里地区、渡里小学校、渡里市民センター、医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ



【「福祉や健康をテーマにした多世代参加型のまちづくり」の目的】

- ・地域の様々な人たちと出会い一緒に活動することで、茨大生と地域とのつながりの基盤を作り、継続させる。
- ・茨城大学周辺地域の住民と茨大生の交流の機会を増やすため、茨城大学の所在地である水戸市渡里地区で活動をする。
- ・福祉や健康をテーマにしたイベントを企画・運営する。
- ・渡里地区の高齢者や子供、医療・介護施設、高校生サポーター、大学生など、様々な世代が参加することで、活気のあるまちづくりを目指す。

【一緒に活動した地域の人びと】

1. 渡里住民の会

「渡里住民の会」とは、茨城大学周辺の渡里町・堀町・文京町・田野町の4つの地区の全住民約14000人の内、約3000人が参加する自治組織です。水戸市住みよいまちづくり推進協議会を構成する市内34の地区会の1つであり、渡里市民センター内に事務所を置いて活動しています。渡里住民の会は、68の町内会の他、社会福祉協議会渡里支部、渡里女性会、高齢者クラブ、民生委員、児童委員、渡里小PTA、五中PTA、消防第12分団等々の関連団体で組織され、会長1名、副会長6名、役員34名で構成される役員会を中心に、様々な協働事業を展開しています。

2. 医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ

2019年10月にストッカー渡里店跡地（水戸市堀町）に開設した医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ（以下、フロイデ）から、地域コミュニティ創出の協力依頼を受け、一緒に活動することになりました。フロイデは、「医療・介護・障がい・福祉を複合した多機能型施設」です。施設内のカフェやフィットネスクラブを地域住民の福祉や健康増進のため、さらには3階の一部を地域交流の場として開放する等、多世代地域交流の拠点となることを事業の1つに位置づけています。

3. 高校生サポーター

地域交流に関心のある地元高校生である、茨城県立水戸桜ノ牧高等学校、茨城県立水戸第三高等学校のJRC部の皆さんに、サポーターとして一緒に活動してもらいました。

4. 社会福祉法人くれよん

社会福祉法人くれよん（以下、くれよんとする）と、毎年茨苑祭で共同出店しており、障害のある人が作ったお菓子や雑貨を販売しています。くれよんは「障害があっても無くとも共に楽しく生きる」という理念のもと、「障害のある人達だけの働く場ではなく、障害のある人も無い人も共に力を合わせて働く場として運営しています。」

【実践報告】

1. 地域住民を対象とした実態調査(9月14日、渡里小学校体育館)

「渡里住民の会」の協力のもと、敬老会の参加者112人に「運動習慣」「医療・健康」「防災」などに関する聞き取り調査を実施

2. 渡里地区内の被災住宅での災害ボランティア活動(10月24日、渡里地区内)

「渡里住民の会」の人たちと茨大生(1年2人、3年4人)、教員1人による浸水家屋の泥だし・片付け・清掃・引越し準備

3. フロイデ内覧会でのポスター発表(10月26日・27日・28日、フロイデ)

ポスター展示をして、来場者に本プロジェクト活動を紹介

4. 茨苑祭でのくれよん工房との共同出店・ポスター展示(11月16日・17日、茨城大学)

「くれよん工房」の物販のサポート、活動紹介のポスター展示

5. ふれあい渡里まつりへの参加(12月8日、渡里小学校)

高校生サポーター(5人)と共同で、子ども向けワークショップを開催、保護者向け・子ども向けアンケートを実施

6. 地域住民を対象とした実態調査報告会(1月24日、渡里市民センター)

「渡里住民の会」の役員会で、調査・アンケートの結果報告

7. 「ハロー！ばるるん館」でのラジオ出演(1月28日、FMばるるん)

プロジェクト活動や「渡里住民の会」との交流秘話などを紹介

8. 「すまいる広がるまちづくりサロン」の開催(2月8日、フロイデ)

渡里地区の高齢者(13人)・子ども(16人)・茨大生(6人)で混合チームを作り、ポッチャを楽しんだ



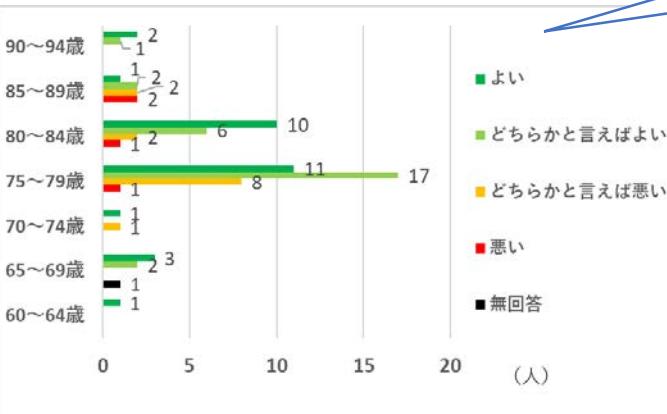
【参加者の声】

ワークショップ参加者の感想
「楽しかった」「次回もぜひやってほしい」（子どもアンケートより）
「子ども達とのふれあい、大学生との交流ができて良かった」（高校生サポーター）
「大学生になってもボランティア活動を続けたい」（高校生サポーター）
サロン参加者の感想
「とてもおもしろくて又おねがいします」（70代 男性）
「さいしょわいきたくなかったけどきてみたら思ったいじょうたのしかったです」（小学校低学年男児）



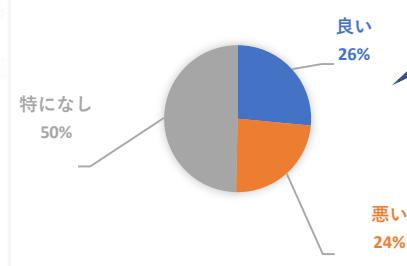
【地域住民を対象とした実態調査結果（一部抜粋）】

運動している人の健康状態と年齢



調査結果の分析から、運動習慣と健康状態の相関について明らかにした。運動習慣のある人について現在の健康状態を調べたところ、約80%が良い健康状態であった。

茨大生のイメージ



茨大生のイメージを尋ねたところ、半数の人が「特になし」と回答した。良いイメージには「礼儀正しい」や「まじめ」があり、悪いイメージには「自転車の乗り方が悪い」や「地域との交流が少ない」があった。

代表： 齋藤広明

主な活動地域： 行方市(ふれあい祭り)

メンバー紹介 齋藤広明(機械工学科)、石寄直樹(機械工学科)、黒澤拓真(機械工学科)

【活動目的】 近年、茨城県では魅力度ランキング最下位を独占してきました。しかし、茨城各所には観光地が多数点在しており、実際のところ魅力が無いわけではありません。問題点は各観光地が離れていることなどが問題に上げられます。そういった問題をテクノロジーを用いて解決し、観光業から茨城県を活性化することを目的としています。

【今回の活動アイデア】

今回は使用率の高いLINEを使用してスタンプラリーを行いました。

LINEを利用することのメリット

- ・導入コストが低い
- ・LINEを通じて情報を発信できる
- ・LINEBotを追加してくれた相手の基本情報を把握できる(任意)

【活動内容】

今回は行方市で毎年行われているふれあい祭りで導入。約300人の方々に参加していただきました。今回はスタンプを10個集めると行方市のアメニティと交換、抽選で行方市産のお米を景品としました。

画像2はお祭りでのブースの様子です。

画像3は今回参加していただいた方々の内訳です。



画像1



画像2



画像3

茨城大学農学部 のらボーイ&のらガール食農教育プロジェクト

6

代表: 農学部地域総合農学科3年 武田 迅
主な活動地域: 阿見町

茨城大学農学部のらボーイ&のらガール食農教育プロジェクトとは

阿見町を中心に、そばの種まき、そばの収穫、そば打ちイベントを地域の方々に行っています。これらの活動や農作業を通し、食農について考えることを目標に活動を行っています。

今年度の活動内容

阿見町の地域の方々のご協力のもと、耕作放棄地となっていた土地を畑として使用し、農作物を育てました。また、畑の土地や公民館を利用し、8月にそばの種まき、11月にそばの収穫、12月にそば打ちのイベントを行いました。イベントでは食農教育に関する授業を行ったり、そばの収穫の際、唐箕や脱穀機を使用したり、実際に初めからそばを打つことを行いました。これらの活動を通し、地域活性化と食農教育について理解を深めることが出来ました。



今年度の成果、来年度に向けて

今年度は、「子供たちに食農教育に興味を持ってもらうこと」、「子供たちに楽しんでもらえるようなイベントを行うこと」、「イベントの規模を拡大すること」を目標とし取り組みました。その結果、約40名の方々に参加していただいた子供たち、保護者の方々ともに満足していただきました。

来年度も、子供たちに楽しんでもらうことを第一とし、今年度のイベントの反省を活かして今年度よりも充実したイベントにしていくことを目指し、新しいことを模索しながら活動を行っていこうと考えています。

連絡先

Gmail: norbanorag2014@gmail.com

代表: 武田 迅

まとめと今後の展望

これまで数年にわたり、活動を行ってきましたが、未だ数多く地域の課題があると考えています。課題を解決するためにはどのように計画を立て、どのような手段を用いるか、またどのような形で表していくかということについて考え、よりよい活動を行っていければと思います。そして、これらを意識し、そばの種まきイベント、そばの収穫イベント、そば打ちイベントを行うことにより、地域の方々に食農についてより深く学んで頂ける機会となれば幸いです。

代表：伊藤 友紀 (農学部 3年)

主な活動地域：阿見町の7小学校

(君原小、阿見小、あさひ小、阿見第二小、阿見第一小、本郷小、舟島小)

活動内容

私たちは茨城大学農学部の食育サークルです。町内の小学校での食育活動を支援し、広報の発行で食に関する知識をわかりやすく発信しています。

活動内容

①授業のサポート・その他

- 授業中の机間でのサポート
- 丸つけや質問を受け付ける
- 集会や運動会に招待していただき、参加する

②農業の授業、畑作業

- サツマイモの定植等の授業を行う
- 実際に畑で説明し、一緒に収穫等作業する
- 農学部についての授業を行う

③もぐもぐ通信

- 毎月食に関する広報誌を作成
- 各小学校に配布する

①サポートを通して、子供たちに「農学部ってこんなに楽しそう、茨城大学ってどんなところだろう」という興味や地元への関心を持ってもらうことで阿見町の活性化に貢献します。

②食育の授業や畑作業を一緒に行い、食や農業について楽しみながら知ってもらえるように励んでいます。

③食育通信を毎月発行し、食育事業を一時的な体験活動で終わらせず、継続的に興味を持ってもらえるような情報発信をしています。

もぐもぐ通信



毎月担当を決めて書いてます!

食育への思い

私たちの活動は小学校の中に入って活動を定期的に行っており、地元や農業についての楽しさや大切さを知るきっかけをつくることができます。農村の高齢化、過疎化が進む中で、一人でも多くの小学生に阿見町や農業の魅力を感じてもらいたいという思いで活動しています。

小学生は地元の宝であり、FESの活動が将来の地元の活性に繋がるということで、農協の方々、先生方も熱意をもって協力、支援をしてくださっています！今年度は特に各小学校とコミュニケーションを取り、自主的に活動できることが増えました。



代表：黒畑晴喜（教育学部 3年）
 主な活動地域：大子町 初原ぼっちの学校

さまーすくーるは大子町の廃校である『初原ぼっちの学校』を利用させていただいています。主に水戸市内・大子町内の小学校3年生から中学3年生を対象とし、2泊3日のキャンプを行います。今年度開催した「さまーすくーるin大子」では51人の子どもたちが参加をしてくれました。

3日間のタイムスケジュール

<1日目>	<2日目>	<3日目>
オープニング	朝のつどい	朝のつどい
昼食	朝食	朝食
午後企画	オリエンテーリング	そうじ
夕食	昼食	昼食
入浴	午後企画	エンディング
夜企画	夕食	
就寝	入浴	
	キャンドルファイヤー	
	就寝	

主な活動例① 「食事」

3日間を通して子どもたちと一緒に食事を作りました。食材を切ったり、野外炊飯は子どもたちにとって貴重な経験になります。



主な活動例②

「キャンドルファイヤー」

天気の都合上、例年の屋外キャンプファイヤーではなく、室内でろうそくを灯して歌を歌ったり、ゲームをして楽しみました。



来年度に向けて

- ・環境の整備、保健衛生の管理を1年を通して準備。
- ・子どもふれあい隊としてボランティアに多く参加し、名前や活動を知ってもらう。



連携先

大子町役場まちづくり課

代表：河井孝太（人文社会科学部 2年）
 主な活動地域：常陸大宮市

本プロジェクトについて…

常陸大宮市で開催される「西塩子の回り舞台」を盛り上げ、成功させるために活動しました。保存会の方々と協力し、4月から本公演まで舞台の組み立てや広報を行い、本公演では運営や裏方に携わりました。見学者・来場者アンケートやリーフレットも作成しました。

「西塩子の回り舞台」とは？

茨城県常陸大宮市の西塩子地区で、3年に1度開催される日本最古の組立式農村歌舞伎舞台です！材料の切り出しから組み立て、公演に至るまで、地元の保存会とボランティアの方々によって運営されています。

主な活動1. 組み立てのお手伝い

8月下旬から、舞台の組み立てのお手伝いをしました。

- ・大柱、鳥居組み立て
- ・花道、棧敷席組み上げ
- ・床下目隠し
- ・竹の切り出し
- ・竹加工（椅子・のぼり）等



保存会の方々や、市内外からお手伝いに来ていた多くの人々に教えていただきながら、力を合わせて組み立てることができました。



主な活動3. アンケート分析・リーフレット作成

来場者アンケートのデータをもとに、何で知ったのか、どこから来ていたかなどを分析しました。それらの結果を報告書にまとめ、保存会にお渡ししました。

また、3年後の開催に繋げるためにリーフレットを作成しました。市内在住の方にはより詳しく、水戸市の人々にはまず存在を知ってもらうことを目指しました。



主な活動2. 本公演のお手伝い

10月20日に本公演が開催されました。当日は、

- ・茨大テント
作成したアンケート配布・回収
公式グッズの販売
台風19号の災害募金 等
- ・本部脇テント
プログラムと抽選券の配布
抽選の商品引き換え 等
- ・舞台裏方のお手伝い



の3つに分かれて活動しました。

会場には地元店の出店が立ち並び、多くの観客で賑わいました。私たちも運営側としてお手伝いしながら、舞台や地元の名物を楽しみました。幕間には、代表数名が舞台にあがり、インタビューを受けました。

3年に1度の回り舞台に大学在学中に携わることができ、貴重な経験となりました。



3年後に向けて…

2022年10月
第8回定期公演(仮)

ぜひ一緒にお手伝い
しましょう！

代表： 鈴木 大河 (理学部 4年)
主な活動地域：水戸市, ひたちなか市

プロジェクト概要

プロジェクト設立

2007年5月

設立目的

茨城県内における「地質」による地域振興の実現

メンバー構成

4年生: 2名 3年生: 5名
2年生: 3名 1年生: 3名 計13名

主な連携先

茨城県北ジオパーク構想

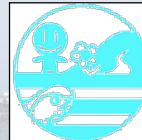


今年度の活動実績

- 4月: 新入生ガイダンス
大学入門ゼミ
ひたちなかフラダンスフェスティバル
- 5月: 帆引き船フェスタ
かわプラザ
瓜連丘陵ハイキング
- 7月: オープンキャンパス
- 8月: 東海村エンジョイサマースクール
日本第四紀学会 公開シンポジウム
- 9月: 地球のかけら「石」を見てみよう!
@道の駅 常陸大宮~かわプラザ~

通年: ジオサイトマップの改訂
及びその効果についてのアンケートの実施

- 12月: 日本理科教育学会
- 2月: IP養成講座
- 3月: 偕楽園ジオツアー (3/1実施)



山も川も植物も、
そして人間も、
みんな地質の上に立っている。



大学内の活動も含め、
水戸市, ひたちなか市
を中心に活動していま
した!

主な活動内容

① ジオサイトマップの改訂



常陸太田 平磯海岸 水戸・千波湖
の3編を改編
→実際に手に取ってもらい、
改訂についてのアンケートを実施

全15編の改訂
に向けて今後も
新たに制作予定
です!



② 各種イベントの補助

ブースにてアンモナイトのレプリカ作り
(フラダンスフェスティバル)



キッチン火山学の実演
(東海村
エンジョイサマースクール)



③ イベントや学会での ジオパークやプロジェクトの広報活動

5月 帆引き船フェスタ@かすみがうら市 7月 オープンキャンパス



8月 公開シンポジウム@銚子市

プロジェクトの活動内容や
ジオパーク構想についてポスター
形式で公開



今後の活動につ
いて外部の方と議論
をする貴重な機会
となっています!

④ 茨城県内の小学生に向けた 地球科学に特化した教材作成

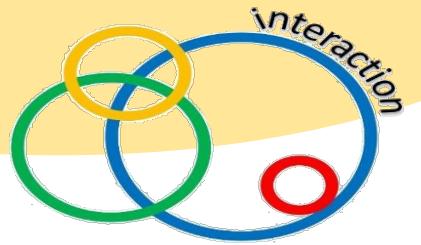


プロジェクト制作教材
「茨城でみる地球科学」(仮)

代表：須郷 まどか（人文社会科学部 3年）
主な活動地域：大洗町

～大洗町における多文化共生～

まなびの輪



まなびの輪では、大洗小学校・大洗第一中学校・大洗町役場・地域ボランティアと連携をしながら、多文化共生に向けた多様な活動を行っています。

文化・言語を超えた人と人とのつながりに出会える場所です。

メンバー：須郷まどか・小林愛鈴・斉藤朱里・田村捺芽・中川珠希・滑川みずき・森亜由美 3年生7名+4年生9名 他

取り出し授業のサポート

取り出し授業に「日本語サポーター」として参加しました。先生方のご指導のもと外国にルーツを持つ児童・生徒が安心して学校生活を送れるように、学習支援を行いました。



日本語教室

☆第2・4水曜日 18:30～20:00
大洗町役場で、地域ボランティアの方々とともに、大洗町で暮らす外国人の方々の日本語学習をサポートしました。



八朔祭・盆踊り

大洗町の八朔祭と盆踊りに参加しました。世界の料理の販売やフェイスペイントのお手伝いなどを通して、国際交流を楽しみました。



スピーチコンテスト

各自治体のご協力のもと、外国にルーツを持つ児童・生徒による日本語スピーチコンテストを開催しました。子供たちが語る思いや夢は多くの人の心に響きました。



Facebook : <https://p.facebook.com/manabinowa/>
「もっと詳しく知りたい」という方はFacebookのDMなどでお気軽にご連絡ください。
詳しくは「まなびの輪」で検索！！



茨城五浦遊学ルートマップ作成プロジェクト

代表：三上りか（人文社会科学部 3年）
主な活動地域：水戸市及び北茨城市

メンバー：4年1人、3年1人、2年1人、1年2人の計5名

主な活動内容：茨城大学と明治東京恋伽のコラボ企画においてのメインイベントとなる五浦を巡るルートマップ作成と、北茨城全体の観光マップ作成の2つです。五浦にゆかりのある岡倉天心・横山大観・菱田春草が登場する明治東京恋伽とコラボすることで彼らについてより深く知ってもらうことと、北茨城のさらなる活性化を目的にプロジェクトが立ち上げられました。



左：茨城大学×明治東京恋伽コラボイベントのため作成した遊学ルートマップ
右：北茨城観光マップ

心がけた点：遊学ルートマップは企業と連携した企画と言うことで、キャラクターによる五浦の紹介を取り入れ、なおかつウォークラリー地点の説明文をいかに簡潔にわかりやすくできるか考えました。北茨城の観光マップでは、数ある観光地の中からどれを使用するかの選定に時間をかけ、説明文の簡潔さも遊学ルートマップ同様よく考えました。



2月17日
北茨城市商工観光課へ作成した
ルートマップを寄贈しました。



代表：森田 耕平 人文社会科学部 2年

主な活動地域：大洗町

～大洗応援隊！とは～

大洗町を盛り上げるべく、①カフェ運営②イベントの企画・運営③商店街の情報発信を軸に、茨城大学の学生を中心に大洗町の方々と連携して活動を行っている団体です。



①**カフェ運営** 大洗町の髭釜商店街の空き店舗を「ほげほげカフェ」と命名し、月に1.2回程度運営しています。

“ほげほげ”とは、茨城弁で「心置きなく・心ゆくまで」という意味です。ほげほげカフェでは、お客様にこの名の通りに心ゆくまでのんびり落ち着いていただける空間作りをモットーに運営しています。

②**イベントの企画運営** ほげほげカフェで地元の方をお呼びし、茨城県や大洗に関する昔話をしていただく“昔話の会”や、一般の方から参加者を集い、カフェで演奏をしていただく“ほげfes”等、大洗町に来てくださった観光客の方や近所に住む方々に楽しんでいただけるイベントを開催しています。



③**情報の発信** 大洗町商店街の魅力を伝えるため、Twitterでの発信を行っています。また、大洗町の5つの商店街のお店に関する情報を掲載したマップを作成し、無料配布を行っています。毎年、商店街の店舗に直接伺い、掲載内容の変更点を逐次更新しています。現在も情報収集をしています。



連絡先（メール）

hoge hoge.oot@gmail.com

ほげほげカフェ住所

茨城県東茨城郡大洗町磯浜町1060

商店街紹介用Twitter : @hoge hoge_oot

ほげほげカフェTwitter: @oot_hoge hoge



代表：山口 真由（教育学部 養護教諭養成課程二年）
 主な活動地域：茨城県内



日本一つながる学食プロジェクト

つな食って何？

「日本一つながる学食プロジェクト」略して「つな食」は、株式会社坂東太郎様とチームを組んで行うプロジェクトです。茨苑食堂の内外装の提案や企画、メニュー開発を行っています。また、メンバーには全学部生がおり、ともに活動をしています。



試作会の様子



つな食メンバー写真

班構成

- ✿メニュー班：食堂の新メニューや期間限定メニューの考案を中心となって行います。
- ✿企画班：地域の人や学生が「つながる」新たな企画を考案します。
- ✿広報班：企画や新メニューに応じてPOPやチラシの制作を行います。

活動内容

<これまで>

茨苑食堂の新メニューの開発の他、オープンキャンパスでの活動や、茨城県産の食材にこだわった茨城大学70周年記念式典の手土産の考案をしてきました。

<これから>

新メニューの開発とともに、学生だけでなく地元とつながった活動、茨城の良さを伝える活動をしていきます。



茨城大学70周年を
 記念して考案した
 「いばだいふいなんしえ」

代表山口からひとこと

つな食は会議以外でもメンバー同士が仲良く、お互い助け合いながら、楽しく活発に活動しています！学食に興味がある皆さん、学生の力を借りたい皆様、ぜひ一緒に活動してみませんか？

☆メンバー随時募集中！！

毎週月曜日と木曜日の昼休みに、図書館 2F のグループ学習室で会議を行っています。

 <https://www.facebook.com/tunasyokupj>
 茨城大学日本一つながる学食 pj
 @shien_syokudo
 日本一つながる学食プロジェクト



© つなころ

代表：阪井 一仁（教育学部 3年）
 主な活動地域：茨城県水戸市

活動内容

【制作メンバー】

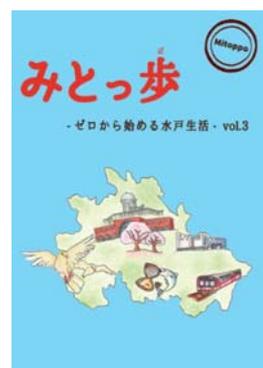
大学4年生 3人、大学3年生 1人、大学2年生 2人、大学1年生 2人 計8人

【プロジェクト概要】

「大学生と地域を結ぶ橋渡し」となるべく、新たに水戸に来た大学生にオススメしたい水戸の魅力を発信するフリーペーパーを作成しています。

【みとっ歩について】

「みとっ歩 - ゼロから始める水戸生活 -」企画は、一昨年水戸市市長公室みとの魅力発信課の皆さまから、お声がけいただいたことがきっかけで、スタートしました。vol.2からは学プロ採択企画として2500部発行しました。今号(vol.3)は3月に5000部発行。「学生目線」を基本としたフリーペーパーとなるよう心がけています。



vol.1



ブログ



Twitter



Instagram



大学生によるものづくり教室の企画と実践

代表：清水喬宏（工学部機械工学科 4年）
 主な活動地域：日立市、常陸太田市、北茨城市

活動メンバー

伊藤研究室を中心に年間3~4回のペースでものづくり教室を開催

活動人数：伊藤・倉本研究室
 総勢49人(令和2年現在)

活動内容：児童を対象とした様々なものづくり、小型電気炉を用いた鑄造等

主な活動場所：茨城県立北茨城特別支援学校
 茨城県立常陸太田特別支援学校
 茨城大学日立キャンパス
 日立市日立特別支援学校
 エコフェスひたち

活動理念

現在、ゲームやテレビなどのバーチャルな体験が多くなり、実際に自分の手で体験できる事が少なくなってきました。それが小学生の理数離れの原因の一つとして考えています。

そこでものづくりでのリアルな体験を通じて、理科や数学・身近な工学などについて楽しく学んでもらう場を提供することを目的とし、金属の面白さを体験出来る教室を開催しています。

本教室は、小学生に限らず、中学生や高校生、保護者、小中学校の先生方にも楽しんでもらえるような幅広い活動を行っています。

活動内容

活動の様子



作品例



代表：中橋彩乃（人文社会科学部、3年）
 主な活動地域：水戸市、宮城県、福島県

茨大東北ボランティア*Fleur*とは、
 東日本大震災をきっかけに結成されたボランティアサークル
 日常+αというモットーを基に、被災地とともに未来につなげる活動、防災を
 広める活動をしています。

活動紹介（一部）

● 茨大生×地域防災プロジェクト

「逃げ地図」を学外の方たちとともに作成し、災害発生時の備えについて学びました。実際に避難所へ行く際の行動を想定することで避難の難しさ、迅速な避難の決断の重要性が分かりました。



● 菜の花迷路

南相馬市の福興浜団さんが主催するイベントで、毎年お手伝いさせていただいてます。年度によってお手伝いする範囲は異なりますが、種まきや当日の運営、片付けなどがあります。



代表：萩原健太(人文社会科学部 3年)
 メンバー：3年(大森彩花、柏崎愛、川崎賢汰朗、木村井泉、久保田雅菜、戸井田杏華、若林怜奈、和知泰雅)、4年9人、高校生サポーター(水戸第三高等学校、水戸桜ノ牧高等学校)
 主な活動地域：水戸市渡里地区、渡里小学校、渡里市民センター、医療法人博仁会フロイデ水戸メディカルプラザ

【プロジェクトの目的】

- ・地域の様々な人たちと出会い一緒に活動することで、茨大生と地域との繋がりやの基盤を作り、継続させる。
- ・茨城大学周辺地域の住民と茨大生の交流の機会を増やすため、茨城大学の所在地である水戸市渡里地区で活動をする。
- ・福祉や健康をテーマにしたイベントを企画・運営する。
- ・渡里地区の高齢者や子ども、医療・介護施設、高校生サポーター、大学生など、様々な世代が参加することで、活気あるまちづくりを目指す。

【主な活動内容】

- ① 地域住民を対象とした実態調査(9月14日、渡里小学校体育館)
 「渡里住民の会」の協力のもと、敬老会の参加者112人に「運動習慣」「医療・健康」「防災」などに関する聞き取り調査を実施
- ② 渡里地区内の被災住宅での災害ボランティア活動(10月24日)
 「渡里住民の会」の人たちと茨大生(1年2人、3年4人)、教員1人による浸水家屋の泥だし・片付け・清掃・引越し準備
- ③ フロイデ内覧会でのポスター発表(10月26日・27日、フロイデ)
 ポスター展示をして、来場者に本プロジェクト活動を紹介
- ④ 茨苑祭でのくれよん工房との共同出店・ポスター展示(11月16日・17日、茨城大学)
 「くれよん工房」の物販のサポート、活動紹介のポスター展示
- ⑤ ふれあい渡里まつりへの参加(12月8日、渡里小学校)
 高校生サポーター(5人)と共同で、子ども向けワークショップを開催、保護者向け・子ども向けアンケートを実施
- ⑥ 地域住民を対象とした実態調査報告会(1月24日、渡里市民センター)
 「渡里住民の会」の役員会で、調査・アンケートの結果報告
- ⑦ 「ハロー!ばるるん館」でのラジオ出演(1月28日、FMばるるん)
 本プロジェクト活動や「渡里住民の会」との交流秘話などを紹介
- ⑧ 「すまいる広がるまちづくりサロン」の開催(2月8日、フロイデ)
 渡里地区の高齢者(13人)・子ども(16人)・茨大生(6人)で混合チームを作り、ポッチャを楽しんだ

【活動の様子】



① 地域住民を対象とした実態調査
 敬老会にお邪魔して「運動習慣」などの聞き取り調査を行った。質問への回答だけでなく、地元のことや回答者自身の暮らし・経験なども聞くことができた。



② 渡里地区内での災害ボランティア活動
 主な作業は、床はがし、泥の除去、家屋の消毒・清掃、家具・家電の廃棄、引越し準備で、重労働が多く若い人の力が必要だと思った。自然災害の凄まじさを痛感した。



⑥ 地域住民を対象とした実態調査報告会
 渡里地区敬老会での聞き取り調査と、ふれあい渡里まつりでのアンケートの結果を、調査に協力してくださった渡里住民の会の役員に報告した。



⑧ 「すまいる広がるまちづくりサロン」の開催
 多世代でチームを作り、ポッチャを楽しんだ。30人以上の住民が集まり笑い声が響く中で一緒に体を動かした。今後も引き続きサロンを開催していきたい。

【社会保険法ゼミナールへのお問い合わせは、以下をお願いします。】
 ・E-mail: syakaihoushouhouzemi@gmail.com ・Twitter: @i_univsh ・Instagram: i_univsh

代表： 齋藤広明
 主な活動地域： 行方市（ふれあい祭り）

【メンバー紹介】(主に茨城大学工学部3名)
 齋藤広明、石寄直樹、黒澤拓真

【プロジェクト概要】

我々の目的は地方の観光業をテクノロジーを用いて解決することを課題としています。

【活動紹介】

今回は行方市ふれあい祭りにLINEを用いたスタンプラリーを導入しました。内容はLINE内にスタンプを貯めていき、景品と交換するという仕組みです。基本的にLINEBotを使用して運営します。今回は約300人の方々に参加していただきました。



左の写真はふれあい祭りに出店しているブースに配置したQRコードです。スマートフォンでQRコードを読み込み、スタンプを貯めていきます。

右の写真はLINEBotを使用していただいた方々の内訳になります。このようなデータを活用し、導入した側にもメリットが生まれます。



代表者: 農学部地域総合農学科3年 武田 迅
 主な活動地域： 阿見町

活動概要について

阿見町にて畑をお借りし、耕作放棄地となっていた土地を畑として有効利用すること、また、阿見町の子どもたち、保護者の方々と一緒に、そばの種まき、そばの収穫、そば打ちのイベントを行い、楽しんで頂き、食農教育について興味を持って頂けるようなイベントになることを目標として行いました。

代表：伊藤ゆうき（農学部地域総合農学科・3年次）

主な活動地域：茨城県稲敷郡阿見町の小学校

FESは、地域の小学校で食育支援を行う団体です！

【メンバー紹介】私たちは農学部の学生23名で活動しています

【活動紹介1】

○小学校で食育教育等のお手伝い

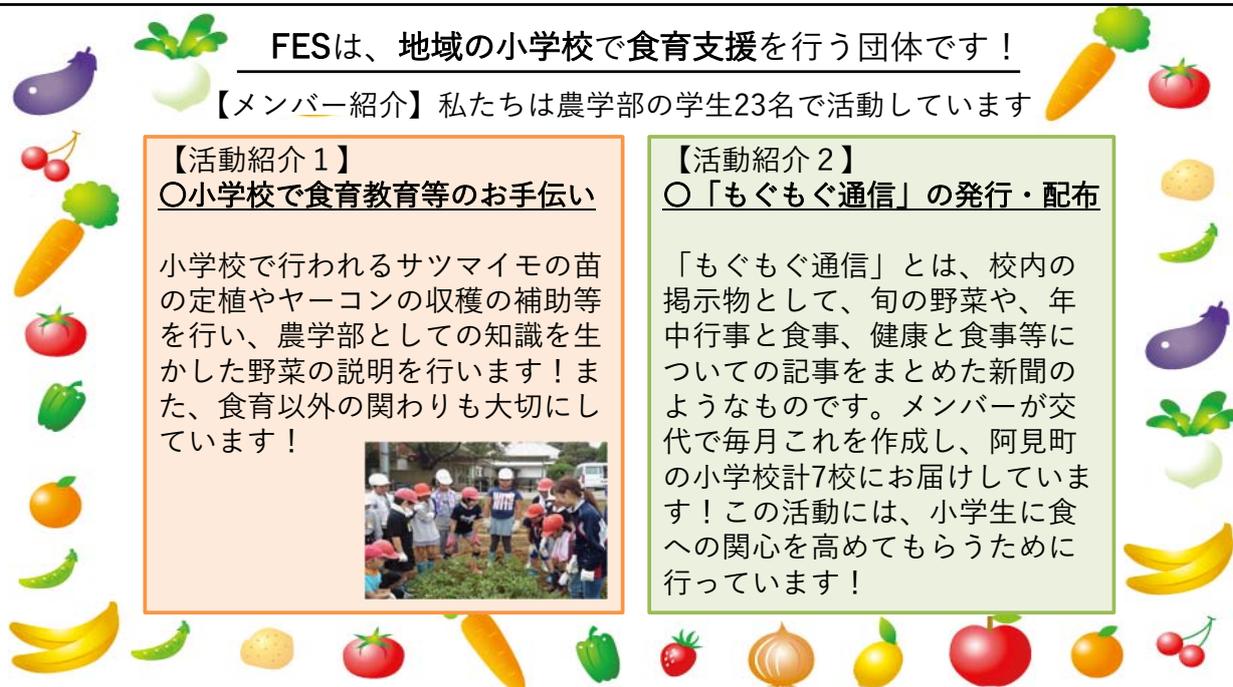
小学校で行われるサツマイモの苗の定植やヤーコンの収穫の補助等を行い、農学部としての知識を生かした野菜の説明を行います！また、食育以外の関わりも大切にしています！



【活動紹介2】

○「もぐもぐ通信」の発行・配布

「もぐもぐ通信」とは、校内の掲示物として、旬の野菜や、年中行事と食事、健康と食事等についての記事をまとめた新聞のようなものです。メンバーが交代で毎月これを作成し、阿見町の小学校計7校にお届けしています！この活動には、小学生に食への関心を高めてもらうために行っています！



「さまーすくーるin大子2019」

代表：黒畑晴喜（教育学部 3年）

主な活動地域：大子町 初原ぼっちの学校

活動内容

さまーすくーるは主に水戸市内・大子町内の子どもたちを初原ぼっちの学校に招待し、2泊3日のキャンプを行います。企画・運営はすべて学生が行い、3日分の食事についても学生がバランスの良い献立を考え、子どもたちがスムーズに作れるようにし、当日は野外炊飯を行います。企画は大子町の自然に触れつつ体を動かすことのできるオリエンテーリングやプレスレットの作成、宿泊だからこそできる夜の暗闇を活かしたレクリエーションやキャンプファイヤー(今年は悪天候のためキャンドルファイヤー)などを行います。

参加人数

子ども 51名

茨城大学学生 84名

教育学部が大半を占めますが、他学部の学生も在籍します。



代表： 河井 孝太
 主な活動地域：常陸大宮市西塩子地区

【メンバー紹介】 河井孝太 小野瀬篤美 岸朱里 小池さくら 軍司真奈 根本隆太

【プロジェクト概要】

本プロジェクトは常陸大宮市西塩子地区において3年に1度開催される「西塩子の回り舞台」を成功させ、盛り上げるために発足した団体です。保存会の方々との協力し4月下旬から10月20日の本公演まで舞台の組み立てや広報活動を行い、本公演では幕間に裏方で舞台のセッティング及び運営に携わりました。

本プロジェクト員がお手伝いしている様子です。公演後は壊してしまうため、一から舞台を作り始めます。屋根や椅子に使う材木である竹の切り出しにも参加しました。



【今年の活動】

- 4月 返礼用お米の田植え
- 7月 茨城学で紹介
- 8月 地鎮祭
地域PBL授業の支援
- 9月 広報活動
材木用竹の切り出し&加工
- 10月 本公演の運営&アンケート



本公演の様子です。地元店の出店が立ち並び、開演から閉演まで多くの観客で賑わいました。私たちも運営側として楽しみながらお手伝いさせていただきました。

まなびの輪

代表：須郷まどか(人文社会科学部 現代社会学科 3年)
 主な活動地域：茨城県大洗町

☆活動概要

まなびの輪では、大洗小学校・大洗第一中学校・大洗町役場・地域ボランティアの方々との協力・連携をしながら多文化共生に向けて多様な活動を行っています！

○メンバー紹介(主に3年生7名、2年生も活躍中です！)

須郷まどか・小林愛鈴・斉藤朱里・田村捺芽・中川珠希・滑川みずき・森亜由美

～活動紹介～

☆日本語教室の運営・開催
 大洗町在住の外国人の方々、日本語を学びたいという意欲のある外国人の方々が日本語を学習できる場所を、地域のボランティアの方々と共に築いています。

☆取り出し授業のサポート
 大洗小学校・大洗第一中学校で行われている「取り出し授業」に「日本語指導サポーター」として参加！
 外国にルーツを持つ児童生徒の学習支援をしています。

☆スピーチコンテスト
 各自治体のご協力のもと、外国にルーツを持つ児童・生徒が自分の夢や思いを日本語でスピーチする「日本語スピーチコンテスト」の運営・開催を行っています。

☆大洗町の八朔祭と盆踊りへの参加
 世界の料理の販売やフェイスペイントのお手伝いを通して地域の方々や外国人の方々との交流を楽しむことが出来る貴重な活動です。



五浦遊学ルートマップ作成プロジェクト

13

代表： 三上りか（人文社会科学部 3年）
主な活動地域：水戸市及び北茨城市

活動内容

【メンバー】

茨城大学4年生(1名)、3年生(1名)、2年生(1名)、1年生(2名)の計5名

【プロジェクト概要】

北茨城市役所等と連携し、五浦の美術文化及びその魅力を発信する。
また、茨城県北地域の復興を目的とした活動を北茨城市にゆかりのある岡倉天心・横山大観・菱田春草らを取り扱っている『明治東京恋伽』とのコラボを通して、行う。

【主な活動内容】

表面は天心記念美術館から五浦美術研究所までの道のりを各ポイント写真付きで紹介し、美術館から研究所への客足増加を目指した。裏面は北茨城から水戸までの観光地をいくつか挙げ、表面と同じく写真付きで紹介している。2020年2月17日には北茨城市役所を訪れ、ルートマップの寄贈を行った。今後は、観光案内所など多くの場所で設置・配布される予定となっている。



【表面】



【裏面】

水戸堀町・ひたちなか市における地域資源の活用

14

代表： 畠田雄介（工学部 2年）
主な活動地域：茨城県ひたちなか市、那珂湊地区

〔活動紹介〕

ひたちなかは、地域の実情や課題を知り、**地域でやりたい**と考えたことを連携先の皆様と協力して実行することで地域活性化、**魅力発信**などへとつなげていきます。

また、地域での活動に他の学生を巻き込んでいくことも目標としています。そのため、学内外のさまざまな方の力を借りて、学生（よそもん）が**地域の人たちとうまく協働**していく方法を模索しています。地域に出た学生が**魅力的な地域貢献のやり方**を実践し、**多大なメリット**を得られるような場づくりを目指しています。

〔活動の一例〕

- ・廃校施設で「みなとの寺子屋」の開催
（恒例イベントで、R1年夏は教育実践系サークルの「千の星」の皆さんを招いたコラボ開催）
- ・学生受け入れ先の整備、研修
（地域の催し等の運営に参加、ノウハウなど学ぶ
地域資源活用に関する話し合いへの参加など）



※当面は、主体として活動できるメンバーが少ないため、情報発信や連携先との関係維持を主な活動とします。ひたちなかは地域志向系の講義でよく取り上げられるので、そこで興味を持った学生が実際に活動してみたいと思った時の一助となれば良いと思います。

大洗応援隊！

15

代表： 森田 耕平 人文社会科学部 2年
主な活動地域：大洗町

【大洗応援隊！とは】

大洗町を盛り上げるべく、①カフェ運営②イベントの企画・運営③商店街の情報発信を軸に、茨城大学の学生を中心に大洗町の方々と連携して活動を行っている団体です！

【活動紹介】

- ・大洗町の髷釜商店街の空き店舗を「ほげほげカフェ」と命名し、月に1.2回程度運営しています。
- ・クリスマスやバレンタイン等、季節のイベントの際には特別メニューの販売をしたり、一般の方の中から参加者を募集しカフェ内で演奏をしてもらう“ほげfes”などのイベントを団員で企画・運営しています。
- ・Twitterを利用し、カフェの運営日や商店街の紹介を行っています。

商店街紹介用Twitter : @hogehoge_oot
ほげほげカフェTwitter: @oot_hogehoge



日本一つながる学食プロジェクト

16

代表： 山口 真由（教育学部 養護教諭養成課程 二年）
主な活動地域：茨城県内

☆つな食とは？☆

日本一つながる学食プロジェクト」略して「つな食」は株式会社坂東太郎様の皆様のご支援の下、同社と茨城大学の学生が連携して茨城大学水戸キャンパス内の茨苑食堂のメニューや商品の開発、食を介して人と人が「つながる」企画を行っています！
学部の垣根を超えた学生同士で運営をしています！！

☆今年度の活動☆

茨城大学70周年記念式典参加、茨城放送ラジオ出演
新お土産いばだいふいなんしゅ開発、オープンキャンパスでのかき氷販売
定番メニュー「つなころのころから定食」販売（初の通年メニュー）
秋のから玉黒酢丼 販売
茨苑祭でのいばだいふいなんしゅを使用したスイーツ販売
食と農林漁業大学生アワード 参加 等

◎メニュー開発に関しては、
原価計算、広報用ポスター作製、
写真撮影等において学生が自分たちで行い、
自由度が高くありつつ責任を持って活動を行っています！
いばだいふいなんしゅは茨苑食堂でのみ販売しています！
是非茨苑食堂にいらしてください☆



代表： 3代目 金城有香（人文社会科学部3年） 4代目 木村美華（人文社会科学部2年）
主な活動地域：茨城県水戸市

海砂輝は令和2年5月で結成5周年となる、茨城大学のよさこいサークルです！

【活動内容】

- 常陸国YOSAKOI祭りなどの祭りに参加
- 老人ホームなど各施設や各イベントでのよさこい演舞依頼
- 新歓祭や茨苑祭などのよさこい演舞

etc.

最近のイベントでは、
1月18日(土)に老人ホームにて
よさこい演舞をしました！
演舞後、お昼ご飯も頂いて
楽しかったです！(^ ^)v



オリジナル曲は一昨年作成し、オリジナル衣装
は昨年作成しました。早脱ぎ有りです！

毎週月金17：35～19：00、教育学部B棟の広場で練習しています！

踊り子、旗師、マネージャー等いつでも新メンバーも募集しておりますー！

問合せ先

国立大学法人茨城大学 社会連携センター

(研究・社会連携部社会連携課)

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

TEL : 029-228-8088

FAX : 029-228-8495

E-mail : renkei@ml.ibaraki.ac.jp

HP : <https://www.scc.ibaraki.ac.jp>